

自然實際に隔たり空想に流れたるが第二期に移りては作者も漸く世間を知り世間の人間を知りはじめて其の想像も自ら實際的となれり。此の時期に在りては作者は専ら史劇を物せしが其の結果は彼れをして空想界よりも實際世間に幾多劇詩の好材料あるを悟らしめき。此の期の作は概して雄渾勁拔なり。

第三期。第二期の終に於いて作者は人生の悲哀を自家の身の上に経験せり即ち其の愛子を失ひ父を失ひ更に又朋友に對して快らざることありき。此等の事實多少因縁となりしにや第二期に至りては優雅なる戀愛雄壯なる戦場のさまなどを寫すをやめて深く人心の根底を探らんと試みたり表のみきらびやかなる人生の皮相を離れて其の暗黒なる裏面に徹底し事物の神髓を研究し人間の害惡といふ不可思議物を思索せんとせり。されば此の期の作は何れも沈痛激切なり。

第四期。沈痛激切なる悲哀の大波瀾は第四期に至り漸くに收りて平穩に復し結びてとけざりし陰雲も漸くに散じ盡くして再び鮮なる日光を漏らすに至りぬ。

一度大波瀾を経過せし作者が胸宇は層一層濶大となり沈着となれり。今や彼れは人生に於ける大秘密を感得せり何ぞや一面に於いて世間と接觸し他面に於い

て世間の外に超然たること換言すれば一方に赫奕たる理想の光明を眺めながら他方に於いて世間と悲喜歡哀を共にすると是れなり。彼れの此の大秘密を感得せるや理想の絶頂に立ちて人生の大海に於ける喜怒哀樂榮辱得失の紛然雜然たる波瀾をば兩頬に同情の笑みを湛へて靜に瞰おろし胸中自ら悠々たりき。第四期に屬せる諸作は何れも作者が當時の主觀の條を表白せざるなし。此等諸作は人に教ゆるに堅忍不拔の精神を養うて以て心の和を保持し人間の弱點を看破して以て他人の過誤は之れを寛容し己れの過誤は後悔して更に奮進すべきを以てす。此時期のシェークスピアは純然たる『あらし』中のプロスペロ也。然り而して此の最後の時期に物せられたる傳奇劇は何れも現世に神秘不可思議の動の存することを表白す詳言すれば人間は境遇と煩惱とに制せられて五里霧中に彷徨するが如きものに非らずして其運命は神に左右せられ而して神の消息は夢幻の如き不可思議の作用によりて物質の上に見るものなりとの觀念を表白す。蓋しシェークスピアは晩年に至り吾人の周圍には思議すべからざる或者存在し而して其の者は神聖にして吾人に幸福を與ふる者なりと信ぜしが如し。

さて以上の諸作を一括して表となせば左の如し

脚本の部

『タイタス、アンドロニカス』

(一千五百八十八年より同九十年までの間)

『ヘンリー六世』上篇

(一千五百九十年より同九十六年までの間)

以上を改作時代の作とす

『ラヴス、レオポス、ロースト』

(一千五百九十年)

『錯誤の喜劇』

(一千五百九十一年)

『エロナの二紳士』

(一千五百九十二年より同九十三年までの間)

『真夏の夜の夢』

(一千五百九十年より同九十四年までの間)

以上を初期の喜劇と稱す

『ヘンリー六世』中、下篇

(一千五百九十一年より同九十六年までの間)

『リチャード三世』

(一千五百九十三年)

以上を初期の史劇と稱す

『ロミオとジュリエット』

(一千五百九十一年、或は謂ふ一千五百九十六年より同九十七年までの間)

之れを初期の悲劇と稱す

『リチャード二世』

(一千五百九十四年)

『ジョン王』

(一千五百九十五年)

以上を中年の史劇と稱す

『エニスの商賈』

(一千五百九十六年)

之れを中年の喜劇と稱す

『ヘンリー四世』上、下篇

(一千五百九十七年より同九十八年までの間)

『ヘンリー五世』

(一千五百九十九年)

以上を後期の史劇と稱す

『悍婦ならし』

(一千五百九十七年?)

『井ンドソルのをかしき女房等』

(一千五百九十八年?)

『マツチ、アヅー、アバウト、ナツシンク』

(一千五百九十八年)

『アズ、ユー、ライキ、イット』

(一千五百九十九年)

『第十二夜』

(一千六百年より同一年までの間)

『オールドズ、エル、ザット、エンズ、エル』 (一千六百一年より同二年までの間?)

『メジユア、フオア、メジユア』 (一千六百三年)

『トロイラスとクレシダ』 (一千六百三年内或は同七年改訂)

以上を後期の喜劇と稱す

『ダユリアス、シーザー』 (一千六百二年)

『ハムレット』 (一千六百二年)

以上を中年の悲劇と稱す

『オセロ』 (一千六百四年)

『リア王』 (一千六百五年)

『マクベス』 (一千六百六年)

『アントニーとクレオパトラ』 (一千六百七年)

『コリオレナス』 (一千六百八年)

『アセンスのタイモン』 (一千六百七年より同八年までの間)

以上を後期の悲劇とす

『ペリクリーズ』 (一千六百八年)

『シムペリン』 (一千六百九年)

『めらし』 (一千六百十年)

『冬の夜がたり』 (一千六百十年より同十一年までの間)

以上を傳奇劇と稱す

『ツウ、ノーブル、キンスメン』 (一千六百十二年)

『ヘンリー八世』 (一千六百十二年より同十三年までの間)

以上を断篇と稱す

詩歌の部

『非ナスとアドニス』 (一千五百九十二年?)

『リウクリーズ』 (一千五百九十三年より同九十四年までの間)

『短歌集』等 (一千五百九十五年より同六百五年までの間)

此の中『ハムレット』『オセロ』『リア王』『マクベス』の四篇を通例四大悲劇と稱したれど尙別に甚くとも十餘篇ほどはシェークスピアの傑作として見るべくいづれ也

ろかなるは無しまた實に四大悲劇のみにては此の大詩人の秘蘊を窺ふに足らざるなり。ハドソンの嘗て『ハムレット』を評して最も少く此の書を読める者最も多くハムレットを知り得たりと爲すに似たりといへるたゞちに移して廣くシェークスピアを讀む者の上に適用し得べしざるは僅に彼れが作の一二を走讀せる者はシェークスピア豈知り難からんやといへれど彌々細に咀嚼せる者は彌々其の深邃にして幽微玄妙なるを認め來たる。カーライル曰はく人十歳にしてシェークスピアをよるこび七十歳にしてなほ其の趣味の津々たるをおぼゆと。シェークスピアの作は實に大洋の如くにいと深くしていと廣し、かるが故に彼れが壯時の著作たる短歌集のみを取りて之を眞にシェークスピアが實情の反映なりと假定し而して彼れを探らんと試みたる者、あるは曖昧零碎なる口碑に據りて彼れが爲人を推定せんと試みたる者、若しくは自家の定見を彼れが作中に讀みて徒におのが影を追求せる者は皆ことごとく失敗せり。シェークスピアは彼の偏狹なる主觀の詩人と同じからず其の描寫する所は客觀の自然と客觀の人間となり。彼れは自在に自家の理窟を解脱して無私無我の筆に客觀の諸法相を畫きたり。彼

れは人世の暗黒なる方面をも明快なる方面をも涙をも笑をも千差の性情をも万別の煩惱をも其の三十餘篇の劇中に悉く之れを描破したり。彼れは第二の自然なり第二の能造なり。

第十三章 ペンダミン、デヨンソン

新文明は毎に新文學を生ず。詩人は俗に先ちて當代を表白す、是れ其の時に豫言者と名けられ若しくは能説者と呼ぶる、所以なり。而して彼等が當代の理想又は普通觀念を表白し盡くしたる時は概して時勢の一變せんとする時なりすなほ該文明の窮極期なり。『源氏物語』成りて藤原氏の盛極まり曲亭みまかりて幕府竟に衰へたるまた此の例に漏れずといふべし。此の故に大詩人のいづるは或は革命の兆たることあり大詩人は豫言者すなほち時勢の序を作るものか、はた其の跋を綴る者か未だ容易に斷ずべからざるなり。まかしながら所謂詩人にも大小あり僅に一代の理想及び觀念の幾分のみを表白する者と其の全分を表白する者との別あり。前者は十百を以て數ふべく後者は常に一二にとゞまる。シェークスピア、デヨンソンの如きは後者、マアロウ、エブストル、フォード、マッシンシャル等は前者

也。前者は先唱者にして後者は連唱者也其の歌ふ所は同類なれども一は全を歌ひ一は分を歌ひ一は先じて歌ひ一は後れて歌ふ優劣の存する所以なり。もとよりデヨンソンの才分はシェイクスピアに比すべくもあらねど若しエリザベス劇壇に於いてシェイクスピアの對敵たりし者を求めば彼れの外にあるべからず。彼のポーモントやフレッチャルや巧はすなはち巧なりと雖も要するに第二流以下の作家、彼等のシェイクスピアに於けるは出雲半二等の老近松に於けるが如しデヨンソンの巍然として別に一家をなしシェイクスピアに對峙せしに似ざるなり。フルラル二大家を評して曰はくデヨンソンは西班牙の大艦艦の如くシェイクスピアは英國の軍用艦の如しと。彼れは莊嚴仰々べく此れは鬼沒神出彼れは不動山の如く此れは變幻自在殆ど端倪すべからず。

ベンヂヤミン、デヨンソンは蘇國エストミンストルの一僧の子

俗にはベンヂヤモンソンと稱す猶井リナム、シェイクスピアを呼びて井ル、シェイクスピアといへるがごとし。或は是れを以て作劇家の時人に輕ぜられし證なりとするものあれどいかにや、なかばは親愛の意をも含めるならん必ずしも侮蔑の意にはあらざり。

一千五百七十三年父の死後に生まれき。かくて其の母の一煉瓦師に再嫁せし後は義父の職を助くるかたはラエストミンストルの學校に入りてまばらく學業を修めたりしが煉瓦師の業を厭ふのあまり中ごろ出奔して兵籍に入り和蘭地方に従軍して西班牙人と戦ひ十九歳にして本國に歸りやがてケムブリッヂの大學に入りき。たゞし同校にどゞまりしはいと短き程なるべし何となれば翌年すなはち二十歳の時妻を娶りついでロンドンにいいで俳優となりきと傳へたれば也。かくて後また轉じて劇の作者となり或はひとりにて或は他の作者と共に劇詩數十篇を綴りたり。其の頃同輩と口論の末に決闘してみづからも傷き敵手をも殺しこれが爲一時は獄に下されしが僧侶の庇蔭によりてゆるされその後専ら作劇に従事せり。其の名高き作『Every Man in his Humour』「人々のまじり」の氣質は一千五百九十六年はじめてロンドンにて演ぜられき。此の作其のはじめは人物服裝景致などはすべて英國のを寫しながら時處は伊太利の事蹟のやうに取りなして作したり。こは嘲世諷俗の作なるゆゑさすがに憚りてしかせしなるが後には總牀の脚色をも英國のことにひきなほせり。デヨンソンが作は悲劇喜劇あはせて十

八篇の外に間劇、假面劇、並びに小品の詩歌あまたあり總じては五十篇の多きに及べり。正劇のうちにては喜劇は前にさくる“Every Man in his Humour”『人さまざま』の氣質』“Volpone”又の名『狐』“The Alchemist”『錬金師』及び“Epicene”又の名『不言女』など其の餘々たる者、悲劇にては“Catharine”及び“Sejanus”尤も世に重ぜらる。

因にいふ假面劇は景と樂と歌との混合より成る時として舞踏をも加ふ。こは十四、五、六世紀間に盛なり興行物の一種にて祝賀祭禮などの場合に行ひしものなり。或は宮中、或は法學院或は大學などにて特に演ぜしともあれば間々神秘劇、教訓劇など、打混して興行せしともあり。やゝ後年にいたりては皇家、紳士の誕生、結婚家の婚禮、外國皇族の來遊等の場合等には歴々ホロイト、ホール(王宮)の大府間にて演ぜられ皇族みづから其の伎にたづまはりしことあり。劇の性質も其の用も幾分か我が能に似たる所ありたゞし正劇にくらぶればすべての結構單純なるものにて科介カキイに深き面白味あるにもあらず作意も大かたは俗にいふ場受ウケを主とし又は寓意を專一とし又は詞句のうつくしきをむねとせり。されば特に傑れたる作ならぬ限は觀者の眼に訴ふるを第一とし衣裳と粧飾との美を競へり。作中にあらはるゝ人物は多くは希臘羅馬の神祇時として「夜」

「晝」『美』『剛毅』などいふ概念を擬人せるもの。假面劇が全盛に達せしはヤエームス一世王の朝也こはヘンリー八世とチャールズ一

世との間に於ける遊戯最盛の時也。皇后も親王も皆みづから演戲せりといふ。祝祭フェスティバル遊戯官の報告によれば王の朝のはじめ六年間に此の爲に費されたる役額凡そ二万一千〇七十五圓以上なりといふ。ヤコンソンは尤も多く假面劇を作りシエークスピアには一編だになし。ヤコンソンの作は二十三篇に及びき。さてヤコンソンの作せしころにはInigo Jonesといふもの舞臺の景畫を工風しLayesといふ者其の樂譜を造りきといふ

さるほどに梨園詩人としてのデコンソンの名はあひくゝに揚がりしが家族の増加するにつれて生計はいよゝゝ困難を加へたり。而して彼れ性倨傲にして自ら尊ぶ念強かりければかりそめにも世に阿り俗に従ふことを屑とせず剩へ其の博く古文學に通じたる餘り動もすれば世の俗作者を眼下に見くだし甚しく嘲罵し若しくは其の作中に俚耳に入りがたき高尚なる議論をほのめかして自家の識見を銜ふの風あり。作者としての彼れが觀客としての世人を見るや兎もすれば教師の學童を見るが如き趣ありき。是れ其の作の俗衆によるこばれさりし一因なるべし。たゞしまたこれが爲に當時の學者社會には推重せられ彼のローリーが創立せしMermaid Clubといふ文人吟客の社中に在りては彼れは常に覇權を握りき。

按ふにベン・ジョンソンが此の闘才場を牛耳を取りしは後年博士ジョンソンが十八世紀の文壇に泰斗と仰がれしに似たるものあり。さて一千六百十九年には時の桂冠詩宗ダニエルに代はりて榮職に就き名譽一代に冠たり是れを彼れが最得意の時なりとす。彼れは剛愎不遜なりしと同時にまた頗る義侠心に富めりき。嘗て彼れが補助となりてものせし脚本「Eastward Ho」といふ作の中に蘇國人を諷刺せる一節ありしが其の立作者たりしマーレストン及びチャアマンはたちまち官の忌諱に觸れて嚴しき刑罰に處せられんとせり然るに該一節は主としてジョンソンの筆せし所なりしかばいたく二作者の冤を憫みみづから名宣りいで、其の罪に代はらんと乞ひ幸にして皆恙なくゆるさるゝを得たりき。ジョンソンが晩年の不幸困難は其の壯時にもまされり。其の刻苦經營に成りし夥多の草稿は不慮の火災に焼き失ひ家計はいよゝゝ不如意となり妻にも兒にも後れて貧困と零落との間に此の世を去りぬ。實に一千六百十八年なりき。かくて希有のジョンソン「Rare Jonson」といふ美名は死後百餘年間英の劇詩壇に轟きたりしが近世シェイクスピア研究の盛なるに及びて劇詩の批評法も一變し時尙も大に革まりした

め其の名次第に地に墮ちたり。當年のベン・ジョンソンと今日の彼れとは其の位置殆ど雲泥なりとも評すべし。但し公平にいへば其の生時にシェイクスピアよりも重ぜられしも失適宜の至りなれど今日の如く見おとさるゝもまた是れ反動の過大なるものなるべし。左に彼れが特質を窺ふの枝折にティーンが月旦の眼目のみを掲ぐ。

ティーンは其の『英文學史』なる「ジョンソン論」の第二章に於て仔細にジョンソンが博覽洽學を證論し彼れは「醇乎たる文壇の鯨鯢」なりと評し且つ曰はく「彼れは戰闘に用ひらるゝ東洋の巨象に似たり櫓を負ひ武夫を負ひ戎具機械を小山の如く背負ひて毫も重しとする氣色なく横縱奔放其の進退の自在なる駿馬の如し」と。こはジョンソンが其の誇衒的文致ともいふべき莊麗誇大なる詞藻を列ねて自在に複雑なる性癖を描破せるを評せる也。ティーンはまた彼れが羅甸美術に精通せる由を叙説したる後彼れを他の同世詩人に比して曰く「他の詩人エリザベス朝のは概して夢想家空想家ともいふべきものなれどジョンソンは殆ど論理家論理家とも稱すべし」と。是れ彼れが作の條理整然たるを評せるなり。次いでまた論じて曰はく「若し彼れ

を以て其の脚色と文致とに於て他の同世詩人に優れるものとせば他の點に於て彼れは彼等に劣れりといはざるべからず、蓋しヂヨンソンは生靈を創作し得る作家にあらざれば餘り甚しく規律に拘泥し餘り甚しく理論に偏局せり即ち彼れは偏理家なりと。及曰はく「人間の性情は複雑多端なりひとへに相續的のみに人の諸成分を観察する論理家の到底究め得ざる所のものあり。思議するに已に難し況や之れを打して一九となし活動云爲せしむることをや。假空の人物を創作して活動呼應せしめんとせば必ずや神來を要す又狂熱なかるべからず作家此の二者を兼具すれば詩思夢裡に動き作ちのづから成る。而してヂヨンソンには此の神來欠け狂熱欠けたり彼れはある一概念を捉らへ來たりて之れを人に擬し之れに象を與へさて種々の名を附するを得しのみと。テーンの説よくヂヨンソンの短所を悉せり。其の觀察の精刻其の觀念の深邃其の詞藻の富其の諷刺の利彼れが長所もまた尠からずと雖も到底劇詩家といふ資格よりいへば此の根底の短を償ふに足らず彼れが名の近世の劇詩壇に推重せられざるゆゑあるかな。

第十四章 シェイクスピア、ヂヨンソン以後

ピール、グリーン、マアロウ等の輩出せし時代を英國劇の第一期とすればシェイクスピア、ヂヨンソン等の出でし時を其の第二期即ち全盛期と名づくべし。さて之れに次ぐ第三期に於て吾人が特に注意すべきはポームント及びフレッチャル、エプストル及びミッドルトンとす他は必しもいふに足らざるべし。此のうちミッドルトンは純乎たるエリザ文學の遺脈を持續せる作家なれどエプストルはあづから別に一家を成し又他の二作家は就中フレッチャルの如きはシェイクスピアの衣鉢を傳へたると同時に一種の新氣脈を代表し後の諸作家就中第四期の作家等の師表たりき譬へば我が國の半二出雲等が巢林子の衣鉢を傳へながら別に作家としての一機軸を出だして戯曲の形式を定めたるが如し。さて此の二作家は常に協力して作せし故古來ポームント、フレッチャルとならば稱して都合五十二篇の脚本をばすべて合作と見做したりしが最近の考證によれば最も力を盡くしはフレッチャルにしてポームントは殆どスケたるに過ぎざりしものゝ如し。ポームントは其の名をフランシスといひリーストルシヨアの産一千五百八

十六年(一裁判官の子、オックスフォード大學にて學を修め大學を退きて後程なくフレッチャルと相知りしもの如し。フレッチャルはロンドンの一僧正の子、ケムブリッジ大學にて教育を受けきといふ。フレッチャルは其の友よりも十歳の兄にして其の疫病にて逝りしも(一千六百二十五年)ポームントが死後十年にて前者は五十未滿後者は三十に滿たさりしなり。かくポームントは早世なりしゆゑ俗に合作と稱せらるゝものうちにも彼れが與らざりしもの多かるべき筈なり。最近の査定によればポームントはおもに批判家原按者としてフレッチャルを助けしにて實際筆を取りしは後者なるべしといふ。而して通常二作家の傑作なりと稱せられたる『處女の悲劇』(The Maid's Tragedy) 及び『フィラストル』(Phylaster)の二篇は明にポームントに負ふ所多く彼のシェイクスピアのフレッチャルと共に作しきといふ晩年の作『トゥ、ノーナル、キンズメン』の如きも同じくポームントに負ふ所多しといふ。要するにフレッチャルが筆のポームントが批判によりて助けられしは少小ならざりきと見えて其の獨力に成れるもの若しくはマッシュンヤル、ロウリイなどいふ他の作家等と合作せしものを見れば多少明かなる差等あり。

第一作意結構の散漫なるのみならず文辭も句調も人物の性質もすべて靈活の妙を減じ何となく力無げに感ぜらる。又思ふにフレッチャルはむしろ喜劇的技倆に長じたるも悲劇の才には乏しかりしに似たり悲劇的分子は重にポームントの供給せしならんといふが最近の通説也。二人の合作に係るものも道念の調子は總躰に低く彼のマアロウの作若しくはシェイクスピアの作に見るが如き能ふまじきを敢てせんとする偉大壯烈なる性情は殆ど其の影もなく人物おほかたは平々凡々なり。往々可憐なる女性を描いて人情の秘奥に觸るゝことあれども到底第二流以下の作、其の人を感激するの力よりいへば同代の作家ミッドルトン、エプストルにも及ばざること一等ましてヤシェイクスピアのに比すべからざる勿論なり。フレッチャルの作は人を娛まするを得れども人をして天外に遊神せしむる力なし。かくはいへどもみだりに上にいへる所に泥みてフレッチャルポームントをいたく見おとし讀むに足らぬ者と思はんは、猶巢林子の作意のみを愛し、出雲松洛等の妙所を看過せんが如し。蓋しフレッチャル、ポームントは其の學識の上よりいへばはるかにデヨンソンにも劣りたれど其の才藻の豊富にして快活なる變

化に富めるは彼れの遠く及ばざる所、就中セリフの流暢にして解し易き滑稽諧談の筆のシェークスピアに似て圓滑なる、雄大悲壯の人物こそ描かざれ可憐悲哀の情致を寫すに巧なるなど間、シェークスピアの面影をしのばしむるものあり只趣向の動もすれば荒唐無稽なる、あまりに着想の奇を求めて殘忍又は不倫に流れたる、其の他おしなべて道念の高からざる等はあたらしき彼等の瑕疵なれどもこれはエリザ朝文學の通病なれば強ちに咎むるは酷なるべし。彼等の作の重なる者は前に掲げたる二作の外に “King and no King” “Bouduca” “The Laws of Canly” (以上悲劇) “The Woman-hater” “The Knight of the Burning Pestle” “Honest Man's Fortune” “The Coxcomb” 及び “Captain” (以上喜劇)あり。これらは皆合作なりと傳ふ。尚フレッチャルの筆に成れりといへる作に三悲劇九喜劇あり。其のうち傑作と見做されたるは “The Chances” “The Spanish Curate” “The Beggar's Bush” 及び “Rule a wife and have a wife” なり。

トマス、ミッドルトンは悲劇作家たるの資格よりいへばポーモント、フレッチャルよりも上、或はエナストルよりも上、大なる運庭はありながらも尙最もシェークスピアに接近せる作家なりとは通常批評家の許認せる所なり。現にセ、ンツベリーの如きは其の『エリザ文學史』に於て彼れが作 “The Changeling” を激賞し其の全体こそ不完全なれ其の部分の妙をいへばエナストルが “The White Devil” と “The Duchess of Malfi” とを除き去らばシェークスピア以後の作に此れにまさらんもの絶えて無かるべしといへり。ミッドルトンはロンドン紳士の子にして一千五百七十年ころに生まれ十六世紀の末ごろ専門作家となり一千六百二十三年其の作 “The Game of Chess” の故に罪を得一時獄に下されしが赦されて後ニウイントンボックに居住しそこで同二十七年にみまかりきといふ。

ミッドルトンが作は概して合作になりしもの多ければいづれを其の獨特の技倆とも判じがたしと雖も其の才の頗る多方面にして喜劇にも悲劇にも拙からざりしはまるけし但し其の多數はいづれも諷刺的喜劇其のうち幾分は地名人名等を外國に借りてロンドンの風俗を諷刺せるものなるを思へば彼れはむしろ滑稽諧に秀でたりしに似たり。 “Blurt Master Constable” “Michaelmas” “A Trick to catch the Old One” “The Family of Love” (海浄教徒の諷刺) “A Mad World, my Master” “No

Wit no Help like a Woman's" "A Chaste Maid in Cheapside" "Anything for a Quiet Life" "More Dissembler besides Women" 此等は皆喜劇なり。もとよりエリザ劇の通弊として此等の作に見ゆる道念は決して高尚なりとは稱しがたく趣向脚色も不自然なる所多く今日の心をもて見ればうなづきがたきふしきはなりと雖も人物はいづれも活動して巻を終るまでも讀者を倦ましめざる妙あり。但しミッドルトンのシェイクスピア及び他の同代作家に異なれる一點あり彼れの作にては陋劣卑しむべき人物も高雅愛すべき人物も殆ど無差別に作者の筆に醜弄せられ往々にして悪人のかた全勝を制しそのまゝ劇の局を結ぶことあり。あらはなる勸善懲惡の旨が必要なるにはあらねどミッドルトンが作意の如きは常職のうなづく能はざる所なれば讀者は之れを讀了して兎角に平なる能はざる感あり。蓋し彼れが人生に對する觀念の尙いまだ至らざりしが爲か。此くの如くミッドルトンは頗る滑稽に長じたりしと同時に "The Mayor of Queenborough" 及び "The Changeling" の二篇に於て其の悲劇的技術をも示せり。彼れは當時の諸作家にひとしく純粹なる悲劇を是ならずとせしめ此等二脚本を作せし折にも滑稽劇の作家ロウリーと協力し其の喜劇的部分を綴ることは専らロウリーに委ねざりし。隨うて悲劇的部分と喜劇的部分とあまりにいちぢるく際だち全昧の上よりいへば所謂最も不具なる圓滿の作となれる趣あり而も "Changeling" の女主人公 Beatrice 及び其僕 De Flores の如きは沙翁以外稀に見る所の好性格就中デフロールの性格の如きは第二のイアゴとも稱しつべし。而して脚色はた頗る複雑若干の瑕疵を度外に置きていへば眞に有數の好悲劇なり。其の他『マクベス』と對照して味へば一種の興味ある "Witch" といふ劇全昧よりいへば "Changeling" にも優れりといふ "Women Beware Women" といふ作チャールスラム一輩のために激賞せられたりし "A Fair Quarrel" 及び "The Spanish Gipsy" など皆彼が有名の悲劇なり。

案ずるにミッドルトンは専ら營業的に作せしがゆゑに深くは構案に意を留めず達者を第一となせりしにや此れ恐らくは彼れの作に疵瑕のいちぢるき所以ならんか。前に擧げたる悲劇のうち若し只些の經營をだに加へしならばシェイクスピアが傑作にも匹敵すべしと思はるゝもの三四あるを孟浪筆を下し不注意にかき

流したるがため憾むべき許多の破綻を生ぜり。不注意はミッドルトンが第一の缺點なるべし。然るに此の缺點なかりしため嶮然頭角を當時にあらはし、ミッドルトンと相ならびてシェイクスピア以後の稀れ者と稱せられ、ハズレットには Noble minded とたゞへられ、就中近世の詩人批評家等に頗に推重せらるゝものをチョンエナストルとす。

エプストルは其の生死の年月さへたしかならぬ程なれば其の傳は知るに由なし。吾人は只彼れが十七世紀の間に生活し、重にデッカルと協同して作劇に従事し、甚だ遅筆なるを難せられし時、ユーリビザースの例を引きて自ら回讒し、"The White Devil" 及び "The Duchess of Malfi" "The Devil's Law Case" 及び "Appius and Virginia" の四篇に其の獨得の技倆を示し、久しく等閑視せられたりし後、漸く其の價値を認められて英國劇壇の文學史に其の名を留めたりといふことを知るのみ。さて此の四脚本のうち末の二作はいふに足らず、前二篇は眞個有數の作なり。就中 "The White Devil" はテームス、非、ホルン、セインツベリー等の驚歎して措かざる所、こゝに其の概評をも引抄する能はざれど、女主人公 Victoria Corombona の性格の如きはシェイクスピアを除くの外は決して描畫して斯くの如くなる能はざる所ならん。而して其の怖ろしさ、凄さなどいふ趣を寫す筆に至りては、たゞちにシェイクスピアに接近せりともいふべし。

上に挙げたる四家の外に第三期の作家としては、ハイウッドあり、デーあり、ツールヌールあり、第二のマアロウとたゞへられし、オルツ、チャブマンあり、チョン、マストンあり、井リアム、ロウリーあり。さてまた第四期の作家としては、一千六百二十年に其の初作 "Virgin Martyr" をいだし、マッシュヤル、其の同世作者にして同二十年に其の處女作 "Lover's Melancholy" をいだし、さて五年の後、シェイクスピア以後に於ける史劇の白眉と稱せらるゝ『ヘルキン、チーベック』を著し、且つ有名なる "Broken Heart" を作せし、チョン、フオード、一千六百六十六年に逝りし、ゲームス、シヨルレー、一千六百三十五年に逝りし、トマス、ランドルフ、ベンチョンソンの學僕なりきと傳へられたるリチャード、ブローム、一千六百三十九年より同四十三年までの間に盛えし、ヘンリー、グラブソルン、後にドライデンと共にシェイクスピアの作を添削せしソル、井リアム、ダモナント(一千六百六十八年死)、一千六百四十一年に逝りしソル、ヂ

ジョン・サクリンクなど前後輩出せし名作また乏しからずされど其の劇詩としての價値は次第に下落せしや争ふべからず。按ふに劇壇文學漸衰の兆はシェイクスピアの生時だに已に見えにき彼のベンチャミン・ジョンソンの如きは件の漸衰の端を開きしものにてデュームス・ショルレルの如きは實に極衰期の代表者にして所謂エリザベス劇の殿たりしものなり。ショルレル以後劇壇寂として聲なく梨園は一時閉鎖せられたるぬ蓋し千六百四十二年以後は兵馬倥傯たる内亂の時代にしてもとより藝術に利ならざりしに内亂平定後の清教徒政府は尤も嚴峻なる梨園社會の敵なかりしかば演劇及び興行物は悉く禁止の命を蒙り俳優作者は爲に糊口の途を失ひ或は他に職を求め或は地方に旅興行して辛うじて一時の飢渴を凌ぎぬ。然るに同五十六年にソル、非リアム、デモナントが敢て法令を犯して首都ロンドンにて其の新作の樂劇“Siege of Rhodes”といふを興行せしめし以來劇運やうやく挽回せられ王政復舊の機ありしと共に時勢全くあらたまり又も演劇の流行を來たしき。さもあれデモナント以後の劇は全く従前のエリザ劇とは質をも系脈をも殊にしたればこゝに附記すべき限にあらず。

第三篇 内亂時代の文學

第一章 内亂時代の範圍

英國の内亂時代とは政治史に在りては重に官民軋轢の時代を指せるなれど予は英文學變遷の時期を區劃する便宜上よりこゝには之れをもて一千六百二十五年より同七百年までを掩ふ稱となせり何となれば一千六百二十五年(將軍家光就職の第三年すなはち寛永二年)は政治上に於ては英國内亂の主動者たるチャールズ一世王即位の年、文學上に於てはエリザ朝最後の名家フランシス・ベーコン死去の前年、内亂期の大詩人ジョン・ミルトンが其の處女作を公にせし前年なればほゞエリザベス文學の最終年を以て目すべく又一千七百年(光圀薨去の年元和十三年)は即ち十八世紀の第一年にして十七世紀文學と十八世紀文學との過渡を代表せるジョン・ドライデンが逝去の年なればこそを十八世紀文學の起頭となさんこと最も適當と信ずればなり。さればこゝに云ふ内亂期は政治上に謂ふ内亂の時代(即ちチャールズ一世の朝を含むのみならず其の子チャールズ二世が佛より歸りて一旦廢せられレスチュアールト王統を舊に復せし復位期^{Restoration}其の弟ジェームス二世が再

び民望を失ひて位を逐はれし第二の革命期すなはち名譽革命の時代をも含めり故にくはしくは復位期以前の文學は之れを第一期即ち正當の内亂時代文學とし復位期以後のは第二期即ち復位期文學と名づくべきなり。そもくエリザベス朝の英文學は前にも已に説ける如く文藝復興の餘波と擴充膨脹する國家の氣運とがはしなくも投合して醸しだせるにて一時其の盛を極めたりし由は上に叙説せるが如くなるが文藝復興熱に伴へりし異教的情操の次第に南方の人心を腐蝕し流弊漸くいちじるく教義道德の本山たりし羅馬教會の壊殘するに及び宗教大革新の必要は歐洲列國に感ぜらるゝに至りたり。かくて偉人ルーテルのいで、激しく本山の教會を攻撃しプロテスタントズムといふ新基督教を開くに及びて氣運竟に一變しエリザベス朝の末ころまでは歐洲大陸の風潮に常に後れて觸るゝを例とせし英國の如きも全く其の波濤に浸さるゝに至りき。所謂内亂時代に一大主動力として活動せし清淨教徒の如きは此の宗教革新の精神を最も鋭く代表せりし者の一なり。按ふに所謂内亂は一面より觀れば王家と民衆との軋轢なれば事専ら政治上に關するに似たれど其の由りて來たる

跡を探れば腐敗せる舊宗教思想及び舊道義思想と新宗教思想及び新道義思想との苦闘也。すなはち内亂時代は新道義を代表せし清淨教徒の勢力の殆ど其の頂點に達したりし時又諸種の舊思想を代表せし皇室及び舊教徒等が之れに對する反抗の其の極度に達したりし時なり。こゝには政治及び宗教上に於ける此等衝突の巨細を叙説する違なしと雖も一千六百四十年の官民の軋轢漸く極まり有名なる長議會召集せられ同四十二年に及びては内亂竟に破裂し砲聲全島を搖かし翌年に至りては首府ロンドンに悉皆民黨即ち衆議院の占領する所となり隨嚴冷酷なる清淨教徒がはじめて其の平素の志を得て全國に法令し百事を意の儘に處斷しきといはれ彼等が蛇蝎の如く忌めりし浮靡の習俗の禁止せられ就中敗風の源と認められし諸興行物の停められ文學藝術のたぐひまでも憎弱の媒なりとして斥けられ風流地を拂ひ詞壇寂寞たりしさま想ひやるに足りぬべし。當時の詩人たりし者は概して上流の士人なりき而して上流の士人は多く王權黨なりしが故に政治上に於ける王權黨の敗績は文學上に於ける詞客が失意困窮及び流浪を意味したり。もと彼等は一種の遊民として深く清淨徒に忌まれたりしかば官

軍一たび挫散せしや彼等皆狼狽し倉皇大蹙に尾して地方に逃れき(當時民黨中には唯一人の詩人ありしのみ)デジョン、ミルトンは是れなり。後に王政の舊に復せしや彼等また都に歸りて新國文學の前驅となりぬ。此等の詞客を總稱してカロライン、ポージェツ(チャールズ朝の詩人)といふ。

之れより先きエリザベス朝に盛なりし武俠的及び傳奇的氣脈は女皇崩御の前後より漸く衰微の傾向を生じ人間の實際に關する嚴肅なる考察は日を追うて歩を進めたりこれ尋究思索の風の廣く行はれそめし端緒なり。チャールズ一世の父デームス一世の位に在りしや天下久しく太平にて商工業も振ひ内治もほぼ整頓し人々堵に安ずるを得たりしが風俗次第に改まり荒唐放逸の想像はいよゝゝ減じ推理の能力と機械的考察とは優者の資格としてもはやされ詩歌ますます衰へたり。内亂の主動者たりしチャールズ一世は頗る風雅の資に富めりしゆゑ流石に上流の社會には詩文の命脈の繋がりしがそれだに大かたは詞花言葉の歌人にてカロライン、ポージェツの名こそ今も尙傳はりたれ要するに『新古今』以後の作家などに比すべく『万葉』の質樸エリザ朝の情熱とは比ぶべくもあらず。かくて

共和政治となりクロムエルの保護職時代となりては詩歌は殆ど地に墮ちチャールズ二世の世にまたようやく蘇りつれどこれはた浮靡纖弱の作のみ多くバトラル、ドライデン二三家の外は殆ど取りいでていふに足らず。其のうちひとり卓然として衆詩人と光を異にし燕群の鸞鳳たりしものは民黨の大詩人ジョン、ミルトンなりミルトンの事は別にいはん、こゝにはまづ第一期の内亂時代に於ける詞花言葉のかたかけをうかひらべし。

第一章 カロライン、ポージェツ

放縱なる想像と自在なる創才とを以て勝りたりしエリザベス朝の詩人に代はりし紳士の詩人の一團をカロライン、ポージェツといふは彼等の多數がチャールズ一世王即位のころ世にいで其の子チャールズ二世の朝に盛え其弟デームス二世の世に衰滅せしゆゑなり。(カロラインとはチャールズ朝のといふ義なり)。此の派をメタフィシカル、スクール形而上派と呼べるは博士ジョンソンが杜撰の稱呼にして、ファンタシカル、スクール(空想派)といふは寧ろ彼等を貶したる名なり。彼等は一方に於てはハリサエサン美文學の殿となり他方に於ては十八世紀美文學

の前驅となれり。彼等は情熱の詩人といはんよりも寧ろ考察の作家といふべく感慨の詩人といはんよりも理窟の作家といふべき者なり。此派の勢力は六百年より同七百年にわたり擬古文學の備は作られたり。彼等みづからは稱してベン・ジョンソンの見といへりしがまことは當時の名家ジョン・ドン(John Donne)に負ふ所尤も多し。トマス・アーンホルドの説によればドンの詩風は伊太利ネーブルスの作家マリニーといふに起源せりといふ。マリニー(一千五百六十九年生同六百二十五年死)は伊太利に於ける當時の擬古文學に飽きて別に一生面を開きし者にて其の特質は辭藻の巧緻にして新奇なるにあり而して其の過巧の比喻綺靡纖麗の形容は端なくも擬古文學の爛熟に倦める時好に投じて一時大に名を成しにき。マリニーは後に佛國に遊びてかしの詞壇にも甚なからぬ影響を及ぼしやがてその餘波を英國にも傳へき。ミルトンの如き大器こそ此の狂波に卷かれざりけれ溺れざるは稀なりけり。ドン・カウリー・クラッシュ・チャーレル・クリツランド等皆然り彼のドレイデンの如きすら最初は此の流に身を投じて専ら不自然の落想(Conceits)をよるこび彫蟲これ力め質樸なる感情あつからなる想像は詩歌には妙ならずとて棄てにき。

英國にて此の派の開祖ジョン・ドンはセント・ポール院の教頭にて十七世紀のなかばには其の名詞壇に轟きたりし者なり。其の作いとあびたしく尤も諷刺詩に長じたりと稱せらる戀歌の作家としては所謂空想派の率先者にして情を主とせずして考察を主とし只管落想の新奇ならんとを力めたり。こはカロライン・ポエツの大部分を掩ふべき特質にして比喻動もすれば巧に過ぎて意をそこなへるものまば／＼あり。シユは其の『英文學史』に彼等の落想の過巧なるを笑ひて姿勢の師又は手品師のわざくれに似たりといへり。此の派の開祖たるドンが名作のうちだに下に掲ぐるが如き笑ふべき文字あり他は推して知るべきのみ。

“There note they the ship's sickness,—the mast

Shaked with an ague, and the hold and waist

With a salt dropsy clogged.”

船の難に臨めるを病に喩へたるまづをかしきに帆樫のゆらめくをわらはやみどけ苦しからずや。又「斷腸」といふ題にて情郎がいたく悲しみて情婦の居間に走り

入りし時の言葉に

Love, alas!

At one first blow did shiver it (*heart*) as glass.

Yet nothing can nothing fall,

No any place be empty quite

Therefore I think my breast hath all

Those pieces still, though they do not unite:

And now, as broken glasses shew

A hundred lesser faces, so

My rags of heart can like, wish, and adore,

But after one such love can love no more.

腸ちぎるゝ苦しみを玻璃の碎けたるに喩へたるだに純然たる滑響の文字なるに理窟づくめに怨じたる口吻宛然喜劇的人物の豪辭なり。短所を擧ぐればおほむねかくの如しされど其の作の妙なるものに至りてはミルトンが小品に比して遜色なき者もあり否往々にして彼れを凌ぐに足る句ども無きにあらず。ロベント・ヘリック (Robert Herrick) トマス・カリウ (Thomas Carew) リチャード・クラミン (Richard

Crashaw) の如きはコロライン詩人中の絶群なるものにして其の作頗る誦すべきものあり。其の他ミルトン以外の民黨詩人たりしマオルマ、ギザル (George Wither) 熱心の王權黨たりしランシス、クォールズ (Francis Quarles) 宗旨歌の作家として知られたりしマオルマ、ヘルベルト (George Hebert) 王黨詩人中の名家ソル、ジョン、サマソンク (Sir Jon Shuckling) マル、サマー、ラザ、ローニス (Lovelace) 山野歌に名ありしギリヤム、ヘン、ブラン (William Browne) 舊教徒にして宗旨歌、戀歌に巧なりしギリヤム、ヘン、ブラン (Habington) 官民兩黨の間にたゞよへりしエドモンド、ワラー (Edmund Waller) ショート、スピアの愛讀者にして劇道中興の作家たりしソル、ギリアム、ダウナム (Davenant) 地方の風景を歌ひて風土歌の端を發きしソル、ジョン、デナム (Denham) 十五歳にして長篇の詩を作し神童の稱ありしエドワード、カウリー (Cowley) 等も此の派の名家にして、英文學の秋とそしらるゝ内亂期の秋の千脚、いまだ錦繡の楓林に比すべからずと雖もまた以て一代を飾るに堪へたり。

第三章 ザモン、ミルトン

ザモン、ミルトンは内亂期に於ける五大文星の隨一なり而も他の四星はすべて散

文壇の將星にして韻語に不朽の名を傳へたる此の大詩人に劣ること幾等なり。他の四星とは史家としてのクレンソンドフ、論客としてのヂェレミー、テイロル、思索家としてホフス、文章家としてのブラウンをいふ。

ヂヨウ、ミルトンは一千六百〇八年十二月九日ロンドンに生まれき。其の父の名をヂヨウと呼びて熱心なる民権黨にしてまた眞摯なる新教の信者なりき。ヂヨウは此の謹嚴沈毅なる父の薫陶に人となりて早うセントポール學校に業を受けケムブリッヂ大學に移りし前に希臘羅甸の古學を修め佛語ヒオブルウ爾伊太利語等をも學びさて千六百二十九年にケムブリッヂ大學を卒業して「マストル」の學位を得てホオトシ村なる父の家に歸りぬ時に齡二十五歳なりき。在學中に物せし短詩すべて十一篇あり其のうち尤も聞こえたるは「基督の誕辰」といふ小品なり。さてまたホオトシに在りし間に七篇の作あり就中高きは五、曰はく「ラレ、クロ」曰はく「ホルベ、ヤロソ」曰はく「ア、カヂー」曰はく「ヨ、マス」曰はく「リ、ダス」。ミルトンの生涯は明に三期に分かつを得べし。第一期は修鍊の期にして即ち生誕より一千六百三十八年伊太利漫遊まで第二期は政治的生活の期即ち一千六百

三十八年より同六十年復位までなり散文の著作は皆此の間に成れり。さて第三期は純然たる詩人的生活の時代にして一千六百六十年より易簣までなり。『失樂園』復樂園』サムソンアゴニスト』の三大篇は皆此の時に成れり。第一期の作の聞こえたるは總べてホオトン在住中の作即ち前に擧げたる五篇なり其のうち尤も傑出せる作は『コーマス』と題せる假面劇の臺本なり。こは詩としての價值よりいへばミルトンが一代の傑作なるべし彼の「不具の圓滿」と稱せられたる大敘事詩『失樂園』に勝ること一等なり。『コーマス』は時の精神ブリツマチャータル公の需によりて「盛宴の興を附けん爲に物したるなれどエリザ朝以後十九世紀以前に決して見るべからざる絶唱なり。其の筋の略をいへんに

一人の貴女が端無く其の弟等を途中にて見失ひ覺束なくもさまよふところへ魔神コーマス牧羊者の姿に變じて出現し言葉を巧にして乙女を妖窟窟に誘ひ妖術を以て其の五体を縛し其の戀を遂げんとておどし且つつかして魔酒を飲ませんとす。乙女心清きこゝの如く操固きこゝの如しコーマスを罵りてよし我がうつし身をば汝能く縛すとも我が心の自由をば汝争てかほしいまゝにせんといふ。コーマスは黙らずまに首を飾り強ひて魔酒を飲ませんとす折から二人の弟牧羊者の姿またる精靈に

救へられて踵來り劍を揮りてコーマスを走らす。まかるに乙女は妖術に縛せられて
動くことを得ず兄弟を解かんして女神の救を求む。女神すなはち現れて乙女の縛
を解く。

さて精靈の歌ふ歌をもて全篇の局を結び。其の最後の六句は

我れに隨はんご欲するうつし世の人は美徳を愛せよひさり美徳のみぞ自由なる美徳
は汝に教ふるにいかば人界より高きところの上るべきを以てす美徳或はか
よわくてえ上らずば上天降り來て美徳に臨まん。

といふ意味にて世に聞こえたる名句なり。

此の『コーマス』中の乙女は疑ひもなく清淨といふ美徳の權化にしてコーマスは情
慾といふ誘惑の權化なり而して二人の兄弟は美徳に對する幫助をかたどり女神
と精靈とは此の幫助を完からしむべき神力を表したり。ドウデンは『コーマス』の
乙女を評していふ

シエークスピアは其の作の初期にありては好みてロザリンド、ピトリズ、オシアの
如き人物を寫したり此等は其のイモーゲン、アステア、モーナ等よりも更に強きと同時に
更に弱き人物なり更に強きは一層智力に富める女性なればなり更に弱きは一層不調
和の女性なればなり(中略)ミルトンが詩中の乙女がもてる弱點の幾分は彼の女が他の

保護のうちにいよいよ育てられて美にして柔和なる身体をもてる一婦人なりとい
ふ點にありされど一たび離に當たる時となれば彼の女は判断力にも理性にも富み絶
て精神堅固道念確實にして罪業を恐むこと蛇蝎の如き性をあらはせり(中略)按する
に此の乙女は壯時のミルトン其の人「大學の佳人」たりしミルトン其の人に似たるこ
ろ多し

云々。蓋しミルトンは深くスペンサルに私淑したりき。さればテーンは評し
て曰はく

道念の清うして高き文致の豊にして聯なれる、武俠の情操の氣高く見えたる、古文學的
結構の精美なる、ミルトン、ミスマン、サルマは兄弟なりされどミルトンはスペンサルの
外にホーメント、フレッチャー、マルトンド、ドラモンド、ペン、サヨソ、シエークスピア等所謂
復興期の華美絢爛たる全文學を師とし之れに加ふるに伊太利の詩歌羅典の古文學美
なる希臘文學及び英國的文藝復興を産み出したし、すべての本源をも師としたり

と。さりながら彼れの此等諸文學を咀嚼せしや其の意毎に温故知新に在りき彼
れは神を取りて貌を取らず他の物を化して我か物となしき即ち入るときには陳
套なりしものも出づる時には全くミルトンの特色を帯びたる新しきものとなり
て出でにき。按ふに彼れは心中に鋼鐵よりも堅き一の模型を備へたりき彼れは
他をこそ此の鑄型に適せしめんと力めたれ我れみづからは曾て他の鑄型に投ぜ

んと思はざりしなり。ガーネットは曰はく

ミルトンが壯時の作と他の英國第一流の詩人のを比ぶるに其の純正なること前者却りて後者に優れり。益し異常なる神來の情に加ふるに強固なる意志ありて輕率浮遊を制したればなるべし。さればチオゾチカスもコールリッジもバイロンもシェリーもキーツもテニスンも後年に其の壯時の作を見て多少恒惴たらざるはなかりしにミルトンのみは毫もさる事なかりき。彼れの作はその英詩なるを羅典詩なるを問はず多くは或外來の刺激に由りて成れり『コーマス』の恩人の懸望によりて『リシダス』の友人の死によりて成れるが如き是れなり。たゞし『ラレグロ』と『イルベンセロン』とは内部の感動より成れりを見ゆ而も尙細查せば恐らくは然らざるを發見するならん。バイロン、シェリー、テニスン等は絶えず筆を執る彼等の經營の苦心はいかばかりなりとも其の作せんとする刺激は常に内に絶えざるなり。ミルトンに至りては然らず作せんとする内部の刺激甚だ鈍し。彼れはひたすら講究研鑽を専らし譬へば祭壇の上に薪を積みていざと言はざいつにても天より靈火を呼び下し得べき力を有したりと自信したりしが如し

ミルトンが謹嚴持重なりしは曾て其の友チマヂチーに語りし語にしるげし曰はく

予は我が翼を長せしめて翱翔せんの準備をなしつつありされど我がベガサス(詩神の乗りたる天馬にて羽翼を有し能く空中を翔る、詩才の附なり)は未だ高く天空を翔翔するに足るほどの羽毛を具せず

と。されば彼れは咄嗟の感動によりて不自覺に詩を賦し文を成すものにあらず彼れは飽くまでも其の思へるところ、言はんとするところを自覺せりき。ガーネットが内部の刺激より成れるもの無しといへるは此の故なり。ドゥヂン曰はく

ミルトンは決して鳥の歌ふが如く智の認めざる又は化成せざる刺激によりて自在隨意なる快樂をもて歌へることなし。名篇の主意は明に彼れみづから工夫したるものなり。而して其の形式は云々の結果を生ぜしめんを自覺して刻苦經營せし所なりと。テートンも曰はく

二箇の力主として人間を導く思想と感動と是れなり。一はシェイクスピアの如く容易に變化し得る不羈多感なる詩的靈魂を動かし他はミルトンの如く能く不淪なることを得る活潑好暇の英邁なる靈魂を支配す。前者は同感し易く外に溢れ易く後者は

と。前者は屢々我れを忘れ後者は常に我れを自覺すドゥヂンの所謂鳥の歌ふが如く無心なる能はざるは後者なり。テートン又いはくミルトンは一時の刺激によりては書かず單に事物と相觸れしのみにては書かず、あらず學者らしく古文學家らしく纏めて學者らしく筆を取りきと。『ラレグロ』『イルベンセロン』『コーマス』

シダス』はた此の學者らしき詩人の生む所なりき。
 ミルトンはホオトンに在りし頃より伊太利漫遊の希望ありしも兩親許さとりしかば果たさとりしが母は疫病にて逝り老ミルトンは次子クリストファルの許に寄寓するに至りしかばミルトン之れを機として漫遊の素志を達せんと欲し一千六百三十八年三十一歳の時住みなれしホオトンを立出でて竟に伊太利への旅途に上りぬ。これを第一期の生涯の終りとす。
 かくて佛を経て伊に入り羅馬に遊びかして其の文物典章を探り多くの名士學者と會合し滞在二ヶ月の後チーブルスに遊び尚シ、リ、希臘等を歴遊せんと企てし折しも本國より王と議院との軋轢いよ／＼劇を加へ國事日に非なりといふ報を得しかば奮然感ずる所ありて直に本國へ踵を返しぬ。
 當時英國に宗教に二あり一は固有の國教にして之れを代表せしものを監督教會と稱し法王を崇拜し監牧師を置きて萬事を支配せりき。他は監牧師の制を非難し法王を頭に戴くを欲せざるより國教と分離せりしものにて所謂清教徒是れなり。國教に在りては法王は宗教上の無上尊嚴なる君主にして諸監牧師はそが大

臣に外ならず故に其の行ふところものづから專制に陥りさながら宗教上の一專制國を成せりき。清教徒は之れに反し飽迄も自由を重んじ法王監牧師の爲に制抑せらるゝを好まず其の行狀の如きも奢侈遊樂を嚴禁し清淨潔白を旨とすること他の驕奢を喜び道義を重ぜざるに比して表裏黑白の差ありき。こゝをもて兩者の相容れざると水火の如く國教は國王と法王との權力を借り常に清教徒を虐待しその宗教上の自由を箝制せり。ミルトンが歸國後の努力は専ら此等大弊を斷除せんと欲するにありき。以爲へらく個人が社會の一員として幸福を保有せんとするには其の要素三あり宗教の自由、家庭の自由及び自主の權是れなりと。其の中家庭の自由中には婚姻、兒童の教育、思想の自由表白の三問題を含有せり以上の三要素は所謂ミルトンの三大自由、説なり。ミルトンが當時の第一著は『Reformation in England』『英國に於ける宗教革命』なり國教の非を鳴らし監牧師を痛擧せる者なり。さて彼れが崇高なる宗教心は尋いで監牧師ホールが監督教會管轄辯護の論文を駁撃したる『Of Prelatical Episcopacy』となり尋いで又『Reasons of Church Government urged against Episcopacy』となり以上五つれも一千六百四十一年やがて又

“An Apology for Smeetyunus” (一千六百四十二年)となりき。いづれも監督教會管轄の攻撃なり。

Smeetyunus はミルトンを助けて論戰せし清教の教師 Stephen Marshall, Edward Calan, Thomas Yung, Matthew Newcome, 及び William (William) Spenslow 五人の姓名の頭文字を集めて造りたる語なり。

一千六百四十四年ミルトン歳三十六にして初めて妻を迎へき然れども琴瑟和合せずして風波しばしばあがりミルトンをして『離婚論』數篇を草せしむるに至りたり。

結婚後ミルトンの著作せしものは『離婚論』の外に其の散文中の最傑作と稱せらるる『アリオパッチカ』(一千六百四十五年出版)あり出版自由を論じて時の議院に獻言せしものなり。又一千六百四十四年に出版せし『教育論』あり當時の小學校並びに大學校に行はるゝ制度を全廢し智力と體力と兼共せしむべき方法を議したるものなり。又末年に出版せし『英國史』の如きも既に此の折は起稿せりきといふ。一千六百四十五年ネイスビーの一戰にてチャールズ王はクロムウェルの爲に大敗して蘇國に遁走せしが蘇人は直に之れを捕へて議院に送りこしぬ。之より評議

數回の後王と議院との間に和議殆ど成らんとすクロムウェル黨大に驚き急に議院に臨みて武力をもて反對黨を院外に逐ひ自黨の議員中より委員を選定して王を審判するに叛逆の罪を以てし遂に死刑を宣告し一千六百四十九年一月王チャールズを戮しき。茲に於てや非難の聲八方に起り國中擾々として鼎沸の如し此の擾亂の中にクロムウェルはミルトンを擧げて其の秘書官となし年俸二百九十鎊を與へき。時に一千六百四十九年三月十五日なり。蓋し當時外交書類はいづれも羅典文を用ふるの規定なりしかばミルトンこそいよいよ此の任に適せしなれ。ミルトンは之れより全力を傾けてクロムウェルの共和政治を助け國威を海外に輝かさんと力めき。

兎角するうちに共和政府がチャールズ王に對する處置を難ずる者いよ／＼多く遂には“Eikon Basilike” (『王の肖像』) 又の名『閑地及び厄難に於ける神聖なる陛下の肖像』といふ書出でたり。こは口を極めて帝王の神聖を説けるものにて或は博士ゴウダンの筆に成れりともいひ或は又チャールズ王の遺稿なりとも噂せりき。ミルトンすなはち“Eiconoclastes” (『破像者』) を著して故チャールズ王が違憲の罪を

數へ議院と人民とに背ける條々を擧げて議院の處置の正當なるを痛論せり。ついで當時の碩學サルメーシアヌとの論戦あり“Defensio Regia”に答へたる長編“Defensio pro Populo Anglicano”は敵をして氣死せしめ作者をして明を失はしめし者也。これより先きミルトンは視力次第に衰へ既に其の片眼を失へりしが一千六百五十二年の頃となりては兩眼共に明を失して四下全く朦朧たるに至りぬ。されど尙筆を投ぜず『英國史』の稿を繼ぎ且つ『羅典辭書』の稿を起こし、外に數種の政治的論文をも物せり。就中有名なるを“Ready and Easy Way to Establish a Free Commonwealth”“自由なる共和政體を設立するの捷徑”一千六百五十九年出版とす。彼れが散文の著作は此に於て略々終結を告げたり。その『散文全集』は彼れの死後三卷となりて世に出でにき。雁然たる大冊にしてテーンの言へるが如く之れを一枚々々に繰りかへしもてゆかば頭腦よりも先づ手腕の疲るゝを覺ゆべし。又彼れの散文はドゥヂンの言へる如くよく彼れの外部生活の狀態を表現せると猶その詩篇のよく其の内部生活の狀態を表現せるが如し。當時ミルトンの名譽は赫々として大明の天に沖するが如く其の名は廣く海外に

聞こえて誰れ知らぬ者なく思索家ミルトンは實行家クロムエルと共に英國人の兩代表者なりとして敬重せられたりき。然るにクロムエルは末年大に民望を失ひ一千六百五十八年九月共和政府に饜きつと叫ぶ國民の聲をきながら我が事終はんぬといふ一語を遺して空しく異郷の客となりしやミルトンは猶魚の水に離れたるが如く今は共に圖るべき人もなければ潔く政界を厭離せんと決心せり。兎角するうちに一千六百六十年三月チャールス二世王佛國より來たりて王位を襲ひ茲に全く王政復舊を見るに至りしかばミルトンのいよく事の非なるを知り久しく遠ざかりし詩神を役して徐に其の大詩篇『失樂園』の結構に心を傾けき。ミルトンが晩年の生活はテーンの評論に其の要を悉せり左に義譯して彼れが零傳の局を結ばん。テーンは曰はく

ミルトンは毅然として清淨なる一生を終へき。彼れの我強くして執拗なるや如何なる經見にも教へらるゝことなく如何なる不幸にも挫折せざりき。彼れは何事をも能く忍びき殆ど何事をも悔まざりき。其の明を失ひしが如きは意識して自ら招きしなりけり。其の晩年には不幸身邊にむらがり來たりぬ。彼れは共和政府の葬儀をも自己の學說の放逐をも自己の名譽の汚辱をも悉く之れを目撃しき。彼れの周圍には自

由を惡み束縛を喜ぶる無智の暴民等狂奔せり。全國民は無能不信なる若き遊蕩漢(チ
 オールネス二世)の足下に身を投下て耻つべき敬禮を行へり。清教宗の榮譽ある主導者
 は隣國軍を得て宣告せられ新國臺上に頭を失ひ若しくは甚しく凌辱せられきたまへり
 さきだちて病死せりしもの墳墓を發かれて死後に辱を曝し若しくは外邦に放逐し
 て廢王王爵に迫害せられき。勢ひかくの如くなりしかば或は金錢の爲に操を賣り或
 は爵位の爲に主權を賣り恬として王黨の味方となり舊友を虐して顧ざるものありき。
 要するに英國の最も敬虔にして嚴格なる市民は多くは歐亞の人となり然らざれば零
 落し屈辱さの中に凌まじき最後を遂げにき。而してひとり邪惡のみは青天白晝に横
 行して其の時を得たるを誇りぬ。かりしかばミルトンの如きも勢ひ安穩なる能は
 ざりき。其の著書は獄丁の爲に燒かれ身もまたほく危かりき。而して彼れが不
 幸はひとり政治上のみまじまらず家庭其の他の小不幸陸續身邊に附集し來たりぬ。
 政府の爲に家産を沒收せられしに次いで彼れが關係せりし銀行の分散あり之れに次
 ぐに龍動の大火災ありて彼れが財産の四分の三は爲に灰燼となり果てにき。加ふる
 に其の女弟彼れに對して弟も孝子たるの分を盡さず家庭の悦樂は絶無なりき。而も
 ミルトンの剛毅なるかゝる大不幸の中に立ちて終始凛として動する色なく依然とし
 て自若たりき云々

かくて遂に一千六百七十四年十一月に痛風の爲にみまかりしまで別に取りいで
 ていふべき程の出來事なし只特筆すべきは其の大著『失樂園』の由來なり。

第四章 『失樂園』及び其の他の作

ミルトンが其の畢世の大著『失樂園』の詩を物せんと發企せしは其の大成に先だつ
 こと遠く二十五年以前にありき。今其の由來を略らんに彼れ齡三十二にして伊
 太利より歸りしや思へらく願はくは古今有數の大著をものして詩名を万代に傳
 へん而してそは英詩なるべく牀は叙事詩なるべく題目はブリットン史中の古談よ
 り擇ぶべしと。然るに後日に至りてはむしろ劇詩牀にもせんかた更によから
 んと思ひ感ひて種々に腹案を試みにき。されば一千六百四十年より四十一二年
 に至るまでに其の略案を手記せるもの都合四種に及べり。第一と第二とは單に
 詩中にあらはるべき人物の名を記せるに過ぎず而して其の中にはマイケエル、ル
 シスアル、アダム、イヴ、惡蛇、良心、死、勞役、病苦、不満、無知、信仰、希望、純潔等の名見えたり。
 第三にいたりては明に『失樂園』と題し全篇を六齣に分ちて一々其の粗筋を記し
 さて第四に至りては齣を分かつたざるも尙一層詳細に筋立主意等を明記せり。然
 るに恰も此の粗筋の成りける頃より身を政界に投ぜしかば凡そ十有餘年の間は
 空しく其のまゝに打過さしが後再び機會を得てこれに従事するにあよびては劇

詩林は再變して叙事詩林となりルシファアルはセータンと改まり其の他筋立にも多くの變更を見るにいたりき。

『失樂園』は實に英國詩壇にありてひとり崇高の名を擅にするに猶我が芙蓉峰の群山を凌いで雲表に聳ゆるが如し。左に記する梗概によりて其の旨意の影を髣髴すべし。

(第一卷) 先づ人の祖が不順の罪によりて樂園を失へることを簡叙し次に天上より放逐せられたる悪魔セータン及び之れに隸屬せる衆魔の事、彼等會議を開きて地球の創造及び無我無欲なる人間の始祖(即ちアダム、イヴ)に對する上帝の計畫を妨げんと謀する事並びにセータンが宮殿マンテモニアム(衆魔殿)建設の事等を叙したり

(第二卷) 寤合にては異議紛出して決せずセータン遂にみづから人間を誘惑するの任に當たり飛行して地獄門に到るこゝには「罪及び死」といふ兩兇堅固に門を守り居れり然るに罪といふ妖婦は曾て天上にありてセータンに通じ且其の悪計に與せしものなれば門を開きてつひにセータンを通行せしむ

(第三卷) 神父(即ち上帝)と神子(即ち救世主)との對談、神は豫めアダムが墜落すべきを知り神子みづから任せて善後策を謀ぜんとすセータン太陽の使者ユーリエルに逢ひて新世界への路筋を問ひ身を天使に變じて進み上る

(第四卷) セータン遂に樂園に入る事、アダム、イヴが清淨多福なる生活の事、天使の常に樂園を守護する事、セータン夢覺となりてイヴの耳に潜み我が思ふまゝの誘惑を行はんとして天使に捕へらるゝ事、されど再び逃走する事

(第五卷) イヴ、アダムに凶夢を告ぐアダムこれを慰め初禱を終へて夫婦いつもの職業に従ふその時天使ラファエル來降して彼等に忠告し且アダムにセータンが背叛の事、多くの天使の彼れと共に墮落せし事等を告ぐ

(第六卷) ラファエル前語をつぎて諸天使と魔軍とが激戦の事、初は天兵魔軍に勝ちしも後魔軍の作りたる戦器の爲に敗走せし事、神子遂に天父の命を受けて一戦の下に魔軍を平げ天父の許に凱旋せし事等を語る

(第七卷) ラファエルアダムの名によりて上帝が如何にして又何の爲に此の世界を作りたまひしか、即ちセータン及び一味の天使等を放逐して後更に一新世界を作り他の生類を住まはせて慰樂したまはんとて神子及び多くの天使に命じて一週日の中に其の業を竣へたまひし事を語る

(第八卷) アダム更にラファエルにつきて天使が飛行自在の動作を疑ひ問ふラファエル明に答へす更に有益なる事を問ふべしと誦むアダムこれに服し尙もラファエルを引き止めんとして己が身の上を語る即ちはじめて樂園に其の身を置かれし事、上帝と對話せし事、初めてイヴと相見し事等を語るラファエル之れを聞きはてし尙も忠誠して黙を分かつ

(第九卷) セータン眠れる蛇の身に其の靈を託して機をうかゞふアダムはイヴと共に

例の如く勞役につかんさするにイザは相離れて業を執らんとを乞ふアダムはラファエルの忠告を思ひ出だし暫しにても夫と相離るゝは危険なりと脱けさもイザ固く乞うて止まずアダム止むを得ずこれを許すセータン機を得てイザに近き百方誘惑して夫婦をして上帝が嚴禁せる智慧の果を食はしめんさすイザは其の夫をもすゝめて同トク「智慧の果」を喰はしむ是れより夫婦は其の裸軀を耻づるの念を生じ層々墮落の罪を重ね夫婦相責めて止む時なし

(第十卷) 天使樂園の守護を止む天帝神子を下して夫婦が破戒の罪を修めしめたまふ神子二人を怒みて之れに衣服を與ふ、セータン、パンテモニアム宮に歸り眷族を集めて其の成效を誇るうち惡業の報により忽然業を共に蝕に化す「罪」を「死」の身の果、アダム、イザ遂に其の罪を悔い天帝に赦免を乞はんと決す

(第十一卷) 上帝は人間の祖先が初めての祈禱を受け納れさせたまひしも最早樂園の生活を許したまはず天使マイケエルに命じて樂園を奪はしめ且アダムに未來の事を示現せしむ天使アダムに命を傳へ且高丘に誘うて大洪水以前に起こるべき人間の運命を指示す

(第十二卷) マイケエルが豫言のつゞき大洪水以後の人間の運命を指示すアダムは人間の運に償還回復の途あるに満足し高丘を下りて眠れる妻を呼び起こし手を携へて悄然樂園を去る

『失樂園』の實に出版せられ一冊級三シルリングの書冊となりて世に出でしは一千

六百六十七年の事なり。『失樂園』出版につきて書肆某とミルトンとの契約に據ればミルトンは最初にまづ五磅を受け取り次に第一版一千三百部を賣り盡くしたらん時更に五磅を受け取るべく第二版第三版各、一千三百部を賣り盡くしたらんときに同じく五磅づゝを受け取るべき筈なりしが彼れは僅に其の半額を受け取りしのみにて世を辭し寡婦は其の夫の没後『失樂園』の版權を八磅にて賣り渡しければ世界屈指の大詩篇も通計十八磅の報酬を得しに過ぎざりき。之れを後年マコーンローが『英國史』を著して十、万弗を得たりしに比すれば誰れかその所得の差の大なるに驚かざらんや。

『失樂園』につきてミルトンが物せし『復樂園』は四卷より成れり。三十歳の時の基督を以て主人公となし基督が千種万類の誘惑に逢ふも毅然として動かざる大忍耐を叙したるものにて惡の遂に善に敵すべからざるを示せり。『失樂園』と引き離しがたき著作なり。其の出版は一千六百七十一年に係る。

『サムソンアゴニスト』も亦同年の作なり。こはミルトンがものしたる唯一の劇詩(悲劇)にして一にアリストートルの詩論に則り固く時間と場處との一致を守れり。

ミルトンは初より舞臺に上さん爲に筆を執らざりしかば脚本としては勿論不適當のものなり。さて曲中の主人公サムソンが盲目にして様々の災危に逢ひ而も確乎たる信仰と奮ふべからざる精神とを保持して始終之れに堪ふるところ徹頭徹尾ミルトン其の人の面影也。蓋し彼れが最大の同感を表して物したる作ならんされど最後の作なればにや少壯の讀書に喜ばるべき節は稀なり。

ミルトンが晩年の作は以上三大篇の外に羅典の小詩二三及び「英國史」等あり。ミルトンが常に確信せりし詩作上の意見あり曰はく「嘉すべき事物を材料として其著述を成さんの企望に失敗せざるべき人は其の身先づ眞の詩ならざるべからず即ち身みづから最良最貴なる事物の合成物たる模型なるを要す」と。是れ彼れが自己をさながらに其の詩中に露呈する所以ならんか。又其の作中に見えたるものは一として尋常のものよりも偉大ならぬはなし。テロン其の理を解して曰はく「若し人ありて何故にミルトンの創造する事物が他人のよりも一層高大なるかと問はば余は答へて彼れが一層高大なる心を持したればなりといはんと、詢に然り。

エドワード・ドゥデンもまたミルトンを論じていはく

ミルトンの自脩を力めしをなさく「ギヨオテにも劣らざりき。しかしながらギヨオテは其の百鍊工夫の希臘主義を保持して人間をもて自家の究竟目的を爲せるにヨルトンは然らず猶太的精神(即ち猶太氣風)は常に執着して彼れが身を擁護したりすなばち彼れは最高の人間は神の所造物なりと思惟し神意に接近するをもて表極させり。(中略)ギヨオテが自脩の不偏なるやかりにも罪惡さいふ感の爲に其の心を擾亂せられたるとなし人生のいづれの部分も彼れの觀念する所によれば(罪惡などいふ)無形の敵の爲に甚しき危難におちいるべきもの殆どなく又激烈なる攻撃を受けつべきもの殆どなし。所詮彼れは決然としておもむるに自脩し圓満の發達に達せんを力め且從容として靜に其の性の一方より他の一方に注意を轉ずると自在なりき。蓋しギヨオテに取りては世界は一の体操場又は専門學校の如きものにして人生は一層高き教育に進まんとする一期限なりき。ミルトンが定見の特質はこれと異なり。彼れの考によれば世界は眼前に横はれる一の戰場にして人の一生の業は諸邦國諸權力に對しての戦闘なり而して善人は神軍の將たるものなりかるが故に罪惡は常に人間に伴ふものなりさいふ感の暫くも其の心を離れざりしと同時に人は竟に美德に達し得べしといふの觀念もまた決して其の心頭を離れざりき。ギヨオテの見る所によれば自然は概して人間に取りて都合よき諸勢力の調和的集合と見えにき只彼れの主として怖れしは脩養策に於ける誤謬なりき即ち人の一生の教育に於て誤りて其が性質中の首位なる

力を備練することに代ふるに其の次位の方又は能を以てすることに成りき。而してミルトンの最も畏れしは上帝に對する不忠及びこれが爲に生すべき墮獄是れ也。蓋し彼れの眼には自然は只善惡の絶えざる抵抗とのみ見えにき換育すればミルトンは純粹の清教徒なりき其の俗養の古文學的なりし其の美感の學藝復興期的なりしに拘らずDiabolus(惡魔)とImmanuel(善神)との争闘をもて世界開闢以來の事實と見做し、彼のマンヤンにも譲らざりき。彼れは又マンヤンに同づく天城と破滅之市との相去るとの遠く各々殊なる主裁者を戴きて相敵視せるを見且マンヤンに同づく最後の勝利は遂に善に歸すべしとせりき。即ち彼れは永劫無窮の天道(神)あるを信すべき。彼れ思へらく夫れ勝利は神の有なり吾人の有にあらず蓋し永劫無窮の神明に合睦せんと力むるは吾人の分にして吾人の爲に勝利を盡すは是れ神の分なりき。茲に吾人はミルトンが内部の生活を左右する根本の理想を知り得たり。彼れの詩的著作が此の理想の周圍を回轉すると猶其の散文の著作が「自由」といふ理想の周圍を巡環するが如し。唯彼れは善惡二力の間に不斷常住の激戦ありとせり此の故にミルトンの大詩篇には其のいづれの作にも善惡の兩黨が幽明の如く相反對したるを見る又相闘戦せんが爲に相反對する諸勢力が双方に排列せられたるを見る。されば常に全智全能の上帝を最上位に置きたればいづれの場合にても正義が竟に神聖の助力を得て勝利を奏するに至らざるとなし。

以上の所説の外に須からくミルトンが美術家としては一に理想家風にもしたたりし

とを記述すべし。彼れの發起點は常に抽象なりマンヤンにありては抽象的美徳及び邪惡が絶えず現實的人物たらんとするの傾あるにミルトンにありては總て現實的人物だに一理想又は多少 雜せる數理想の集合的代表たらんとするの傾あり。「有忍」及び「老正直」及び「脆弱心」等は吾人の讀み行くに隨うて次第に現實の人間となりんとす即ち敬すべき清教徒の隣人として吾人に知られたる二世紀以前の英國人となりて活動せんとす然るにミルトンが作中の人物を見れば彼のサムソン、ダリウなどの如き東方古國の傳説に見えたる人物をばとめとしてアリス、エゲルトン及び其の弟「コーマス」中の主人公の如き當時に實在せし人物すらもミルトンが描寫せる所によれば現實界の人たるよりもむしろ空想界の人物なり云々。

ミルトンを評し得て餘蘊なしといふべし。尙マンヤンと比較せるあたりは後の章に叙説すべきマンヤンを参照して玩味すべし。

第五章 四文星

チェレミ、テイロル

所謂五文星の筆頭たるデヨン、ミルトンをもて内亂第一期に於ける詩壇の精粹を代表せるものとせばチェレミ、テイロルは當期の宗旨論壇を代表すると同時に其の尤も洗鍊なる散文學を表示するものとすべし。按ふに内亂時代は英國宗

論の全盛期なり、すなはち國教派と清浄教派との軋轢其の極に達し宗旨上の論争激甚なりし時なり。清教派の勇將としてはジョン・ミルトン及び「天路歷程」の著者ジョン・ベンヤンあり國教派の論客にはジョン・ヘールズあり、チェルミー、テイロルありトマス・フルラル、トマス・ブラウンの如きはた宗旨論に盛名あり。其の他第二期以後に於てはクエーカー宗の開祖ソオル、フックスの如きあり又固く宗旨の自由を主張しチェームス二世に抗論せしリチャード・ペクストルの如きあり又十八世紀にまたがりてはクロトソン、ペアロウ、サウス等の如きあり。彼等皆單に文章家としても見るべきの價值あり而してテイロルの如きは其の尤も錚々たる者也。「散文のシェイクスピア」ども神學壇のスペンサルども激賞せられしチェルミー、テイロルは一理髮師の子なり。一千六百十三年クムブリッジに生まれ十三歳の時ケアス大學に入り在學七年にして得業し學位及び僧位を得き。夙に時の大僧正井リアム、ロウドに知られまづ其の侍僧となりやがてオツピンガムの總牧師となりぬ。一千六百四十二年内亂破裂ののちも王黨に追隨してエールズに逃れ遂に民黨に捕らへられしが後赦されて私塾を開き又轉じてアイランドに退隱し王政の舊に

復せしまではリスバルンの教會に宣教師たりきといふ。かくてチャールズ二世の民黨に勝ちてロンドンに入るに及び彼れまた擧げられて僧正となりダウソ、コンノルド、ロモリアの三領を主管し一千六百六十七年にみまかりき時に齡五十七歳。

テイロルが主なる著作は(第一)『豫言の自由』Liberty of Prophecy こは信仰の自由にて、宣教に際し、豫言の自由也 (第二)『基督の傳』Life of Christ (第三)『淨生論及び淨死論』Holy Living and Holy Dying (第四)『黄金林』Golden Grove こは許多の禪思餘談及び祈禱文をいふ、こゝろにて物せしが別墅黄金林とぞ其の他小篇は數を知らず又若干の詩歌あり。テイロルが文致は所謂華麗体にしておしなべて典雅流暢の妙に富むと雖も未だエリザ朝の文病を全脱せざるものなり。彼れは好みて對句を用ひ形容語を疊み強ひて比喩を延長するの癖あり。例へば fetters of sorrow といは足るべきところにも fetters and chains of sorrow とやうに語を疊むこと不斷の癖なり。されば幸にして詞意相適ひ神興尤も熱せる時の作は句々瑰麗言々富贍散文の詩を讀むが如き妙趣あれども久うして讀む者の心倦憊し他の平淡清爽なるものに渴せざるを

得ず。左に彼れが文の一端を示し以て管々しき評論に代へん。其の風調の如何に流麗にして其の比喩の如何に巧緻なるかを見よ。

THE PRAYER OF ANGER

(曠患の祈禱)

Prayer is the Peace of our spirit, the stillness of our thoughts, the evenness of recollection, the seat of meditation, the rest of our cares, and the calm of our tempest. (祈禱は精神の安なり思慮の静なり回憶の平なり 曠患の居なり心勢の止なり心のあらしの沈静なり) Prayer is the issue of a quiet mind, of untroubled thoughts; it is the daughter of charity and the sister of meekness; and he that prays to God with an angry-temper is a troubled and discomposed spirit, is like him that retires into a battle to meditate and sets up his closet in the out-quarters of an army, and chooses a frontier garrison to be wise in. (祈禱は安心の果なり静慮の果なり 慈悲の女にして温順の妹なり若し夫れ眼瞽してくはしくは紛亂せし心として神に臨む者は静へば曠患せんと欲して曠患に退き曠患に曠患を假け皮兵をしてその中に入りしめ以て曠患せんと欲しもの如し) Anger is perfect alienation of the mind from prayer, and therefore is contrary of that attention which presents our prayers on a right line to God. (曠患は心をして全く祈禱に遠ざせしむるもの也故に神に一直線に祈禱を獻ぐる一心不亂の旨に反す) For so have I seen a lark rising from his bed of grass, soaring upwards and singing as he rises and hopes to get to Heaven and climb above the clouds; but the poor bird was beaten back with the loud sighings of an eastern wind and his motion made irregular and inconstant, descending more at every breath of the tempest than it could recover by the libration and frequent weighing of his wings; till the little creature was forced to sit down and pant and stay till the storm was over, and then it made a prosperous flight and did rise and sing as if it had learned music and motion from an angel as he passed sometimes through the air, about his ministris here below. (何となれば我れ嘗て一曠患の其の草裡の境より起きいで舞ひ登るにつれて轉りつて天宮にもとせむらんを空だのめして曠患はるかに舞ひのぼるを見たりとあるにあらはれむべし件の曠患はるかに吹きおろす東風に撲ち戻されて羽根のあがきも亂れたゆのみ翼をさしのへ平均なさらん進もなく曠患の吹きおろすたびにいよく降りて其の小さき動物はつひにおり居うちあへざあらしの吹やむまで俟たざるを得ざりきさてあらし過ぎて後こたひはいみづくも舞ひのぼりて曾て神のみつひひ此の下界に教化せんと虚空を渡りており來まふし折彼れ舞樂をや學び圓きけんと思ふばかり妙に舞ひのぼり降りたま) So is the prayer of a good man; when his affairs have required business, his business was matter of discipline, and his discipline was to pass upon a sinning person, or had a design of charity his duty met with infirmities of a man and anger was its instrument, and the instrument became stronger than the prime agent and raised a tempest and overruled the man; and then his prayer was broken and his thoughts troubled. (善男女の祈禱はた斯くの如し云々)

要するにテイロルは縝密なる思索家若しくは森嚴なる論文家といはんよりはむしろ能辯なる説教師否甚だ巧妙なる修辭家とも稱すべきものなり。屢々羅旬句法を用ふれどもミルトン、プラウソン等の散文ほどには甚しからず、又多く過巧なる

比喩を用ひ典故古言を引用すれど間々うるさままで甚しきことあれどこれはた時尙の然らしめし所也必しもテイロルをのみ咎むべけんや。彼れ爲人忠實謹厚其の口に文に表白せし所は悉く其の確信せし所なり其の文の華に流れしが如きは蓋し其の燃ゆるが如き詩人的才藻とまづ重に情感に訴へ世人を動かすを第一とせしと論難的精神との結果なるべし。

士爵トマス、ブラウン

テイロルと並びたちて當時の論文壇に雄視せしものはトマス、ブラウンなり。テイロルは文章家をもて聞こえたれど當時に在りては専ら神學論者として推重せられブラウンはむしろベーコンにひとしく廣き意味にて謂ふ論文の名家として知られたり。蓋しベーコン以來エッセー(小品論文)を作る者漸く多く十七世紀の初頭には僧正ホールの“Three Centuries of Meditations and Vows”と題せる短論文三百篇を收めたる文集出で一千六百四十二年に至りてはトマス、ブラウンの“The Religio Medici”いでたり。こは所謂エッセーの大に發達せる姿を代表せるものにて紛々たる當時の論壇に一の清新なる生面を開きしもの也。こゝにはブラウンの閱歴及

び其の論文家としての特質等を精査批判するの餘地なければ只其のあらましのみを略説すべし。

士爵トマス、ブラウンは一千六百〇五年ロンドンの中央に生まれき。幼にして父に死別し義父なにかしに養はれて學を修め中ごろアイランドに遊び稍長じて諸處に遊歴し専ら醫學を修め醫士の學位を得一時醫を業とせりき。されば斯道の博識としても其の名高くまた勤王黨の名士としても江湖に知られ其家の女を娶りて妻となせり。已にして學士會院の會員に擧げられついで一千六百六十二年にはチャールス二世王の恩命によりて士爵に叙せられ同じき八十二年に逝りき云々。彼れが主なる閱歴はほゞ上の如し。按ふにブラウンをして英文學史上に多少の重きを致さしむるものは其の閱歴に非ずして其の論文の特致なり。彼れは其の著作の分量よりいふもその文章の品質よりいふも未だ大作家をもて許すべきものにあらねど後の名文家に影響せし點は頗る侮るべからざるものあり。博士サミエール、ジョンソンの如きチャールス、ラムの如きは多少ブラウンの文を師表とせし證據あり。就中羅典語脈を混用して一種清新の文を做すはブラウン

獨特の技倆にしてテイロル、ミルトン等はた數歩を譲らざるを得ず而も是れ彼れの長短の併宿せる所にしてその弊やフラウンを讀まんとする者として一種の弊なる辭彙を需めしむるに至れり。例へば彼れはClearnessといはゞClarityといひFiercenessの代りにFerityといふ辭を用ひたり而して其の實何等の詞の美をも加へざることを間とあり。されば彼れが愛讀者たりしヨーロッパ諸君すら彼れを許してHyper-Latinistic(餘りに羅典的)なりといひ彼れを敬慕せし博士デモンソンすらも之れを是認する能はざりき。さもあれ彼れは其の高遠幽玄なる思想を一種獨特の文致に寓して讀者をして或は驚かしめ或は喜ばしむるの技倆あり彼れが文を讀むや吾人はさながら埃及の象字文の險怪神秘なるを讀むが如き心地し知らず識らず想像を太古に馳せ若しくは永劫の未來に飛ばしむ。按ふに彼れは常に好みて死、忘却、不朽オブリビオンなどいふ莊嚴幽遠なる問題に筆を着け概して社會の暗黒面に着目せしかば其の文體はた自然に奇峭なるに至りしならんか。而して其の弊や或は險晦となり或は生硬粗大の失あるを免れざりき。こゝに彼れが思想の一斑を示さんに彼れは謂へらく人もし其の前後を圍繞せる無限の年代を思ひやらば

人生の淺薄にして沒意味なるとあるのづから明かならんと。又曰はく自然は美術と異なるものにあらざ美術はた自然と同じからずといふべからず彼等は皆神の臣僕也。而して美術は自然の圓滿なるものなり云々。又曰はく自然は一の世界を形成し美術は他の世界を形成す而して人の信仰よりいへば宇宙の万象は皆Artificial(技巧的)なり何となれば自然は神の美術なれば也云々。

フラウンが著作は種々の品類を含めりと雖も多くは道德的若しくは哲理的考察より成れるものなれば其の旨深遠にして奧妙なる者多し。中に就きて最も善く世に知られたるは前に擧げたる“Religio Medici”の外に“Hydrophobia”1) “Urn-Burial”といへるあり“The Essay on Vulgar Errors”と云ふあり。“Religio Medici”は明白に自家の信仰を説けるものなり次の“Urn-Burial”は羅馬市なる一隅より發掘せられたる屍壺に關して自家の意見を述べたるものにて彼れが博識を窺ふに足る。“Vulgar Errors”は其の名の示すが如く當時の社會(十七世紀)に流行せりし種々の妄説謬信等を説破するを主とせる作なり。當時の俗衆は水晶は固く凝結したる氷のみ、金剛石は山羊の血を以てせば自由に伸縮するを得べし、又は象には關節なし、

土豚は盲目なりなどやうの笑ふべき妄説を主張せしなり。彼れすなはち博引旁證一々に科學上の例を示して此等妄説を證破せり。されども彼れが作中最も眞面目にして讀みて有益なるは最初に掲げたる「Religio Medicus」なるべしこは單に文章としても永く愛讀せらるべきものなり。この他に「Christian Morals」〔基督教道徳〕と題せる著ありこは博士ジョンソンが其の卷頭に「ラウソンが略傳を附録して出版せし以來世に知られき。

彼れが羅典語脈を餘りに多く混用せる由は已に前に語りたるが其の措辭の瑰麗なる眞に讀者の目を眩せしむるに足るものあり。且や彼れの文に於ては一種稀有の結合存す他なし彼れは其の本來の面目たる哲理的思索に交ふるに滑稽諧の趣味を以てせり。彼れが文は譬へば木綿地に於ける金銀糸の刺繡の如し而も其のとりわけせのわざとらしからずのづからなる美しさを具へたる是れ其の技倆の卓絶なる所以なり。加之彼れに多とする所は彼れが一文を草せんとして或問題を捉らへ來たるや普通の著作家と異なりてあらゆる方面より件の問題を考察し究めし幾と餘蘊なきまでに阻礙したる後とて始めて筆を把りし一事な

り、されば其の措辭おのづから圓熟絶えて蕪雜の失を見ず。コールリッヂがいたく彼れの文を稱美せしも以あるかな。彼れが爲人はた取るべき者あり彼れ曰はく「余は他人と説を異にするが爲に之れと絶たんとは欲せざるなり况や怒り罵ることをや。本來相投合せざるを強ひて吾が意に従はしむるも竟に何の甲斐かありん數日の後また必然離るべければなり云々」と。又曰はく「人は其の心を省れば天道の面影の宿れるを見るなり。自然は神の面影なり。此の理を解せざる者は未だ人間のアルファベット(いろは)をも學ばざる者也」と。以て其の温厚にして敬虔なりし性質を知るべし。

クラレンドン

歴史家として五文星の隨一に列すべきエドワード、ハイド後に大法官チャレンゴとして知られ就中クラレンドン伯の名によりて最もよく知られたるハイドは政治上の名士としても王權黨の名流としても其の名一世に噴々たりき。彼れは眞家に生まれ(一六〇八)オックスフォードにて勉學し十六歳の折ロンドンに遊び専ら法律學を研究せり。其のころベンチヨンソン、チャーレル、モーレー、ヘールズ等當代の文豪と

相交はり益する所尠からざりきといふ。一時はバリストル(狀師)たりしが幾程もなく廢業して身を繁劇なる政治社會に投じき。初めは民黨中の温和派として知られ屢々國會に演説して朝議に反抗せしこともありしが後年ハムチン等民黨中の名士等と議合はず相激論すること幾回、竟に心を王黨に傾けいつしか忠實なる勤王黨となりぬ。かくて民黨の世となりしや彼れは外國に流浪し他の王黨と共に定めなき世の有様を嘆じたりしが、時勢また一變シクロンエル逝りて王政の舊に復せしやあらためてチャールス二世王に擧げられ大法官となり男爵に叙せられ、ついでまたクラレンソンの伯爵に叙せられたり。しかるに其の謹嚴廉直の舉措は兎角に淫逸なる朝廷と相容れず寵遇いくばくもなくして衰へ、餓口しばしば金をとらかし彼れはつひに彈劾せられ朝を逐はるゝに至りたり。一千六百七十四年佛蘭西の客舎にみまかりき。

クラレンソンは多くの國書及び種々の公文類を司録して夙に文名を知られたりしが眞に文學上に彼れが名を留めたるは『The History of Great Rebellion』(大叛逆史)に外ならずとす。すなはち英國の大内亂を叙述せる者なり。這は今の所謂嚴

正の歴史にはあらず只普通の記録牒もて一千六百二十五年より同三十三年までに至る前後八年間の出來事をいと詳に叙説せるものなり。此の書の材料は著者が耳聞目撃より得來たりたるなれば事實おほむね確實なるが上に文辭はた嚴正にして暢達、多少の失あるにも係らず永く有數の原史として尊重せらるべき價値あり。クラレンソンが看察と評論とは未だ全く公平なる能はずといへども兎にも角にも紛糾錯雜せる種々の事件、就中種々の人物を巧に叙狀し一目の下に瞭然たらしめたる手腕は當時稀に見る所にして見識はた非凡なりと稱すべし。而して其の人物を批判し性質を剖説するの點に於ては尠くとも空前の技倆ありと稱せらる。又その身王權點にありながら頗る公平に、民黨の諸名家を評論せる、優に其史家たるの品位にかなへり。強ひて其の文病を指摘せば動もすれば散漫に流れて不精確なるにあるべし。思ふに此の缺點は恐らく彼れが元來修辭的素養多からざりしと多年公衆に對して演説せし演説句調の脱せざりしとによるなるべし。クラレンソンの著書は前の『大叛逆史』の外にトマス・ホットンの著『Leviathan』に答へたるもの及び『Essay on an Active and Contemplative Life』(活動的及靜思的

生活論』といへるあり。後者は殊に有益なるものとす。其の他教育上、社會上等に關する小論文數を知らず。要するにクラレンドンをして其の名を後世にといめしめしは能く複雑なる人物事件を井然たる秩序によりて嚴正なる筆致をもて描寫したる史的手腕にあり、彼れは英國歴史文學の史上に特筆せらるべき資格を有す。

トマス、ホップス

哲學家として五文星の一に列するホップスの學說と當時の社會とは離るべからざる關係あり。蓋し峻嚴冷酷なる清淨主義の極端なる抑壓に苦しみし社會は王政の舊に復するに及びて其の反助の結果としてあらゆる惡徳を行ふに至り腐敗の極端に流れたり。其の腐敗のいかばかり甚しかりしかは尙後の章に叙説すべきが此の大墮落と連關してまた此の腐敗社會の反映として且つ其の感想の影として頗る考査すべき價值あるものはトマス、ホップスの利己的哲學なり。換言すればホップスの哲學は當社會の感想の系統的學說（システム、システム）となりて化現せるものとも評すべく而して當時の社會はホップスの哲學を實行せるものに外ならずと評す

べし。すなはちチャールス二世王の朝廷に出入せし朝臣等は明に實行界に於ける利己論者兼、無神論者なりしがホップスは明に思索界に於ける利己論者兼、無神論者なりし也。彼れはあらゆる人間の動機を利己の性情に歸せんとせり。されば十七世紀の中頃に於てはホップスの哲學は普く世間の注意を牽き兼ねて後代の哲學上に甚からぬ影響を及ぼしたり。

トマス、ホップスは千六百十年四月五日メルメスベリーに生まれき。其の性の怯懦なりしは其の母が妊娠中に西班牙艦隊襲來の事ありていたく驚駭し正日に先ちて生み落とししが爲なりといふ。トマスはオックスフォードに學ぶと五年にして佛、伊、獨等を歴遊し、歸りて某伯の書記となり且つロオド、ペーコン、ベン、ジョン等時の詞傑とまじはりき。千六百三十一年更に佛、伊及びザゾイ等の地に巡遊しヒザにて有名なる天文學者ガリレオに會ひ千六百三十七年歸國せしが當時方に熾んなりし政治熱は彼れをして靜居勉學すること能はざらしめき。彼れはもと熱心なる王權黨なりしかば民權黨が全勝を得たりし間は本國にとゞまること叶はずして佛京パリに遁れたりき。彼れが佛の哲學者アカルト及び其の

他知名の士に交はりしは其のころなりきといふ。

ホッブスは英國人に普遍なる所謂實驗的精神（エクスぺリメンタルスピリット）に富めりき。彼れは以爲へらく、人は本來利己的にして邪曲なる者なり所謂正邪善惡は自家が利害を標準として命名したるものに外ならず。彼の優美高雅なる情操の如きは人間の固有にあらざり。又曰はく、最も大なる善は四肢五臓を十分に發達せしめて全身の營養を計るに在り、死と苦とは人間の最大惡なり。人の欣求する所は只快樂のみと。又曰はく、何が故に友誼は重んぜざるべからざるか。友人は我れを助け我れを益すればなり。人は何の爲に慈善を行ふか。不幸は我が上にも或はふりかゝるとあるべければ也。人心の根柢は此の如きのみと。又曰はく、音樂や、繪畫や、詩歌や、此等は過去を喚び戻し來たる所以の模倣（イミテーション）として愉快なるものなり。蓋し過去にして善ならば善なるものとしてそを模倣する點に於て愉快なり、もし過去は惡とせんか之れを過ぎ去りたるものとして模倣するが故に愉快なりと。彼れの説によれば美術は一種の器たるに過ぎざるなり。而して彼れが哲學の精神はた此の機械主義に外ならず。曰はく、智は利用を爲す保護を人に與ふる者智なれば也と。彼れが

眼より見れば智もまた何の威嚴もなき一種の器械にして一身の利害を保護補助するの點に用あるのみ。彼れまた曰はく、賢者は富まずとストイツク派の學徒はいへれど然らず、富者は必ず賢人なりと。是れ黄金を以て最も貴しとするの説に近し。之れを要するに彼れの説によれば人は利己の爲に働き利己の爲に生く、其の人を愛し他を顧るは利己の目的を圓滿ならしむる方便のみ所詮人間は利己心の凝結體なり。さればもし之れを其の成り行くがまゝに放任し置く時は社會は紛亂して無秩序となり人と人と相食まんとする修羅場を現出するは必定なり。かるが故に之れを制するには專制君主獨裁政治を建設するを要す云々。これ彼れが『Philosophical Rudiments concerning Government and Society』、『政府及び社會に關する哲學的原理』の成りし所以なり。若し彼が哲學の本領たる自己的快樂説の根據を窺はんとせば須からく『Leviathan』 or 『The Matter, Form, and Power of a Commonwealth, Ecclesiastical and Civil』、『宗教上及民治上に於ける共和政治の物質形式及び權力』といふ著を讀むべし是れ彼れが最も名高き著書也。彼れはまた『Of the Body Politic』を著して神學上の問題を例の自己主義に歸せんとせりされども論駁する者日に漸

く夥しくなれりしかば彼れが説は次第に世に捨てらるゝに至りき。此の駁論者の中にはクラレンドンありシヤフツペリーありアラウンはた其の隨一人なりき。ホツブスが哲學上の功過は時勢に相照らして考ふる時は今尙輕々しく判断しがたしと雖も純文壇に於ける彼れが功は蓋し尠少ならずと稱すべし。彼れは晩年ホーヤルの翻譯家として文壇に現れ先づ始めに『オデッセイ』を譯し次いで『イリアッド』全篇をも譯しき。其の譯の精確なりしはホーフが稱揚せるにても知らるべし但し詩としてよりもむしろ散文として譯せりと評するが妥當なるべし。彼れは散文の名家として當代に錚々たりし者の一人なり。其の文辭の明晰と精駁は流石に論理家たるの頭腦に耻ぢざるもの也。且や其の學說の識者をして眉を顰めしむるものたるにも拘らず個人として彼れの行實は頗る稱美すべきの價値あり。クラレンドン曰はく余は彼れが卓拔なる學識と毅然褒貶に頓着せざる剛直とを尊敬す。彼れは齡九十二歳にして逝りき。

第六章

デヨン、バンヤン

韻語壇に於けるミルトンと相照映して十七世紀の散文壇に清淨教的理想を發揮

せる者をデヨン、バンヤンとす。そも新教徒の根本義は個人救済の神徳を説くにありて清淨教派の第一義は熱誠と謙遜と勇往とにあり而して最も平易に且巧妙に前者を説明し最も著く後者の影をも描きたる者は英國古今の作家中、否列國の文人中恐らくはバンヤンの右に出づる者なからん。されば其の傑作『天路歷程』(Pilgrim's Progress)はひとり英國にて廣く愛讀せらるゝのみならず荷も基督の福音の傳へらるゝ處には殆く翻譯せられて愛讀せらる。現に外國語に翻譯せられたる者八十五種の多きに及べりといふをもても其の如何ばかり弘く愛讀せらるゝかを知るに足るべし。按ふに此の書は著者が靈性上の苦悶を種として其の從來抱持せし信仰の壞れて安心立命の地を失ひ種々の癡妄轉倒を経たるの後翻然として改宗し竟に天帝の救済を得るに至れる精神的變遷を精緻平明なる筆をもてさながら畫の如く寫し出だして以て一篇の小説となせるものなり。荷も道徳的若しくは宗教的意識あらん者にして此の書を細かばさながら精神上の苦悶に惱める第二の我れに接するが如き心地すべし。されば此の書が倫理道徳の最早人間界に存すべからざるものゝやうに思惟せられたりし當時人々内に省

みて良心の恐怖を感じ常に應報を恐れ坐るに神明の加護に依らんと欲せりし當時、其の心戦々恟々たりし英國人の間に歓迎せられたる、蓋し故ありといふべきなり。且や人多く聖賢ならずして失敗と過誤とを免かれ難しとせば常に靈性上の苦悶を感じ之れが救済の道を得んと努めざるはなかるへければ此の書の深き興味をもて今尙廣く愛讀せらるゝ、亦偶然にあらざるなり。

さて此の有數なる寓意小説の大家チヨン、パンヤンは一千六百二十八年ベッドフォードに近きエルストー村なる貧しき鑄掛師の家に生まれき。彼れ幼かりし程は父の稼業に従事せしが十八歳の折に議院の率ゐたりし軍隊に入りて去ばらくは身を兵事に委ねき。幼きより貧困の中に人となりしかば只いさゝか物讀み物書くとを學びたりしのみ深き教育とは受けざりき。されど天性正直にして敵虞の念に富み且多感多情にして想像に秀で頗る奇癖ありき。彼れは動もすれば心を天上界に馳せて恍惚淨樂の生涯を夢想し若しくは人間の煩惱、罪惡、不義、非道を思ふてはみづから責むると甚しく毎にみづから墮獄の苦しみを感じ生きながら惡鬼に背賣せらるゝをよぼえ歡樂の中にも悲哀を觀じ得意も到底は失意なりと

想像し自己を無上の大罪人なりと自責し煩悶し苦惱し絶望し遂に堪へかねてむしろ大惡魔たらんと欲せしことあり。或時は無漏の安養界に遊びて羽衣の天使と翺翔し或時は墮落して阿鼻焦熱の大苦悶を経験せり。要するに光明、闇黒、美德、罪惡、悲喜、哀歎の影は絶えず彼れが心眼に往來して或は樂しましめ或は泣かしめたり。すなはち兩端に迷ふて歸趨すべき所を知らず茫然中有に彷徨せり。地に止まらんか罪惡の身を汗すに堪へず、天に昇らんか道なきをいかにせん。彼れは人生の不安を感じて頻に安立の地を求めんともがきぬ。換言すれば彼れは常に罪惡の幻影イリュージョンに襲はれ惡鬼の強迫に苦めり。其の一旦改悟して洗禮バプティズム教會派に改宗するに及びてや彼れが感情は一層極端となり禮拜する僧、供物壇、法衣などに對してすら非常の煩悶と苦痛とを感じき。彼れは神を敬愛するの餘り器服の如きをすらも崇拜せんとせりき。彼れのいまだ改宗せざりしや素行頗る修まらざりきさて一たび悔悛して清淨教徒となりてよりはあらゆる快樂を唾棄し去りしが尙其の幼時よりの習慣たりし寺鐘を打鳴らして之れを聽くの一事は如何にしても禁する能はず拆々そらるゝに寺院に行きて鐘を聽くことを樂めりき而も其の心中

戦々として今にも鐘樓の崩壊せんかと恐れて決して鐘下に近よらざりき。又嘗て説教の半に圖らずも不敬の念萌し、かば大に怖れおのゝき開かんとせし口を緘し黙然たると久しかりきといふ。ペンヤンは時に無邪なる小兒の如く一時の感想に打たれ恍惚として狂喜し手の舞ひ足の蹈む所を知らざりしともありしがやがて天外に聲ありて己が罪業を罵るが如く覺え慄然として身を措くに處なきを感ぜしとあり。彼れはじめは人と應對する毎に動もすれば妄に誓言を口にする癖ありしが其の不徳たる由を一婦人に非難せられてよりいたく之れを悔いぬ。彼れ當時の心情を語りていへらく余は厭して獨り慚愧を催し上帝の己れを殺して再び小兒と生まれかはらせ誓語の惡癖を脱して自在に談話する身とならしめたまへと願ひき云々と。此等唐突なる變動急激なる決心不定なる情操もしくは奇怪幽玄なる觀念及び幻影の斷えず彼れが心中に出沒せしは皆其の放縱淫溢然ゆるが如き想像の所爲にして此の想像こそ彼れをして詩人たらしめはた感激者たらしめ、竟に彼の大寓意譚『天路歷程』を綴らしめし所以なるべけれ。而して其の境遇と時勢とは彼れが此の天性をますく助成せしめしなり。

ペンヤンは二十才前後にして妻を迎へしが洗ふか如き赤貧は日夕必須の需要品をすら十分には供給する能はざりき。僅に有せりし家財とては只一個の匙と一箇の皿とのみなりきといふ。幸に新婦が携へ來し無價の寶のあるありて貧苦が中の慰樂を得たりき。無價の寶とは『The Plain Man's Pathway to Heaven』(『正人舛天之道』)及び『The Practice of Piety』(『敬神之實踐』)と題せる二書なりき。彼れが後に著し『Life and Death of Mr. Badman』(『邪氏の傳』)は多く此の二書より脱化せる者なりといふ。王政の舊に復せしや政府は令を下して共和政府の下に成長せし異宗徒を嚴罰せしがペンヤンは洗禮教會の長者たりしかは捕へられて糺問せられつひに有罪と認められて二十年の久しき間ペンダフォオドの獄に投ぜられき。彼れが不朽の寓意小説『天路歷程』は實に此の禁獄の間に綴られしもの也。彼れは入牢中日々に手工して若干の賃銀を得之れと教友等の酬金とを送附して辛くもその妻子が口を糊せしめき。さて赦されて青天白日の身となりしや敬神の念ますく固くロンドン、ペンダフォオドの間を往來して一意布教に力を盡くしき。千六百八十八年ふと感冒にて打臥し、が醫藥効なく竟にロンドンにて逝りぬ。

ペンヤンが著書數多きが中に彼れをして重からしむるもの三あり曰はく“Grace Abounding in the Chief of Sinners”曰はく『天路歷程』曰はく“Holy War”『淨兵』也。此等は共に著者が宗教的自傳ともいふべきものなるが此れには單に『天路歷程』のみに就いて彼れが結構と文致の一斑とを略説するをもて満足すべし。

『天路歷程』は二篇より成れり而して第二篇はすべて太く劣りて精彩は全く第一篇に在り。蓋し第二篇は第一篇の人氣非常なりしより起稿せしものなればちづから其の間に托興の差違あるに由るならん。さて此は前にも少しくいへる如く一個の基督教徒が其の罪業深き生活を解脱せんと志し種々なる厄難を経て終に永恒の幸福神助を享くるに至るまでの雜多なる誘惑苦悶艱難等の經歷を精細靈活の筆をもて巧に狀寫したるもの也。詳しくいへば、クリスチアン〔基督教徒〕といふ人唯ある市に住みけるが苦しき今の身の上よりして樂しかりし以前の生活を思ひ起こし無限生の市、ニウゼルサレムに旅立すといふに始まり其が途中に於ける冒險危難はた其の山野の風景出會せし仇敵、朋友、道連となりし回國者等を以明快なる叙筆もて面白く寫しだせるもの也。ペンヤンは常に以爲へらく人は

噴、患の見なり生まれながらにして罪深く墮獄の罰を蒙むるべき約束を有すと。彼れは常にかくの如く感じて畏縮逡巡せり。彼れ曰はく、一日余は隣市に行きしが忽ち我が罪惡の怖るべき結果を思ひ起こし茫然共同椅子に坐し天を仰ぎて嘆じき。さる程に怪しむべし太陽は再び我を照らさじと叫び街上の家屋と瓦石とは余を徹塵にせんとどよめきぬ。驚いて熱視すれば幸ひなるかな、彼等は依然たりき云々と。彼れは絶えずかゝる奇異なる想像に苦しめられ其の身の非運を嘆じ汚れたる人間を脱して天上の清淨界に入らんともがけりき。クリスチアンといへる回國者は取りも直さず作者ペンヤンが替身なり。彼れは志ばく、人生の暗谷に陥らんとして悚然たりし者なり。彼れ曰はく

余は夢に此の谷の右方にいさ深き窟あるを見き。この窟は古へより盲人の相率めて陥りあはれなる最後を遂げにし所なり。又左手には怖るべき泥濘ありき一たび之れにはまる時は替人も立つべき處を見出だす能はず。

今や彼れは此の暗谷に入り前は不思議の濠に臨み後には無底の泥濘を控へ一步を轉ずれば身は奈落の下に沈まんとする窮境に立ちて進退維れ谷まり頻りに上

帝の冥助を祈り辛うじて救濟せられて竟に安立の地に達せり。『天路歷程』の主意は蓋し此れに外ならざるなり。而してマンヤンは如是主人公に配するに *Giant Despair* (大絶望) *Hopeful* (多望) *Doubling Castle* (疑惑城) *Vanity Fair* (名利市) といふ抽象的人物、場所等を以てし巧に迷妄の流轉を寫せり。若し此等生命なき抽象的事物をして他の凡作家の筆に上らしめば冷々死灰の如く讀むに堪へざるべきものとなるべきに其の一たびマンヤンの筆に入るや皆劃然たる個性を具へて活躍しながら活人物に接するの思ひあらしむ。其の他彼れが寫し出だせる光景は皆悉く真に通りにて婦幼をだに喜ばしめずばならず。彼の『神女王』の著者スペンサルの如きも比喩的物語の名家なれど讀者が彼れの作に於て興趣を感ずるは概して人物の上にあらずで其の圍繞せる事件と光景との绚烂たるに在るなり。所詮抽象的性情を擬入し假空的光景を點綴し而も生氣あらしめ血肉あらしめ讀む者をして悲喜嘆笑せしむるはマンヤンが特擅場といふべし。思ふに彼れが作中に現れたる人物事件はいづれも空想の作物たりといへども其の實人生の根柢より來り社會の反動より來れるものなりされば其の景を叙し人物を狀するや筆々神に入り

り句々微を穿ち讀むこと彌深くして旨味のいよ／＼濃厚なるを覺えしむ。吾人は之れを讀みて單に作者の爲人を窺ひ得るのみにあらず亦以て倫理紛亂せる當社會の面影を髣髴するを得るなり。

又思ふに『天路歷程』は幾段か平易なる『西遊記』とも稱しつべし。『西遊記』は佛教を根本義としたる正覺成道の寓意譚、『天路歷程』は基督新教を主旨としたる轉迷開悟の比喩譚なり。前者は複雑にして豊富、後者は單簡にして淡泊、前者は幽玄、後者は通俗、前者は溟澁にして荒唐、後者は温雅にして當然、前者は殺伐にして勇ましく花々しく、後者は蕭條として寂しく且つ質樸なり。『西遊記』は其の寓意を離れて讀めば他界の『水滸傳』とも見做しつべく、『天路歷程』は引きなをさば一部の紀行體の社會小説をなすに足るべし。『天路歷程』にあらはるゝ人物はクリスチャンもデスヘア(絶望)もホーアフル(多望)も悉く皆人間的性質を具へたり他の『西遊記』にあらはるゝ人物の三藏法師を除くの外は概して人間以上若しくは人間以上なりが如くならず。更に此の東西の二大比喩譚の相異なる所を言はんか『西遊記』は學者の讀み物にして、『天路歷程』は婦幼無學者をも樂しましむべき著述なり。前

者の用語は美術的哲學的なれども後者の語林は悉く俗談的なり。マコーレー『天路歷程』を評して曰はく、ペンヤンの語林は平民の語林なり二三の神學の語を除けば文盲の農夫にも解しがたき句全くなし數葉の中に二疊音以上の字なきこと間々ありまかも言はんと思へることを限なく言ひ盡したること他に越えたり中畧。十七世紀の末英國に騷客多しと雖も最も高上の想像に富めるものはミルトンとペンヤンとの二人のみ甲は『失樂園』を作り乙は『天路歷程』を作ると。マコーレーの評當たれり『天路歷程』も『失樂園』も共に人間の蹄を踏るものなり想像の力共にいと高しといふべし。唯異なる所はミルトンは稀世の大學者ペンヤンは殆ど無學の人なり而も其の蹄する所は一なり。是れはた不思議に似て不思議にあらず人間の蹄を知るは必ずしも學の多少に因らず偉なるものは覺悟の力なり。之れを要するにペンヤンが廣く讀書社會に歡迎せらるゝ所以は崇高なるもの奇怪なるもの悲惨なること可笑しきとを巧に綴り合せたるの伎倆のみにはよらじ彼れが平明流暢なる文致はた與りて力あるなり。夫れ彼れの如き情熱的精神をもて彼れの如き高遠なる宗教上の物語を綴る時は必然の文弊として粗笨雜

雜に陥るか然らざれば險晦幽玄に流るゝを免れざるが常なるに彼れはよく此の弊を脱し平易遒勁而も甚だ靈活なる對話を利用し自在に趣を盡くしたり。且つ彼れが文辭の他と異なる特質は半ば無意識的に無數なる聖書の語句を引用せるにも係らず而もよく調諧整頓して離々斷々の弊なく渾然たる一躰をなせる是れ也。トマス、シヨウ嘗てペンヤンを評していはく、ペンヤンの寓意小説に王たるは猶シエークスピアの院本に王たるが如しエドマンド、スペンサルの寓意譚巧みなりといへども彼れは事件の面白きをもて讀者を牽く之れは人物活動して Moreover 讀者をして同感せしむと。佛人テーンもまたいはく、寓意譚にあらはるゝ人物は總じて死灰の如しペンヤンの人物は然らず皆活きて動く云々と。共に適評と稱すべし。

第七章 復位期の文學

清淨教派の枯禪主義も其の勃興の當時に於ては放肆浮靡の極端に流れし文藝復興熱の弊を救ひて移風易俗の功ありしが王黨全く挫敗し民黨全國に君臨して清淨教派の空想の甚しく實現せらるゝに至りては其の弊や、顯著となれり。蓋し

彼等の志を得て政教の二權を掌握せしや單に有害なる驕奢淫蕩の習俗を矯正するのみをもて足れりとせず普く嚴令を下して遊興祝祭をはじめとしてかりそめにも質素勤儉の旨に觸るゝ限は悉く之れを禁制し竟に全國の民をして純然たる枯禪僧たらしめんとせり。こゝに於てや個人が行爲を督すべき良心の畏怖はただちに公衆を律する原動力となりて活動し清淨教派の嚴格なる教規はさながらに政府の法令となり賢愚曉昧を問はずあらゆる國內の男女をして強ひて之れに従うて生活せしめんとせしかば詩歌藝術舞蹈演劇遊戯のたぐひは殆ど悉く禁止せられき。共和政治時代の英國は冷然索然笑なく歡樂なき晩秋の如き國土なりきさもあれ人は單調を嫌ひ變化を好むものなり終日ことさらに危坐して正言し強ひて笑を忍びて澁面を粧ふは人情の自然に背けるものなり。假令此の極端なる偏調をして理に適合せるものたらしむるも斯くの如き有様の永續せんことは望むべからず。清淨教徒の嚴格なる道義と法令とは日ならずして形式的となり煩瑣的となり漸く嘲笑の的となりぬ。是れやがて英國社會に第二の反動を招致せし所以なり。

共和政府の統領井リアム、クロムエル逝き其の子リチャード、クロムエル繼ぎ共和政治の基礎漸くゆらぐや怖るべき反動の潮流は久しく奢侈の佛國に流寓したりしチャールス二世をいたゞいて捲き反し來たり政治上の反動と協同して共和政府を覆轉せしと同時に人情風俗をも激變し嚴令の爲に矯飾せし昨の似て非なる枯禪僧をして無耻の淫蕩者たらしめたり。此の大敗俗の時代を復位期とす。按ふに佛蘭西風の驕奢と淫佚とが彼の國の特有たる審美的好尚と風流なる嗜好とに伴はれずして突然反動の波に乗じ久しく枯禪主義に倦み果てたりし實物主義の英國に入り來しなれば其の弊得ていふべからざるものありき。王チャールス二世が嗜む所は諸司百官はいふに及ばず諸民皆之れに倣ひ昨は卑しみて斥けしものを今は狂奔して歡び迎へ昨は惡みしものを今は愛し昨は敬せしものを今は嘲り翻然全習俗の局面を一變せり。金碧燦爛たる後宮だに殆ど威嚴ある青樓の如く儀仗整然たる禁庭だに其の實相を觀じ來たれば體裁よき破落戸の集會所たるに外ならずき。况や其の下をや。美德は此の時より人間に存すべからざるものゝ如く見做され惡徳は揚々として青天白日に濶歩し我れこそ人間の本性

なれど誇るものゝ如くなりき。さればこそ已に前にも語れる如く當時の碩學ホツプスは其の哲學の中にて人間の所詮私慾的動物に外ならざるを論理的に證明し當時の詩人文客等も其の作就中戯曲に於て此の理を匿々と活寫したり。社會は貴賤上下を論ぜず概して此の理を實現し制度文物に反映せる所はた此の影に外ならざりき。王チャールズ及び其の驕幸等の不義亂行は之を語る者をして報然たらしむ。當時もてはやされし詩歌戯曲は我が元祿期の好色本にひとしく往々其の題名をすら公言するを憚らしむ。詩人ロヂェスタル、井ツェリーの輩は孰れも當時の廷臣なりしに其のいふ所多く道に背き其の行ふ所は更に之れよりも甚しかりき。又彼の時文の泰斗と仰がれ前のベンヂョンソン後の博士ヂョンソンにひとしく一世の文壇を睥睨せし詩人ヂョンドライデンの如きすら尙其の行實の上よりいへば阿世の賣文者たるに過ぎざりしなり。さもあれドラインデンはヂョン、ミルトンと直に次章に叙説すべきサミュエル、パトラルとを除きては當代唯一人の大作家殊に十七世期文學の殿として後に章を殊にして語るの要あり而も其の大作家にして尙且かくの如し餘は推して知るべきのみ。要するに當代の文

學は形うつくしからぬにあらぬも其の質はけがれたり。彼等阿世の文人は例へば汚穢を粉飾するの術に長じたりし者なり惡徳を體裁よく描くことに長じたりし者なり。美なる詞藻をもて言ふに忍びざる醜穢の人情を寫しゝなり。たゞし技術として文學を見れば或は此時の文章術をこそ漸く精緻に近づきたるものどもいふべけれ何となれば所謂英國の擬古文學は實に此の際に端を開きて後のポープ、ヂョンソン、アヂソン等の時代に至りて洗鍊の至極に達したればなり。而も彼等當代の詩人等は美の無形中に存在することを認めずして只管現實の皮相に泥めり。彼等は淺薄なる寫實家なり一時の風俗を描くことを知りて人間を描くことを解せず。目前の人情のみを以て人間古今の情なりとし美妙不可思議なる靈氣の宇宙に一貫せることを悟らざりき。こゝに於てや詩はミルトンの大抒情詩を殿として姑く英國の大氣より逸し去り英國は大俗の國となりぬ。而して後の十八世紀即ちアーン女王時代の散文學の精華も未だ之れを見る能はずたましくクラレードン以下四文星のかややくあり若しくは井リアム、テムプルの如き博覽の文士ありて此の間に散文の花を着けきと雖も此れらはた周圍に瀰漫せる俗氣を悉

く脱し得たるものにあらず。若し此の間の作物に就いて強ひて特筆すべき作を求めしめば、ミルトンの大抒情詩に對照すべきものとしてペンヤンが散文の寓意小説ゴッ同じくミルトンの嚴格なる理想主義イデアリスムの作に對照すべきものとしてサミュエル、パトラルが放縱なる現實主義の滑稽叙事詩最後に「ライデン」が縱横自在の作。

第八章 サミュエル、パトラル

デヨン、ミルトンは清淨教派の美所を發揮し其の高遠なる理想を鼓吹せし詩人なり。彼れが作中に隱顯する美德の影は所詮は清淨教徒の無上醇粹となせりし美德の影なり。彼等の美所は其の曾て實現し得ざりしものまでミルトンが詩中に現せられたりと評すべし。蓋しミルトンは僅に清淨教派の半面のみを描寫し得て他の半面を逸したる觀あり。他の半面即ち清淨教の弊所醜所は復位期以後に於て曝露せられたり。而して其の先鋒となりて尤も銳利なる嘲笑の筆を揮ひし者を王黨の諷刺家サミュエル、パトラルとなす。パトラルのミルトンに於けるは嘗に其の性情の相異なるのみにあらず其が境遇も閱歴も主義も技倆も悉く皆相反せり。即ちミルトンとパトラルとは政治上に

於ても信仰上に於ても全く正反對の位置に立てり。而して其の文學に於ける傾向は殊にいちじるく相背けり。ミルトンは謹嚴眞摯、パトラルは蕩逸洒落、若しパトラルの性情より滑稽的といふ質を除き嘲笑感能の能を除けば彼れ恐らくは皆無シツとならん彼れは何事をも嘲笑することをよろこべり笑ふべき物なきや彼れはあのが不幸をも嘲笑することに躊躇せざりき。彼れは嘲笑の塊なりき。『失樂園』とパトラルが傑作『ヒウヂオラス』とは尤も高上なる理想主義と尤も平庸なる現實主義との好代表といふべく而して二者の時を同じうして世にいでたるは偶、以て時勢の兩面を窺ふの好材料を供する者とすべし。ミルトンは其の精根と年月とを偏に自由と道義との爲に費しパトラルは全く之れに反して清淨教徒の弊所を刺笑するに全力を費せり。ミルトンの心を鼓吹せしもの三、曰はく神に對する義務、曰はく美術に對する義務、曰はく政治上の自由に對する義務の念是れ也。パトラルに於ける著き三點は(一)その大なる滑稽チウケイ(二)強大なる常識(三)いみじき詩的想像なりとす。右の中第三點に就ては彼等相共に有せりし所ならんが他の二點に於ては全然相異なれり。蓋し圓轉滑稽はミルトンに皆無にしてパトラルは之れが

權インカニシ化カニシとも評しつべし。さてパトラルの滑稽は重に高尚なるものと卑野なるものとを巧に對照せしむる點にあり、すなはち彼れは偉大なるもの、崇高なるもの、神聖なるものを捉らへ來たりて笑ふべく嘲けるべきやうに狀寫し讀者をして絶へず驚笑を催さしむるに在り。之れに反してミルトンの目はひとへに清淨教の美所を見たり隨うて彼等が醜所、痴態、過激、狂愚等の笑ふべき失弊は之れを見るに及ばざりき。パトラルは之れに反して美面は毫も見ることなく偏に其の醜面を見、且嘲り且笑へり。楯の兩面を知らんと欲する者は此の二詩人に接せざるべからず。

パトラルは貧しき農家に生まれウィスタルの小學に入りし後更に勉學せんためケンブリッヂの大學に入らんとせしが事情は之れを許さざりきともいひ或はオックスフォードに入りて勉學しきともいふ。其の傳かくの如く曖昧なれども要するに其が著作中に現れたる學識の大學の講堂より得たる者ならざりしは事實なるが如し。少年の折故郷なる或豪家の書記となりしがその天稟の才能はいつしか他に知られきと見え程なくケンント伯爵夫人の家に寄食する身となり圖書室に

出入するを得やがて名家セルデンに知られ其の秘書官の如きものとなり後又熱心なる共和黨の一人にてベトフォードシヨアの富豪なりしソル、サミュエル、リウクの書記となりしが其の名著『ヒウヂアラス』の材料となれる可笑しき人物、怪しき風俗などは實に此の時に見聞せるものに係るといふ。其の主人リウクの如きも彼れが諷刺詩に取り入れられて其の主人公の本となりき。かく恩人をすら嘲笑するを憚らざるによりて此の作家の爲人を推知すべし。さて晩年に至り彼れは王黨にも見捨てられロンドンロンドンの街々をさまよいたる後エベント、ガーデンなるロース街のいぶせき住居に悲惨の殘年を送り竟に病みて逝るに及び辛うじて友人等の醜金によりてセント、ポール精舎に葬られき。

『ヒウヂアラス』は共和黨殊に長老教會及び獨立黨インディペンデントの二大派の流弊と狂妄とをヒウヂアラスといふ清淨教徒の武士が中古の武士に擬して邪を挫き正を助くる義侠の目的にて武裝して處々を遍歴すといふに托して諷刺せるものなり。其の諷刺のするどくして骨を刺すが如きものあるは蓋し彼れが王黨なりしが爲のみにはあらで彼れが嘲罵の天才と彼等を嫌惡するの情とが相合して一層彼れの筆をし

て鋭敏ならしめしに因るなるべし。さて此の詩の結構は有名なる西班牙の作家セルヴンテスが『ドン・キホーテ』に取れるなり。着想の『ドン・キホーテ』と異なる所は中古武士に代ふるに清淨教徒を以てし當時の政治上並びに宗教上の狂^{フオレン}妄と癡態を嘲笑することを旨としたるにあり。尤も其の人物事件の如きは全くパトラルが創意にかゝるものなり。但し彼れの作はセルヴンテスのとは全く異なりて完全なる小説とは稱しがたし何となればセルヴンテスの本意は高上義侠なる人物に對する愛慕と尊敬とを失はしめずして尙能く主人公(中古武士)の舉措の仰山なるを笑はしむるに在れどパトラルは強ひて其の人物を嘲笑すべきやうに描きいだし力めてをかしく賤しむべきやうに造りなしたればなり。更に詳しくいへばドン・キホーテは讀者之れに對すれば笑を禁じがたしと雖も尙其の中に高大にして愛らしく敬すべき所あるを感ず。ドン・キホーテの可笑しみを感ぜしむるは其の主人公が氣高き義侠的情操と之れを圍繞せるをかしく出來事との不調和にあれどあらゆる醜なるもの卑劣なるもの誇衒利己偽善等を結合せるパトラルが主人公は嘲笑すべきといはんよりはむしろ憎悪すべきものといふべきなり而

して憎悪の情は可笑しといはんよりはむしろ慷慨の情を呼ぶものといふべし。按ふにあらゆる喜劇的著作は笑を催さしむるを主とす而して巧に矛盾と不調和とを描き得るに及びて成功す調和が美の原理なるが如く矛盾は好笑の原理なればなり。パトラルの作は此の點に於て『ドン・キホーテ』に及ばざること遠し。

『ヒウヂブラス』は幾回にも分かれたるものにて一時の作にあらず。其の第一篇は三章より成れるが千六百六十三年に第二篇は其の翌年に第三篇は更に十四年を経て千六百七十八年に出版せられき。此の作の出でしや非常なりし一時の評判はミルトンの『失樂園』をも凌がんとせり。これ一つは清淨教的枯禪を憎める當時の上流社會の好尙に叶ひしと民黨に對する王黨の勝利を謳歌したりしとに因るといへども亦彼れが才の豊富自在にして犀利鋭敏なりしにも由れるなり。彼れは前にもいへる如く學識人に超えて世故に通じたりしのみならず其の想像もゆたかなりしかば平易快暢なる俗談平語と嚴正高雅なる美術的文辭とを調和して巧に其の文を綴り做し巧調珠玉を轉ずるが如く彼れが作を綴ける者をして卷を措くをかたんせしむ。彼れが措辭は簡淨にして勁拔句々の意味深長なるが

多き故に一語々々を引きはなすも間々一格言をなすに足るものあり是れ其の詩句が廣く人口に膾炙し間談話の料に引用せらるゝ所以なり。彼れの文致とミルトンのとを比べんに二者共に暗示的サツヂニシテなる所は一なり但し彼の大敘事詩人は概して間接の引喩アリトシによりて優美と森嚴と崇高とを寫しいたし此れは銳利なる筆鋒によりて其の無盡藏の想像を諷刺的繪畫に化現し來たる。要するにペトラルの作は頓智戯謔のあらゆる變化を有形にして説明せるものともいふべし。通例或一時一處の人物事件若しくは風俗を諷刺するが爲に物せられたる作は其の時其の處以外には價値を維持すること稀なるがペトラルが此の詩のみは單に清淨效徒に對する好諷刺詩たるのみならず實に英語にて物せられたる最もいみじき諷刺詩の一なりと稱せらる以てペトラルの詩才の凡庸ならざりしを察すべし。

第九章 當時の劇壇文學

第十七世紀の末三十年間に於て英國の劇壇は前代未聞の流行を致したり。是れ前十八年間諸興行禁止の反動なり。遊興に飢ゑ觀劇に渴したりし都人は其の禁の解けしと共に殆ど狂氣せるものゝ如く日々劇壇に群集せり。蓋し是れより先

き一千六百九十二年九月國會決議して各地大小の劇場を閉鎖し尙ほ其の令の弛廢せんとを恐れて同四十七年更に嚴重なる制を布きにき。さる程に同五十六年五月に至りてダエナントといふもの辛うじて一種の劇場めくものを開くことの允許を得しが真に此の禁制の解かるゝに至りしは同六十年の八月以後なり。然るに此の十八年間の休業の爲に所謂エリザ朝風の劇は全く衰滅し此の派の棟梁たりしシヨルレーが脚本も已に全く世に棄てられプロム及びシヤスパルメーソ等が新作はた劇界に何等の勢力をも有せざりき。要するに舊派の作家等已に老朽しまた起つべくもあらざりしなり。當時新作の需要は甚しかりきと雖も所謂新作家輩は總じて作劇上に何等の經驗もなく纒かに二十年前の幼時に觀し劇を想起して覺束なくも筆を行ふに過ぎざりしかば其の作大かたは舞臺の約束と調和せず其の他の點また批評の價値だになきもの多かり。井リアムダエナントは新派の率先者にして一千六百五十一年『ローゾの圍み』(Siege of Rhodes)を劇場に上せ同六十八年喜劇『彼の人は主なり』(The man's the master)を著しぬ。何れも劣作にして殊に後者の如きは全く佛劇より剽竊せしものなり。

さる程に劇運次第に興隆しふひく作家輩出せし中にまづ傳すべきは、ジョン・井ル
 ソンなり。彼れは一千六百二十二年(?)に生れ久しくアイルランドに住せりし狀
 師なるが一千六百六十三年喜劇『詐偽』(『The Gleaners』)といふを著しぬ。結構も筆致も
 練熟にして當二十年以來の脚本中に第一位を占むべきもの全篇悉く散文もて綴
 れり。其の後またベン・ジョンソンに倣ひて羅馬の事蹟を材とし莊重典雅なる無
 韻律語を以て『計畫者』(『The Projector』)と題せる性情喜劇を著しやがて文壇を退きし
 が千六百九十年に至りて更に悲喜混合劇一篇を出たしき。時に佛蘭西より華や
 かなる新劇入來じかは彼れが作は爲めに全く其の光譽を失ひぬ。蓋し彼れは善
 くペンの長所を摸倣し得たりと雖も其の劇はチャールス二世の時代に須要なる
 生氣と光彩とを缺きたりし爲に到底時人に喜はるゝ能はざりしなり。
 やゝ文才ある者も此の如く失敗し其の他の鈍腕はた漸く倦憊して筆を投じたり
 し後は作劇の事遂に専門作者の職業となりぬ。當時未だ普通の文學と作劇との
 間に截然たる區別なかりきと雖も尙文人の事業中最も需要多く利得割合に豊か
 なりしは作劇の業なるべしされは名匠大家と稱せられしものも唇々指を作劇に

染め互ひに譽れを争ひしかば一時劇壇に諷客が中原やるの觀ありき。

此の際文壇の一方に雄視し夥多の門下生と共に長く作劇に従事し名聲を一時に
 擅にせしものは實にジョン・ドライデンなりとす。素より當時の作劇家中或部分
 に於ては彼れに優りし者なきにあらねど全體に於ては彼れ(他の詩歌散文に於て
 第一位にありし如く)他の儕輩に抜んでたり。されどもドライデンが事は更に章
 を別にして叙すべければこゝには先づ彼れと相並びて佛劇の輸入に與りて功あ
 りしウォルツ、エセレッツの上をいはん。

エセレッツが眞價の世に知られしは近事なり。其の名の聞えざりしは粗放蕩逸
 毫も世事に拘らず偏に道樂的に喜劇を作し必しも名を求めざりしに因るならん
 か。彼れは一千六百三十四年に生れ幼時は佛京パリにありて人となり其の初
 作『Comical Revenge』の始めて劇壇に上りし時まで本國に歸りしことなし(時に年
 三十四)。彼れは親しくモリエールに接して其の傑作を玩味し具に其の妙機を
 得たりしかば件の悲喜劇の如きも彼の西班牙風の劇の如く強ひて脚色を複雑に
 せる無理もなく又たジョンソン風の劇の如く大袈裟なる滑稽をわざと街誇する

陋もなくたゞ筆に隨ひて當時の花々公子等が風流情事をさながらに寫しだせり輕妙にして洒脫甚の雅態なし。後ち四年を経て更に喜劇“*She Would if she could*”を作せり前者に比して一層の妙あり。次に又“*The Man of Mode*”を作しぬ前の二者にも勝れり。晩年劇文壇を去りて専ら官に仕へ交際官となりコンスタンチノールに赴きやがてストンホルムに轉じ一千六百八十五年間には全權公使となりてラチスボンに徙り解職せらるゝに及びて國に歸り同九十一年に歿しき。

エセレツヂが喜劇の文致は其の先輩の粗造なる諸作に比すれば絹布と荒布との相異あり。然り彼れが作は絹布に比すべく亦た磁器に比すべし華美なれども脆弱なるを免れずこは彼れが思想の浮靡脆弱なるが爲に自然に生じたる結果なり。彼れは當時の浮靡淫蕩なる風俗に對して毫も之れを矯正せん念なく寧ろ喜びて歸趨し之れと同化せし趣あり。其の作の後年英國が再び謹嚴なる英國となるに及びて直ちに劇場より排斥せられしは宜なりといふべし。然れども始めて佛國劇の興趣を英國に傳へしは彼れの功なり其の作“*The Man of Mode*”の如きは兎に角英國の喜劇として永く存命すべきものなるべし。

エセレツヂに次ぐ作家をトマス、シャツドエル(一六四〇—一六九二)とす。シャドエル幼時父に従うて大陸を旅行し壯なるに及びて國に歸りぬされは國劇より受けし感化はエセレツヂ程に大ならざりしなり。其の處女作を“*The Sullen Lovers*”(一千六百六十八年出版)とす。其の序文中に盛にベン、ジョンソンを稱揚し「ジョンソンは如何なる喜劇にも七種以下滑稽を用ひしことなし吾人は之れに倣はざるべからずと論じたるが果してこの作は七種の滑稽を刻苦して綴りあはせたるものなり。缺點もとより趣からぬと初作としては成功に近きものなり。爾來頗る劇場改善の説を唱へ自らも陸續作を出だし最後の作『義勇兵』(“*The Volunteers*”)に至るまでに十七種の作あり。此の間彼れは常にドライデンと論争し或は「愚物」とすら罵られしこともあり。其の作に見るべきもの間々あり中にも“*Epsom Wells*”の如きは今尚ほ愛讀せらる。

以上は王政復古以後第一期の作家にして之れをドライデンを中心とせる古劇派とす。さて第二期即ち中期に遷らん此の期に於て最も秀でたりしもの三人あり。ホッチェリー、オトニー、及びリイ是れなり。ベン夫人、セトル、クラウン及びマッキン

ハムは之れに次ぐ。何れも殆んど同時に著れし作家なれば例によりて其の年長者より叙説せんに。

アラ、ベン夫人は初め名をジョンソンと稱しき。妙齡の時キアナ及び和蘭に於て多少冒険めく閱歴あり三十歳にて文壇に立ち始めて悲喜劇『押付け祝言』(『The Forc'd Marriage』)を物し爾後十八篇の作あり。英國にて文筆を以て世に立ちし最初の婦人なりき。詩文の作頗る多く其の健腕ドライデンを除きては當時敵するものなかりき。最も喜劇に長ぜしが稍々健筆を銜ふ癖ありて毫も案を凝らし句を練ることなかりしかば滑稽概ね淺薄加ふるに社會の陋風をありのまゝに描寫せる醜あり。但し其の傑作『放浪漢』(『The Rover』)は此の弊を脱したり。而して悲壯の作は何れも失敗の作なりき。(一六四〇—一七八四)。

案ずるに眞に英國近代喜劇の祖たりし者はエセレンヂにあらずして寧ろ井リアム、井ッチェリーなるべし。井ッチェリーは痛く時人に冷遇せられたりし作家なり其の喜劇の出版せられしは大抵作の成りしより十年二十年の後にして其の舞臺に上されしは概して其の死後の事なりといふ。其の家代々舊教を奉ぜしが爲に罪を時の

政府に得て一たび佛蘭西に徙されたりしがかして軍隊が豪華の情況を目撃し後年召されてオックスフォードに還りやがてチャールズ二世の陸軍に吏となりぬ。其のころ已に二種の喜劇を作り次いで又『田舎細君』(『Country Wife』)及び『素樸漢』(『Plain Dealer』)の二篇を物せり共に喜劇なり。二篇共に規模廣大詞句華贗滑稽實を離れず諷刺はた深刻よく喜劇の躰を得たり但し筆意稍野なりし爲め時人に喜ばれず殆ど二百年間何れの劇場にも上らざりき。畢竟は其の詩躰が羅紗を捨て、天鵝絨を喜ぶ當時の好尚に適はざりしに因るなれど尙他に因なきにあらず例へば彼れが言助の武人的にして粗豪なりしこと、屢王と爭論せしこと、羅馬法王に私信を絶たざりしと、及び七十五歳の高齢にして妻を迎へしことなど何れも時人が憎惡を買ひ擯斥を招きし緣なるべし。(一六四〇—一七一五)。

井ッチェリーに次ぎて名作をいだしはトマス、オトエーなり。按ずるに王政復古が智界の膨脹に累をなしは殊に文學上に於て著き事實なるがオトエー及びリリーの如きは其の犠牲の隨一なり。彼等は非凡の才器を持し時俗よりは幾段か進歩せる思想を抱きて頗る劇文學の進歩を圖りしたりしが如何せん時尙の束縛緊し

かりし爲めに竟に意の如く驥足を伸ぶる能はずして蹇驢と位して空しく槽檻の中に老死したりき。オトニーは一千六百五十一年に生れしサセックス州なる牧師の子なり幼よりオクスフォードなる基督大學に入りて神學を修めき。一千六百七十年長期休業の間一夜某公爵の爲にベン夫人が作を演ずる一人となりしことあり彼れは大學に歸りて後も當日の樂さを忘れざりきといふ。同七十五年悲壯劇“Alcibiades”をものして時の名優ベツタルトンに送るベツタルトン之れを場の上しぬ。この作悪作なりしに拘らず無事に一興行を終へにしかば彼れは續きて“Don Carlos”を著しぬ以後彼れが作は毎にベツタルトンが一坐にて演ずる例となりぬ。此の時亦二三の喜劇を作せしがいづれもいと拙劣なる者也。一千六百八十四年悲劇『孤兒』(“The Orphan”)を作しきことは沙翁以後有數の作なり。蓋し其の推重せらるゝは主として革命以來絶えて見るを得ざりし一種の柔情のいとよくあらはれたる點にあり。かくして斯道の經驗漸く熟し來りしかば彼れ其の最後の傑作に従事し一千六百八十二年“Venice Preserved”を物しぬ。こは『孤兒』に優れる佳作なり。當時の劇の通弊は悲劇中の人物に大言壯語せしむるにありしを彼れ之れ

を除く代ふるに情感の自然にして痛切なるものを以てしたりかゝりしかば其の劇の一たび場に上りしや觀る者感動せざるはなかりき。現代批評家ゴッスの如きは痛く此の作を稱揚して優かに沙翁が傑作の次位にあるべきものとし更に彼れを散文の沙翁とたゞへき。げに彼れをして意のままに其の作を作らしめしならば或は小沙翁たる譽をも博せしならんか。其の後尙一篇の喜劇をものせしが貧と病と交り至り長く世と交る能はず處々を流浪せし末一千六百八十五年ある麵商の店頭に斃れ死にき。餘値かに三十六。ナサニエル、リー(一六五五—一六九二)が生涯はエオトニーと相似たり。彼れはオトニーに同じく牧師の子にして幼時はケムマロヂの神學校にて教育せられ二十歳の時俳優とならんと欲してロンドンに出で某劇場に入りて一たび或役に扮せしが悉く失敗せしかば轉じて作者となり初めて“Nero”を作し翌年又“Gloriana”及び“Sophonisba”の二悲劇を作しき皆律語なり。此等は抒情詩として頗る見るに足る劇としては殆ど價值なし。同七十七年“Rival Queen”同七十八年“Michridates”を作す此等の作何れも其の作劇的技術の上達せる跡を示せり。一千六百八十一年

其の傑作『Lucius Junius Brutus』を物し次いで十一篇の悲劇を作せり(中二篇はドラマティックと合作)。かくて後俄かに發狂し同八十四年ペドラムに禁錮せられ數年に於て恢復し一千六百八十九年其の唯一の喜劇『The Princess of Cleve』を作し其の翌年最後の悲劇『巴理の虐殺』(『The Massacre of Paris』)を作しき。此の作の脱稿せしや病再び發し一夜保護者の宅を脱して市街を狂驅し一千六百九十二年齡三十七にして狂死を遂げき。當時ミルトンの詩風を傳承せしものはリ、一人ありしのみ後人其の詩體の豪放なるをたゞへて或はリリを小マアロウと稱す。同じく當時の作者たりしジョン、クラウンが生死の月日は詳かならぬと通例は一千六百四十年に生れ一千七百五年に歿しきと傳へたり。一千六百七十一年其の處女作『Julia』を作し同九十八年に『Caligula』を作してより陸續著作し著はす所十八篇に及べり、中に就きてチャールズ二世の命を受けて西班牙劇より翻譯せる『Sir Courtly Nice』は其の傑作と稱せらる。洒淡の滑稽の間に當時の習俗を諷刺してよく其の骨に達したり。彼れは有名なる運筆家にして此の作の如きも次ぎの朝即ちチャールズ二世の朝に至りてやうやく成りにき。

エルカナー、セトルはクラウンより八九年の年少なり。資性傲岸屢々ドライデンと爭論せりき。オクスフォードの人にしてホイッグ黨の一人なり。一千六百七十二年『Cambyses』を作し其の翌年激烈なる悲壯劇『モロッコの女帝』(『The Empress of Morocco』)を物してドライデン派を驚かしき。後十四篇の作あり。一千七百五年に歿しぬ。

中期の脚本家と其の作とにつきては今や畧叙し了りぬ所謂オレンヂ朝の脚本家即ちロングリーヴ、シッパル等の時代まで尙二十年の間隙あれば此に此の中期に跨りて脚本家の元首と做されしジョン、ドライデンが上を叙せん。

第十章　　ジョン、ドライデン

若しミルトンを以て復位期以前の文學即ちエリザ文學の精神を遺傳せしものとすればジョン、ドライデンは復位期以後の文學即ち反動的文學の鼻祖ともいふべし。彼れは實に英國十七世紀の後半に於ける最大の詩人にして當代の將星、リタリリー、ヂクテーター(文學的指揮者)なりき。又詩文を賣りて糊口するの道を開きたりし鼻祖なり。健筆彼れの如きは古今恐らくは多からざるべし。但しドラ

イデーン一流の著作は前代詩文人のと同じからずシエークスピア、スペンサル等天性の詩人は人間及び自然の諸現象を直覺してやがて之れを活寫せる趣あれどイデーン以下新代の詞客は概して先づ散文にて思想を綴りさて之れを翻譯して詩歌となせる趣あり。彼等は詩を作りし者といふべく詩を生みし者といふべからず此の故に内亂時代以後詩を作るの術は日に月に進みたれど眞の詩人的情熱は次第に衰ふる觀ありき。彼の十八世紀の詩宗アレクサンダル、ポーアの如きはドライデーン派の圓滿成熟を代表せるものなり。

デヨン、ドライデーンは千六百三十一年(シエークスピア死後十五年)ノオサンプトンシヨアなるアルド井ンクルに生まれき。其の父は該州の治安裁判官にして素封家なりき。一千六百五十年デヨン、ドライデーン、エストミンストル學校を経てトリニチー、コレヂに入學し同じく五十四年雅藝得業士の學位を得たり。父逝かりし後ロンドンに出で士爵ピッカリーの秘書官たりしが王政復舊の後はじめて獨立して文壇に上り脚本作者となりて糊口の道を求めんとせりされど彼れが處女作『The Wild Gallant』(喜劇)は悉く不評なりき。

一千六百六十七年ロンドンに悪疫流行し人皆之れを地方に避く此の際一篇の長詩を著す『Annus Mirabilis』『驚絶の年』の是れなり。爾後彼れは専ら梨園の爲めに作せり。一年三作、年俸三百磅なりき。さて一千六百七十年には桂冠詩宗となり兼ねて皇室附修史官に任ぜられ雙方にて年俸二百磅を得たり。當時ドライデーンが翻案せし劇の中に『The State of Ignorance』と題せるものありミルトンが『失樂園』を翻案してあまじき劇となせるなり。一千六百八十年までに彼れが作せし劇二十八篇其の多数は二句づゝに押韻せり是れ佛國傳來の時尚なりき其のうち最も大あたりなりし『Spanish Friar』(『西班牙僧』)は羅馬舊教徒を諷刺せしものなり按ふに時の政治問題を寓せしが故に時好にかなひしならんか。

一千六百八十一年以後彼れは専ら政治上の諷刺詩を作れり。有名なる『Absalom』 and 『Ahitophel』(『アンサロムとアヒトフン』)、『The Medal』(『賞牌』)若しくは『Absalom and Ahitophel』の後篇又は『Religio Laici』(『庶民の宗教』)等は總じて場當たりの作なり。

チャールス二世崩じ其の弟ジェームスの繼ぎしやイデーンは遽に羅馬舊教の信

者となりぬ或は王の寵用を得んとせしに外ならずといへれど其の實否は明ならず。千六百八十七年『The Hind and the Panther』といふ作を出だしぬ是は其の改宗に關する解嘲の詩なり。一千六百八十一年ジェームズ王位を失ひ所謂名譽革命の成りしやドライデンも亦其の官位俸給を褫奪せられ已むを得ず復た狂言作者となりぬ是れ其の齡六十歳に垂んとせし時なりき。一千六百九十三年ブルナルが大作を譯しはじむ是は彼れをして三年の時間と思想とを費やさしめしものなり。同九十七年譯了し出版して好評ありき。同年其の傑作の抒情詩『Alexander's Feast』(『歴山大王の盛宴』)を出だしぬこは一夜間の作なりきといふ六十六歳の頓作としては驚くべき者なり。同九十年『Fables Ancient and Modern translated into Verse from Ovid, Boccaccio, and Chaucer』(『オウィッドボッカチオチャウサルより韻語に譯したる古今物語集』)といふり。さて更にホーマルの二傑作を翻譯せんと企てつゝありし間に老病漸くあつしくなりて一千七百年五月一日遂に易箆しエストミンスタルの精舎に葬られき。

ドライデンは詩人といはんよりは寧ろ作詩家と稱すべきもの也彼れは職業として作し職業として讀書し職業として批判せりし趣あり。彼れは學問の該博なるを以て聞こえたりザルツル。オギド、ホレリス、ヂエナル、ヘルエシオスの類は常に彼れが口頭に在りき又コルチーユ、ラシーヌ、ブアロー、ラビン、ボースーなども常に彼れが愛讀せし所なりき。彼れば自國の古文學にも精通せりき就中劇壇の文學は其の得意とせる所なりし故或はシェイクスピアの短を擧げ或はチヨンソンの失を數へ更に一步を進めてはそが師表とせし佛の作家をすら褒貶し議論縱横傍ら入なきが若くなりき。然れども理論に秀でたる者必ずしも作に秀でざるの例なり。彼れは口を極めて其の摸範たる佛劇の短所をさへ罵れり彼れは佛劇のあまりに三同(three unities)に拘泥せしを笑ひ其のあまりに科介アクトに乏しく白キヤンの演説に似たるを誹れり。彼れはまたシェイクスピア、ブレンチヤル等の作の粗笨陋俗なるを誹れりしが流石に其の想像の豊富なると生氣の活動せるとを認め眞の詩歌たる點に於ては佛の諸劇に優れりとせり。批評家としての彼れの論は概して正鵠を誤らざりしに似たれど而も其の自ら作せしや彼れは此の雙方の短を棄て、獨り其の長をのみ合せんとせり彼れは無意識にして成れるシェイクスピアの妙を規則の

方によりて生み出たさんとせり。彼れはフレッチャル等の狂熱に倣ひて作しはじめ忽ちラジエ、コルチーニを顧みて其の高雅なる文致を學ばんとせり。多岐亡羊一をも獲ず二をも獲ざりしは其の必然の結果なり。蓋しシェークスピアの想像はラジエの理窟を以て嚮導すべきものにあらざり將た佛劇の窮屈なる韻語體をもて描き得べき者にあらざればなり。既に此の困難あり而して彼れは更に時流の好尚にも合はんことを願へり。當時の觀者は果たして如何なる觀者なりしぞ。彼等は殆ど美術の何ものたるを知らず又風流の真味を知らざる猥雜卑陋なる民衆なりしなり。彼れが作の其の論に伴はざりしは蓋し已むを得ざる所ならん。

彼れが所謂佛劇的高雅は單に措辭上結構上に止まれり。げにや白シヤの中に哲學的警句も見え高尚なる文句もあれど皆皮相上の高雅たるに止まれり。フライデンが劇中の人物は其の言ふ所と行ふ所と相表裏するもの比々是れなり。彼等はその言ふ所は佛の風流紳士の如く、その行ふ所はサクソン上代の未開人の如し否チヤールス二世期の最も墮落せる士人を代表せり。さればフライデンの『テンベス

ト』を翻案し『失樂園』を劇とせしやイヴもミランダも宛然一娼婦となり了んぬ。要するに彼れは批判の眼識の乏しからざりしにも似す想像と創意イマジネーションとは甚だ乏しく加ふるに崇高なるものを描くの才、悲哀の情致を寫すの才、虚靈の境に遊ぶの力などは其の最も貧なりし所なり。但し公平に彼れを評すれば彼れは才餘ありて賊足らざりし也。彼れ若し誠意誠心偏に詩文の爲に全力を傾けたりしならば其の後世に傳ふる所の作或は現に存するものに止まらざりしならん彼れの如きは世間に執着する心深きが爲に偶、詩人たるの才分を害ひたりしものといふべし。彼れは曾て全力を傾けて作せしとなし否彼れは唯一時の爲に一時の筆を揮ひしのみ是れ其の作に不易の大文字なき所以か。彼れは其の『アレクサンドルス、フィスト』に於て其の明證を與へたる如く抒情詩人としては頗る敬服すべき技倆を有せり而も其の世間に執着するの心は強ひて彼れを驅りて劇壇の作者たらしめたり。彼れの批判の眼識に富めりしや明に自家の才の此の方面に適せざるを意識せしに似たり其の悲劇喜劇前後數十篇一として其の傑作と稱せらるる“Maiden Queen”たに才の之れに適せざるを示さざるなし。“Rival Ladies”や“Indian”や“Emperor”

a "Tyrannic Loves" & "All For Love" 『アムトニーとクレオパトラ』の翻案)や "Don Sebastian" や、たゞ其の興行の當時には滿朝野の俗衆を悦ばしめきとも其の悲哀の眞の悲哀にあらざる其の人物の眞の人間に類せずして孰れも捏造に屬することは詩眼ある者の看破し得る所也。ドライデンもシエークスピア的情熱の到底模倣し難きを意識せりきされは彼れは専ら力を竭して脚色を奇にし臺辭を洗鍊し至情に訴ふる能はざる代りに屢、聽衆の耳目に訴へ若しくは修辭上の價值に依りて劇詩たるの缺點を補はんとせり彼れが其の初め流麗壯大なる韻語を以て綴りしがときも一面より見れば此の弱點を蔽ふの方便なるに外ならざりし也。さもはれ當時の悲壯劇は總じて佛劇に倣ひたる所謂理想的戯曲なりしかば斯かる作家の缺點も單に其の作る所の悲壯劇をして超人間的に高尚ならしむるか若しくは熱血なく情火なき者とならしむるに止まりしが其の同じ缺點の他の寫實的喜劇に現はれしや其の弊いふべからざるものありき。何となれば作者に於ける詩的情熱の缺乏は凡て其の描く所をして卑しき實感を喚ぶものならしめ艱難野卑に陥りたれば也。殊にドライデンの滑稽の才に乏しきや好笑は轉じて

醜穢となり滑稽は化して猥褻となれり彼のシェークスピア近松等の屢、猥褻なる句をものしながら其の輕妙なる滑稽と其の洒脫なる筆致とによりてさながらに之れを淨化し唯讀者をして笑はしめ曾て實感を起こさしめざるは異なれり。所詮ドライデンは名利の爲に詩人たるの才分を毀損せしものといふべし。彼れの本領は『アレキサンデルス、フィースト』の如き抒情詩に在り而してこは彼れの最も力を盡くさざりし所なりし也。豈憾むべきにあらずや。然れども彼れは一世の文豪なり彼れは幾ど何れの方面に向かひても常人よりは秀でたり。たゞは彼れの散文の如き亦頗る玩讀するに足る其の韻語の劇に適する所以を論じたる "Essays on Dramatic Poetry" の如き其の諷刺を論じたる『ヂュモナル』論の如き處くとも當時に於ては空前の審美的論文單に文章としても愛誦するの値價あり。

第十一章 オレンジ派

十七世紀の終末即ち王政復古より三十年後に由でし脚本作家を總稱してオレンジ朝の作家といふ。其の中の尤なるものをコングリーヴ、シッパ、ヴァンブール、ファルカルド、す何れも喜劇の作家なり。彼等風紀を正す底の高尚なる技術なしと

雖も其の詞句の形式は前代のに比して一進歩をなし前の喜劇家に普通なりし野卑醜陋の失は彼等の作に至りてやゝ減ぜり。

非リアム、コンクリーズ(一六七〇—一七二九)は十七世紀後半の劇壇に於て牛耳を執りし作家なり。佛のマルテールの如きは彼れを激賞して「喜劇の光榮を加へしことば彼れの方なり」といひきこむ。而して此の激賞は幾分か其の實なきにあらざ。もとより喜劇にしてコンクリーズが作に優るものはあまたあるべく當時の風俗を直寫したる點よりいふもコンクリーズの譲らざる作は多からんが尙彼れの如く華麗に裝飾せられたるは稀れなるべし。實に彼れが長所は華美流麗の詞句と當意即妙の滑稽とにあり特に後者の如きは佛のモリエールに及ぶ能はざるものありと稱せらる。彼れの最も力を盡くしは對話の圓轉なり科介動作の如きは彼れの深く問ふ所にあらざりき。さて其の人物の性格の如きも頗る明かに區別せるもあれど動もすれば始めより之れを嘲弄し殊更に狂態を演ぜしむるが如き弊ありしかば彼の非ッチェリー、シヤドメル等のに比して詞致優雅なりしにも拘らず其の着想の猥陋なることは却りて彼れに過ぎたり。

コンクリーズは劇壇にありしと僅かに六年なりき。彼れは二十一歳にして始めて『老獨身者』(Old Bachelor)といふるものしき(一六九三出版)こは非ッチェリーを學びて成功せしものなり。此の作大にもてはやされしかば同九十四年又『The Double Dealer』を作しぬ。時人の玩賞は前作に劣りしが批評家は痛く贊美し就中ドライデンの如きはシェイクスピアにすら比せんとせり。かゝる激賞はコンクリーズのもとより當たり得ざる所なれど彼れが才華の亂發してモリエールと光彩を争ひし當時に於いてはかゝる溢美の贊評も或は失當と思はれざりしならん。さて翌九十五年に至り傑作『戀故の戀』(Love for Love)を作せり例の絢爛目を奪ふ底の風俗喜劇なり。翌々年又『The Mourning Bride』を作れり悽愴たる悲劇なり佛の悲劇家クレピロンに摸してかくまでの成功を得たるはオレンツ作家中たゞ一のコンクリーズあるのみ。一千七百年喜劇『The Way of the World』を作し後ち復た筆を執らず。此の作も前の諸作に此して甚き遜色無かりしが其の滑稽あまりにみだりかはしく且つ皮肉なりしが爲め時人の斥くる所となり猥雜といふ非難の中に埋葬せられたるぬ。

ジョージ・ザンブール(一六六七年十二月に生れ)は快活なる作家にしてコンクリーヴが名聲の地に落ちしころに出でしかば聊かの功によりて忽ち好地位を得たり。其の業とする所もと建築術にありしが故にや其の喜劇の構思のつから堅實なりき。華美豪快なる詞句を駢ぶることは到底コンクリーヴに及ぶべからざるを曉り彼れは専ら其の力を趣向脚色に傾け綿密の構思を以て詞藻の下足を補ひたりき。按ふにザンブールは嚴に評せば詩人と稱すべきものにはあらずむしる縝密の用意によりて巧みに劇を構成せしものといふべし而も其の社會と人物とに對する洞察銳利なりしかば時には或社會の狀態をさながらに活現し得たるものもなきにあらず。『The Relapse』及び『The Provoked Wife』は彼れが始めて物したる作にして頗る成功の名あり。一生中にもせし作十篇何れも單調の喜劇なり。但し其の中の一なる『The Confederacy』(一七〇五)は彼れが第一の傑作と稱せらる。彼れは後ち帝室の技師となりて劇壇を去り士爵の位階を賜はりて一七二〇六年に歿しき。

コルリト・ジッパは十八世紀の終末に出でし作家にして其の作は半ば十八世紀に

跨れり。ファンマルクの彫刻師の子にして幼より劇場に入り一六八九年俳優となり七八年の後喜劇『Love's Last Shift』を作して頗る名あり。翌年『Woman's Wit』を作しぬこは拙き作なれども世評は前の作に優れりき。『Love Makes a Man』と同年(一七〇五年)に作せし『Careless Husband』とは其の傑作なり。爾後作する所殆ど三十篇。落想輕妙筆また老鍊なりしかば俗受けは當時彼れに及ぶものなかりき。(一六七一—一七五七)

さて當期の最後に出でし作家をジョルジュ・ファルカルとなす。エリザ朝の初めマアリウが劇詩に於て初めて見はれし光彩陸離たる劇詩の光炎はこゝにファルカルが最後の火花となりて其の影を滅しぬ。ファルカルは一六六七年八月愛蘭土なる名族の家に生れき。父は牧師なり。幼にして神學校に入りしが後ちダブリンの劇場に入りて俳優となりぬ。嘗てドライデンが作の『印度王』を演ぜし折佩刀を取り替ふることを忘れて場に上り誤りて同僚を傷け大に悔いやがて劇場を退き遂に軍隊に入りて艦長となりぬ。一六九七年ロンドンに來りて始めて喜劇『Love and a Battle』を作しぬ。軍隊生活の可笑味を輕妙に寫しだして頗る時

人の喝采を博しき。次は「The Constant Couple」(一七〇〇)また歓迎せられき。彼れ資性温雅容貌端麗なりしかば女性間の評判いど高かりしが遂に一少女の爲に身を誤りて窮境に陥りぬ。彼れが最後の傑作「The Recruiting Officer」(一七〇六)及び「The Beaux' Stratagem」(一七〇七)はこの間に成りぬ後者は臨終の病牀にて筆を執りきとす。一千七百七年歿しき齡僅かに三十。

一千七百二年出にだし、文集「Love and Business」の中に彼れ自ら語りて曰く「今の所謂喜劇は教誨或は懲罰の旨を知らせんとて巧みに綴りたる物語たるに過ぎず」とこの言或は以てオレンゾ派の戯曲全体を蔽ふに足らんか。ゴッス曰はく

王政復古終末の卑調無味なる劇詩中吾人がやゝ心を慰するを得べきものはフルカルが戯曲中の快活なる世界なり赤袍白袴の一群が笑劇の聲に打ち雑りて鐘々々々の軍樂を奏して進む様は頗る吾人が懶眠を破るに足る。

フルカルが作のかく重んぜらるゝを見ても十七世紀戯曲の眞價は多く論せずして足りぬべし。

第十二章 内亂時代補遺 (散文學)

内亂時代には政治宗教の軋機甚しきが爲め總じて學問研究の衰へたりしとは殆

ど謂ふを要せざるべし。斯かる動亂の間にも其の専門の科學に忠實なりしやかはさすがに其の素志を挫かずして密に同志相會し各研鑽する所ありき。王政復舊の後に至り此等私會を基礎として所謂ロイヤルソサイエチー(學士會院)組織せられたり。こは一千六百六十二年の事なり。此れより天文学、實驗化學、醫學、植物學、動物學、植物學、植物生理學等各一科の學として修めらるゝこととなりぬ。一千六百七十一年にはアイザック・ニュートン「Theory of Light」(光の理)を著して學士會院に呈出し同八十七年には其の「プリンシピア」を脱稿して始めて引力の理を公にせり。併しながら當時の散文壇に於て最も著かりしものは時勢の然らしむる所神學的論文及び政治的論文なりしこと勿論なり。哲學及び教育に關するものはミルトン、ホッパス以後ひとりジョン・ロックあるのみロック十七世紀の末に於ける最大の哲學者にして其の明透暢達の女はた時の散文壇を飾るに堪へたり。

英國の新聞紙はジェームス一世の朝に起これり。或はいふ一千五百五十八年「English Mercurie」と稱する新聞紙發兌せられアルマダ事件の詳細を録したりと。此の古新聞紙三葉大英博物館に保存せられ一千八百三十九年迄は之れを最初の新聞紙とす。

聞紙なりと信じたり。然るにトマス、ワッツといふ學者或はいふ博文館長某と其の偽作なるを證明せし以來はチェームス一世の期を以て英國新聞紙の生誕期と定むるに至れり。當時の新聞紙といふものは今日のと異なりて我が雜誌に似たる小冊子なり且多く外國の珍聞を録したるものにて其の最も古きは“News out of Holland”と云ひ、他は“News from Italy”、“News from Hungary”など題せり。一千六百二十二年三十年亂の評判喧しき頃始めて毎週發兌の新紙出でたり。記者はナサニエル、ハッターといふ者にて補助者若干ありき。されど其の頃の新聞紙は概して日誌やうのものにて我が『太政官日誌』など、伯仲の間なりしが如し。按ふに新聞紙及び雜誌の次第に發達するに至りしは十八世紀以後の事なり。圖書館の盛になりしもチェームス一世の朝なり。今日大英博物館内にある圖書館はそのころ士爵ロベルト、コツトンの設置せしところ、又同じころ士爵トマス、ポドレーといふ者オクスフォード大學内にポドレー圖書館を設けたり。これを圖書館發達の起源とす。

第四篇 十八世紀の文學

第一章 概評

内亂時代以後十九世紀以前の英國文學を緯名して或は英國アウガスタス時代の文學と謂ふ。夫の羅甸文學のアウガスタス時代にはゲルツル、ホルレイ、ス、わりの他幾多の詩人吟客星の如く輝きしと同時に上に詩眼ある君主アウガスタスの戀に詩文人を保護獎勵するありしかば一代の文華燦然として古今に馳れり。所謂英のアウガスタス時代に至りては其の趣彼れと異なり當代の國君アーン女皇は孱弱平庸なる一老女にして風流の鑑識殆ど空しく社會はた高尚なる詩眼を缺けりしなりされば文學の爲に文學を愛重し美術の爲に美術を獎勵するの風は蕩然たりき。さもわれ且く内質の月旦を後にして詩文人の數著作の量よりいへば十八世紀の英國文壇は決して昌盛ならざりきといふべからず。例へば詩壇にばアレキサンデル、ポープ出で、一世を風靡しゴルドスミス、グレイ、バルンストム、コン、コリンズ、ヤング等競ひ起こり散文界には博士ゴモンズ、其の學識見によがて騷壇の粉權を握り、アチンソン、ス、フット、スチール等は諷刺の筆を揮ひ、アフォ

等は歴史家として、バルク、シムズ等は政治界の文士として、その令名を史
 上に止めき。その他クラク、メグ等は文壇の窮才子に至りては殆ど枚擧す
 るに遑あらざる也。かく文客の輩出せしは文學の漸く職業視せらるゝに至りし
 自然の結果にして十八世紀の瑕瑾得失はた此の點に存するなり。當時は印刷術
 著く進歩したりしかば新聞紙雜誌類は此等小文人の爲に紙面を割與し其の述作
 の屑々たるものに屢々世に紹介せられき。さもあれ彼等の貧賤なる權門に拜
 趨して其の庇護を受くる手藝を有せず加ふるに其の才多くは謏劣清新の作を著
 すの才なし故に漫りに古書を取りて之れが註釋をなし若しくは粗笨杜撰なる譯
 譯に従事し或は書狀の代筆看板書きなど種々の筆耕の業に従ひ些少の潤筆料を
 得て辛うじて其の口を糊し稀に多く金錢を得れば直に馳せて酒樓に上りシヤン
 パン酒、ク、酒に酔ひ意氣傲然分外の榮華をほしめしにすること數日忽
 然として囊底空乏を告ぐるに至ればすなはち四層樓上の假寓に蟄居し惘々然と
 して曩日の豪遊を夢み日暮るれば散衣破帽惘然として街巷を徜徉し道行く車上

の富者を羨み料理店の前に立ちては佳香に垂涎し珍味の口に入らざるを歎じ二
 三錢を懐に探り得て茶亭の一隅に咖啡を啜り僅に一時の口腹を慰む。比々此の
 類ならざるは稀なりき。前日の得意後日の失意實に霄壤の差ありしなり此の輩
 の塵懷いかでか高雅崇嚴の妙想を藏め得べき。彼等は概して名聞に輾轉するの
 徒文界の寄生蟲といふべかり也。要するに當代の文人がかかる墮落の極端に
 陥つは其の氣概なく常操なかりしに職由すといへども一は亦た時勢の然らし
 めし所なり。蓋し千六百八十八年の革命後社會の狀態を見るに紀綱紊亂して法
 令行はれず賞罰當を失じ上流社會は益々腐敗を極め下等社會はた陋雜と殘暴と
 に沈淪せり。時の宰相だに例へばナルボールの如きは卑劣なる籠絡手段をめぐ
 らして議員を操縦し以て治國の能事畢るとせりき勢ひかくの如くなりしかば
 總じて政治家は苞苴を喜び愛國の念なき節義なく宗教家を以て任ずる者も多く
 は人倫の大義を餘所にし縱に醜行をなして愧ぢざりき。政教の壞亂斯くの如く
 なりしかば口に筆に腕に政治上の鬭争不斷に行はれ時歌文章はた其の一器具た
 るに過ぎざらんとせり。堂々たる文壇の名家すらも概して此の風潮に捲かれて

或は保守黨に屬し或は改進黨に屬し時としては單に政黨の爲に詩文を作れり。彼のスウィフトの『ガリヴァル巡島記』アヂソンの『〇〇〇』の如きだに一方よりいへば政治上の寓意あるが故に陽采を博せし也。當時嘲世諷俗の文の流行せしは偶以て當代の腐敗を證するに足る何となれば諷世嘲俗の文字を讀みて毫も發憤せざる社會は自家を嘲けられて平然たる社會即ち虚偽に慣れて之れを怪しまざる厚顏の社會なればなり。當代は又個人を主とし人身攻撃を旨とせし時代なり又俱樂部集會類の全盛期なり。而して此等の黨與は協力して奎運の進歩を圖りしにはあらで皆互に偏執して區々たる小名譽を相争ひしに外ならず彼の無要なる古今文學優劣論の一時文壇を騒がせしが如き閑文壇の痴態を表章するに足れりといふべし。されば學者が理を研究すといふも眞理其の者の爲に理を攻究せしに非ず詩文人が詩文を作すといふも文學其の者の爲に著作に熱中せしに非ず宗教家の如きすら天道又は聖教の爲にせずして私利私黨の爲にせし者比々是也。酷評すれば十八世紀は憎怨嘲嘆輕蔑の盛に行はれし時代也。此の故に當代の詩文人は動もすれば他の缺點短所のみを評きて其の美を看過し警句をもて他を嘲罵するをのみ得意とせん。要するに十八世紀は自自主我の時代也自家を獨り尊しとし當代を獨り尊しとせし時代也。越くとも眞摯幽玄なる詩歌の乏しかりし時代なりき就中其の初期に輩出せし詩人はおしなべて韻辭家即ち修辭家也眞に詩の神髓を解し詩人の天職を意識せしものは殆ど稀なり。十八世紀は又名けて擬古文學の時代といふ蓋し佛蘭西を経て入り來たれる古文學の法則が當代の才能を拘束して瑣屑なる修辭の技に専心せしめたりされば詞句の精鍊は前古に比なく抒情の詩景物の文筆は徹に入り細を穿ちたれども創新の氣は甚だ貧なり。試にボロフが詩の一篇を取りて誦すれば調格優雅を極め水晶盤上に珠玉を轉ずるが如き概ありて鏘鏘たる餘響の耳朶に残るを覺ゆれど更に深く翫味すれば思想の淺薄と感情の浮泛とは遂に之れを蔽ふべからず。一代の詩宗已に此くの如し他はまた謂ふに足らず彼等の多數は感得する所ありしが散に作せしにはあらず作せんが爲に工風せし也。但し當代の後半に至りてバルヌストムソン、ゴリンス等輩出自然主義の作に思を凝らし心を山川の美に傾けたりしがそれは猶萌芽たるに止まり眞の自然なる詩は十九世紀のシャルズ、コー

るをのみ得意とせん。要するに十八世紀は自自主我の時代也自家を獨り尊しとし當代を獨り尊しとせし時代也。越くとも眞摯幽玄なる詩歌の乏しかりし時代なりき就中其の初期に輩出せし詩人はおしなべて韻辭家即ち修辭家也眞に詩の神髓を解し詩人の天職を意識せしものは殆ど稀なり。十八世紀は又名けて擬古文學の時代といふ蓋し佛蘭西を経て入り來たれる古文學の法則が當代の才能を拘束して瑣屑なる修辭の技に専心せしめたりされば詞句の精鍊は前古に比なく抒情の詩景物の文筆は徹に入り細を穿ちたれども創新の氣は甚だ貧なり。試にボロフが詩の一篇を取りて誦すれば調格優雅を極め水晶盤上に珠玉を轉ずるが如き概ありて鏘鏘たる餘響の耳朶に残るを覺ゆれど更に深く翫味すれば思想の淺薄と感情の浮泛とは遂に之れを蔽ふべからず。一代の詩宗已に此くの如し他はまた謂ふに足らず彼等の多數は感得する所ありしが散に作せしにはあらず作せんが爲に工風せし也。但し當代の後半に至りてバルヌストムソン、ゴリンス等輩出自然主義の作に思を凝らし心を山川の美に傾けたりしがそれは猶萌芽たるに止まり眞の自然なる詩は十九世紀のシャルズ、コー

ルリツヂ等を俟ちて完成せられし也。然るに十八世紀の文學は散文及び華文に大なる功を成せり殊に小説と歴史との發達は歐洲大陸の文學に掛からざる影響を及ぼせり。デフォー出で英國寫實小説の曙光輝きツチヤイロソン出で所謂心理小説の胎子成りぬ。其の初め西班牙に行はれし冒險譚を換骨してフイールツシタスモイレト等の爲に新小説の途を開きし者は佛の作家レザエズ(Le Sage)なれば佛は英の祖たりきともいふべし而も佛の批評家等は公平に英國小説を歓迎し其の出藍の功を稱せり。此頃歴史的文學も亦著く進歩せり佛伊兩國人は從來傳記史論の述作に名ありしが歴史の自分の實現せられしはヒウム、ギボンによりてなり。ヒウムの『英國史』ギボンの『羅馬衰亡史』田で、後歐洲の修史事業は面目を一新せりといふを得べし。其の他哲學科學の實用を旨とする論文は實質明細後世の模範たり。由來英國人は實際的の道徳を重んずされば十八世紀の腐敗せる社會の底にも此の清泉は貫流せり。彼等は佛人の如く快活なる談話交際を好まずして兎角に幽寂の生活を悦び沈思默想に耽らんとする傾きありされば妄に人生を樂觀せず自ら

内に省みて道徳を奉じ正義に違はざらんとを是れ力む又容易く外界の誘惑に動かされずして頗る進取の氣象に富む。斯くの如きは英人の生活に通徹せる根本性質にして英國の文明を形成進歩せしむるに與りて大に力ありしもの也。又こは英人をして新教徒たらしめし所以なり蓋し新教の目的も其の結果もは道徳の訓練に外ならざれば也。而して英國人の病所またこゝに在り彼等は嚴格に失し沈鬱に失する也。されど此謹嚴沈痛は或種の文學に宿りては大に其の効力を現じたり。當時の説教者ペーロウ、チロトソン、サウス、バルチット、ベックスタル等の説教文を見るに其の徒に分析説明にのみ拘泥して毫も生氣なきは失なれども又其の引用句のみ多くして熱なく趣味なく機才なく哲理なくは斬新なる觀念なきは弊なれども而も其の唯一の長所は茲に在り。蓋し彼等の希望は能辯家又は文章家たるの名を得んが爲にあらざ偏に民衆をして信仰せしめんとするにありし也故を以て聽者とのづから感奮し其の説教の明晰眞率なるを喜び深く其の教訓の實行せられざるべからざるを確信せり教化の功徳少ならずりし所以なり。且や英人は居常の徳行を重んずると共に自由の精神に富めり權利と正義との爲

には努力財産は言ふに及ばず死をも避けざるに至る。此の感情はチニリス二世をして位を通れしめ一千六百八十九年の布告の原動力となり又宗教上に流入しては信仰自由の説をして大に行はれしむるに至れるなり。かく自由思想の發達し科學技術の進歩するにつれて出版の自由は文運の興隆を促し新聞雜誌の刊行盛になり小説の端緒を開き一方にはニウトンプ、アダムスミス、シヤソウベリ等名家出で哲學科學の新説に關する著作抄からざりき。要するに當世紀は散文學全盛の時代也。

第二章 アジソンとス非スト

此の散文學全盛の壇上に諷刺家として評論家として鋒の譽ありし者をス非スト及びス非ストとす。博學多才にして文を行ふに自在なる人々を啓發感動するに妙を得たるは常に黨派心を脱する能はざるは二者とも其の傾を同じす。唯其の閱歴と性癖とに至りては古來此の如く相反する者はいと稀也。ス非ストは常世の寵兒にしてス非ストは當代の憎まれ兒なり前者は多幸後者は薄命前者は温厚後者は酷薄前者は人間を愛憐し後者は人間を憎怨し前者は優雅後者は粗

朴前者は其の最も美なる時には君子の如く後者は其の最も醜なる時には怒れる夜叉の如し。ス非ストは一千六百七十二年五月二日井ルトヤアに生まれき。牧師の子なり。幼にして其の友ス非ストと共にチヤイアスに學業を受け十五歳にしてオズネフオナなるグリンネゴレツチに入らに及び夙に羅旬語もて韻語を綴りて詩名ありき。卒業の後幾はくもなく國王の徳を頌する詩を作し其の賞として一年三百磅の年俸を得たり。がてまた大陸漫遊の旅費を賜はりぬ。其の嫺雅なる本性と圓美なる文才とは歐洲に於ける最も文華なる國伊太利佛蘭西の歴遊によりて更に圓美の致を加へき。蓋しス非ストが文章の優美嫺雅は主として其の本性の温雅なりしに由るなり。爲人寡黙恭謙何事につけても他と争ふことを好まざりきされば政治論者としては改進自由の主義に熱中したりしにも拘らず曾て其の反對黨をたに痛撃せしことなくあらゆる黨派に憎まれず改進黨派大敗の秋にすら衆議院議員に選舉せられし程なれば改進黨全盛の際には果進んで國務尙書の高官にまで經上りぬ。是れ皆彼れが天成の愛嬌と高雅温順なる

資質との致す所なりき。一千七百九十九年「ケイトラル」を發刊するヤアチソン寄書家として之れを助け一千七百十一年「スベクテートル」の代りて出でしや引續きて其の紙上に執筆せし程に成功せり。一千七百十九年にケンシントンにて逝りぬ。アチソンは博學多才なりしのみならず廣く人情に通じ世故に老いたり。彼れは人を娛樂せしむると同時に人を啓發獎戒せり現に其の傑作「スベクテートル」の如きは大不列顛領外へ醜徳と無識とを驅逐するを主意として發兌せし雜誌なり。アチソンの論文は一として修身齊家の訓言ならざるはなく温和なる嘲世諷俗の文字ならざるはなし。彼れは野を惜み雅を愛し慾を退け義務を獎勵せり。然れども彼れの哲理は要するに悉皆世間的にして曾て實際を離るゝ能はざりきされば其の宗教思想の如きも俗習を脱する能はずして屢々未來を語るも曾て現世の不幸を忘れざるなり要するに未來を餌として現世の善行を獎勝せんと力めたりしが如し。彼れは曰はく今世に於ける人の務は知るにあらざして行ふに在りと

其の實踐躬行を旨としたる如何に儒學の旨に似たるかを見るへし。テロソンは此の點よりアチソンの思想の高からざるを誹れども雜誌記者としては蓋し己むを得ざりし所ならん。テロソンは謂ふ「アチソンの修身論は道義といふことをして一種の流行とならしめたりき是れ瑣事にあらず」と其の通俗の諷戒の當代に尠少ならざる効力ありし事を稱するなり。アチソンの文章は優美の極平淡となり平淡の極生氣の缺乏を致せりかるがゆゑに往々にして平板枯淡の弊なき能はず。テロソンは評していふ「彼れは説話者なり目撃者にあらず」とまことにアチソンは説話體の達人なり彼れは喜怒哀樂せずして人間百般の出來事を語り得たり。テロソンはまた謂ふ「アチソン等古文學者に飾らぬ眞理と力ある創意とを重んぜずして偏に麗しき排置と善美なる秩序とを愛す」と思ふに此の評は動かすべからず。アチソンは其の作(就中詩)に於ても其の論評に於ても専ら規律を重んじたり。テロソンは最後に「ソルロヂヤルデカブリ」を評して「野史とも見なすべき傑作なり」とし又「マルザの夢」を評して克くアチソンの特質を現じ盡くしたるものといへり。要するにアチソンは専ら散文の名家として推重すべき作家なり彼れは韻語を能く

せざりしにあらざれば彼の燃ゆるが如しといふ抒情詩人的情熱無し。上は其
 が詩人としての聲譽を博せし處女作『The Campaign』(マン・カミの戦を歌へるも
 の)より下は其の得意の樂劇『ロザモンド』の悲劇『は勿論カトリ』及び其の寓意の華文
 の傑作『Vision of Mirza』に至るまで一として大學派的象技巧的アルキメデスならざるなし是れ彼
 れが賞鑑の標準の高上ならず且つ創新ならざりしに因れば一は擬古の時尙の
 影響なり。彼れはドライデンをこなき詩人の如く激賞せり而して彼れの尤も
 歎美せしはドライデンが翻譯の技倆なりしが如しさればシキリクセアの眞枝
 倆の如きはアチンソンの批判眼の嘗て眞成に觀破し得ざりし所なりとほほし。ア
 チンソンの長所は己に前にいへるが如く而して其の鑑識はかくの如し故に尤も彼
 れに於いて服すべき所は其の觀察の穩健にして精細なること其の措辭行文の
 巧妙嫺雅なること、にあるを蓋し其の觀察は彼の谷十郎の如く抽象なら
 ず隨うて其の文章もペーコンの如く雅に失せずすなはち觀察はすべて具象的に
 して鑿々據る所あり語はすべて雅馴にして而も俗に通じ易し是れアチンソンの特
 質にしてまた十八世紀文學の特質なり。

アチンソンが著述のうち其の名作なるが爲に若しくは其の傑作なるが爲に擧ぐと
 も一讀過すべき價值ある者はほゞ下の如し。韻語の詩人としてアチンソンを看る
 べき料は(第一)其の二十二歳の作『ドライデンに寄するの歌』(これはドライデンを激賞
 せる韻語の評論とも評すべし。(第二)伊のナルソルが作『Fourth Georgic』の一分の翻
 譯。(第三)伊國滞在中にハリファクス卿の許へ送りし韻語の書狀。(第四)前に擧げた
 る『カムベイン』といふマールボロウ將軍の大戦勝を讚美せる歌。(第五)『ロザモンド』
 といふ伊太利風の樂劇。(第六)『カトリ』と題したる古代劇風の悲劇。さてまた散
 文家批評家としての彼れが技倆を窮ふべき著述は一千七百〇九年にステールを
 幫けて執筆せし『タトラル』といへる雜誌及び同十一年に専ら主となりて發行せ
 し『スベクテートル』(これは英國通俗雜誌の開祖の一に列すべきものにて毎朝の發兌
 六百三十五號まで續きたり。其の主意は前にもいへるが該誌に載せたるアチン
 ソンが文章は眞に種々雑多にて堂々たる長論文もあればをかしき滑稽の諷刺文も
 あり考證に類する文章もあれば端物小説に似たる物語もあり輕妙なる寓意諷刺も
 あれば洒々落々たる論文もあり。假に種々の人物を作りて眞に實在せる人の如

くに状寫し殆ど寫實小説を讀むが如く思はしむる文もあれば嚴肅なる倫理を談じてそらろに讀者をして襟を正さしむる文もあり。さて此の千變万化の論文、諷刺文、比喩談、戯文等いづれもとりくに面白きなかに取りわけて玩味すべきはソル、ロージヤル、デカソリに關する諸篇、マルザの夢と題したる或意談、ミルトンを評論して『失樂園』に及べる長篇、英文評釋に訓釋せる數篇、頓智滑稽を論じたる諸篇などなるべし。尙アデソソンの詳傳は一千八百四十三年にルシイニキン (Aikin) が著したるを最とす A Life of Addison と題したるものは是れなり彼のマコーレーが有名なる『アデソソ論』を物せしは該書を評してなり。又近時の編集に係るもの、却からず詳なるを知らんと欲する者は此等に就きて此の作家の長短を考究すべし。

アデソソンの散文家としての盛名は最近年に至るまでも英米の文壇に轟き隨うて『スペクテイトル』の功績は殆ど悉くアデソソン一個人の功績の如く見做され其の信友たり同輩たりレン、ル、リ、チャ、ード、スチール、の文名は爲に蝕盡せられたる觀ありしが近年に至りて批評權に種々の反動起りしと共にスチールの文名大に揚が

り今の批評家中間々アデソソンを抑へてスチールを揚げ前者の筆は洗鍊なるも彫琢に過ぎて巧に失したる跡ありスチールの文の瑕疵あるも眞摯爛漫、天真を粧はざるに如かずと評する者あり。げにやアデソソンは雅健なれども自然の洒脱は或はスチールに一步を譲るべく而して其の勁拔と創新とに至りては遠く左に居るス、非フトの下にあるべし。いでや轉じてス、非フトの面影を窺はん。

當代の最も驚くべき人物として又た最も創才ある文豪として雷名を後世に傳へたるデ、ヨ、ナ、サ、ン、ス、非フトは一千六百六十七年に生まれて一千七百四十五年にみまかりぬ。或は愛蘭土の大愛國家など稱らるれど血統上よりいへば同國の首府ダブリンにて生れたりし一事の外は愛蘭土に何の縁故もなく父母共に英人なりき。不幸にして出生以前に父を失ひ生まれて幾ばくもなく母に離れ叔父某の手に養はれや、長じてダブリンなるトリニチー^{コレツ}大學に入りしが數學の成績あしかりしため四年修學して、パチエロールたる能はず、更に三年の學を修めて辛く假得業生たるの許可を得たりき。一千六百八十八年其の叔父を失ひ母かたの縁者にして時の政治上に勢力ありしソル、非リアム、テムブルが邸に寄食せり。ス、非フトの

功名心は其のころ専らに教會の榮職に向へり即ち心竊に大僧正の地位を得んとを望めりき。已にして其の主人テムブルと善からず乃ち去りて愛蘭土に赴きコンノルの牧師職に在りしが不如意漸く加はりて衣食に窮するに至りしかば止むことを得ず耻を忍びて英國に歸り來り罪を謝して更にテムブルが邸に寄食せしが自尊傲慢の心と燃ゆるが如き功名心とは益々平なる能はざりき。さる程にテムブルの病逝世しやスヰフトは其の遺産の分與を得て幾分か生計上に便益を得たりしのみか判官ベルクレー卿の侍僧となりて愛蘭土に赴き邸地及び莊園を給せられ其の名また漸く世に知らるゝに至りぬ。一千七百〇一年ドクトルの學位を得たり是より後政治界の論文家として公生涯に現れ種々の政治論及び諷刺の著作ありき後者の著名なるものは“Tale of a Tub” & “Battle of the Books,” となり但し此の二者共に匿名にて出版せしものなり。

スヰフトが憎人主義は夙に其の幼時に端を發し其の寄食時代に發達し其の失望と不遇とによりて増長し遂に甚しき狂暴と残忍とに流れたりしがはじめて政治論壇に現はれしころは比較的にいへば彼れが一生の得意時代にして才思想像は

沸くが如く識見はた方に成熟せる時なりしかば彼れの本性を窺ふべき作は却りて此の頃の著述にあるべし。たとへ其の偉大なる特質は當時の諸著に於ては見るべからずとするも其のさすがに本來の悪魔にあらざして一面愛すべき品性を具へたりし證は此の第一期の作にこそ徴すべけれ。

『桶物語』はスヰフトが傑作の一なり、其の老後にみづから此の著を評して曰はく“Good God, what a genius I had when I wrote that book!” (嗚呼我れ何等の秀才なりしぞ彼の書を物せしころには)と。評し得て的當なりといふべし。まことに是れスヰフトが才氣の旺盛せりし時の作なれば讀む者其の落想の斬新なると其の筆致の輕妙なると其の諷刺の深刻なるとに感歎して一たび緇く時は卷を措く能はずして轉々其の短簡なるを惜む。此の書は種々に分段せられて説話間々岐路に入りり故にこは物語と名くべきよりもむしろ一種の論文と名くべきものなれども本來諷刺を主腦として作りたる寓意譚なるゆゑ『桶物語』とは名けたり、當時水夫の間に鯨魚を避くる爲に桶を投ずるのならはしありしに因めるなり。按ふに桶はすなはち此の論文を指し鯨は暗に當代に彌漫せりし宗教上の懷疑主義を指せるな

り而して時の英國正教會を代表するものは本船なり。蓋しスヰフトは此の小桶を正教會の爲に投じよりて以て其の歡心を買ひ鯨ならぬ大僧正の榮職を漁獲せんと期せしなり。物語の本文は第二段よりセクションはじまれり其の骨髓の旨意は左の如し

一父あり其の死ぬるや其の三子ピーター(羅馬教會に比す)マルチン(英國教會に比す)及びジャック(背國教徒に比す)に遺言して其の家産を遺したり然るに此の三子世の流行に動かされておの／＼ほしきまゝに遺言の義を解釋し遂には悉く家風を破り三機の眼袋三機の生活相争うて止むことなし其の中尤も穩當なるはマルチン云々

基督教會の法規を老父の遺したる衣服に比し三種の教派を三兄弟に作り做し其の特殊の性行を叙して暗に三教の長短を評する所奇想百出滑稽沸くが如く筆鋒鋭利或は羅馬舊教會を罵倒し或はカルボン宗派を嘲殺し兼ねて全社會を諷刺し來たる眞個有数の奇著といふべし。或はかゝる作を名けて諷諭的戯文エズカスベックともいふを得べし、文章はあくまでも古物語の味を摸して嚴肅なれども旨意は悉く嘲諷なればなり。但し此の『桶物語』の妙は其の實本文たる寓意諷其の物にはあらずし

てむしろ著者の所謂岐路談デジャヴにあり、こは實にあらゆる當時の専門家學者輩を諷刺冷嘲したるものにて明かに後の『ガリワル巡島記』の先驅たり。

“Battle of the Books”もまた同じころの戯作にしてこは其の主公ヰリアム、テムブルの爲に著ししものなり即ち文學上に於ける古人と今人との優劣に關して當時の文壇に一大爭論の起こりし時テムブルの説を辯護し古人を褒め今人を嘲りて此の作をなせり。前の『桶物語』に比ふれば其の旨味幾段か下りたれど諷嘲の筆の妙はこゝにも見るべし。

さて上にも已にいへる如くスヰフトが半生の大目的はひとへに大僧正の榮職を得んとするにありしが件の『桶物語』の鋭利激烈なる諷刺は八面に敵を醸し羅馬教徒皆國教徒はいふも更なり彼れが力めて其の歡心を得んと欲せし英國教會の僧官すら多少の惡感を抱くに至りしかば其の宿望は遂に成らず僅に愛蘭土なるセントパトリック院の副監牧師たるに甘んぜざるを得ざるに至りぬ。思ふに是れスヰフトをして憎人怨世の念を増長せしめし一因なるべし。さてまた政治上にていはじめは時の在野黨即ち民黨に左袒しそか爲に筆を揮ひしことも屢なりしが

中びる變心して専ら保守黨を助けたりきこは其の功名心を満足するの階段を求めしに外ならず。而して其の第一の目的たりし大僧正の職を得る能はざるやまた轉じて政府黨の勁敵となり其の銳利なる筆鋒をふるひて頻に英政府の政策を非議せり。彼の愛蘭土の爲にドレイピアルといふ假名にて七篇の書翰體の論文を草し之れをダブリンの新聞紙に掲録せしめ一世の視聽に聳動せしが如きは其の一例なり。こは新銅貨の發行に反抗して愛蘭土の利益を擁護せし有名な論文にして其の諷刺の如きは特に冷酷を極めたりされば愛蘭土の民心は爲に甚しく激昂し一時はスヰフトを神の如く崇敬するに至りき。其の頃スヰフトなにかしに謂つて曰はく「我れ若し一指を擧げば英の内閣は粉塵とならんと而してこは假空の大言にあらざりしなり。

スヰフトが眞の傑作は明に『ガリソル巡島記』なり。こは一千七百二十四年より同三十七年に至る十三年間に成れるものにて彼れが五十七歳の時に着手せる作なり。此の著はシヨウの評したる如く A vast and all-embracing satire upon humanity itself (人間全體を諷刺したる廣大の作)なり固よりの私わたしの憤怨の爲に個人を攻撃せる影

も見ゆれと今日の讀者より見れば此の著の面白味は主に其の全體の諷刺にあり趣くとも人間の暗黒面は常にかくの如く見らるべしと信ぜらるゝ點にあり、換言すれば『ガリソル巡島記』は恐らく長永ながながに存在すべき我が人生の醜惡なる方面を餘蘊無く描破したる作なりといふべし。之れを一種の小説として見れば其の寫實的結構及び其の寫實的狀寫の筆の周細精緻殆ど一毫の微をも遺さざるが如きは下に小説家の章下に語らんとするデフォーが『ロビンソン・クルーソー』と伯仲の間なり、文章の質樸平淡なるはた頗るデフォーに似たり。但しデフォーはあるらしき事の多少實驗を材としてげにもあるらしく、書きいだしたれどスヰフトは世にあるまじきことを例の深刻なる想像によりてげにもあるらしく、寫しいだせり以て兩者の技の一ならざるを見るべし。

『ガリソル巡島記』は前後四篇より成れり其のうち身長僅に六寸弱の人種の棲める小人島小人島の巻と身長六十尺以上の怪物の棲める巨ゴリグン人島小人島の巻とは人間界の事物例へば官爵名利等の如何に些屑陋劣にして取るに足らざるか及び人間以上の物の目より見ばあらゆる人間の行爲智力上及び体力上の諸行爲の如何に憫笑すべきも

のなるかを例の奇想天來の筆を以て縦横に諷刺せるものにして二者共に同一諷刺なれども其の諷刺の鹽梅はさながら望遠鏡を順逆の二途に利用して山水の遠近濃淡を察すると一般或は人間を優者として見せ或は人間の劣者として見せ或は大にし或は小にし以て人間の眞面目を發露し盡せり。さて第三篇は「飛島の巻」なり、こは専ら哲學者、科學者輩を嘲倒したるものにて有名なる Lugado 大學の記事の如きはルシアン、ラベレ等の作意に負ふ所も尠からずといふ。但し此の巻は四篇中の劣作なるべし諷刺や、荒みて淺露なる戯誌に流れたればなり。尙此の巻の中には他の種々の島巡りあれどくゞしければ爰には言はず。第四篇「アイナム國の巻」(Houghinms) 即ち賢馬國の巻はスヰフトの特質と十八世紀の暗黒面とを知らんとする者の是非に一讀すべきものなり。此の島國に棲める人間めく動物を Yahoo といふ是れ明かに作者が滿腔の憎人主義を母として人間の醜惡を代表せんが爲めに生まれたる怪物なり恐らくは此の一篇は所謂宗教家者流の殆ど正讀し得ざるほどに慘刻を極めたるものなり。我が「和莊兵衛」「夢想兵衛」のたぐひはいふ迄もなく此の「巡島記」のあらずちを耳聞して笑を構へたるものな

らめど其の根柢の主意は此れと彼れと霄壤の相違あれば到底日を同うして談るべからず。また我が國の評者のうち或はスヰフトを鳩溪に比しスヰフトの眞に大なるを認めながら尙二者の文品を兄弟せんとする者あれどこれもまた失倫の月旦なりスヰフトと鳩溪とは遊くとも文致の上にては晝夜の差別をなす者なり前者は嚴肅後者は戯誌彼れは澁而此れは冷笑彼れは大氷海の如く此れは濁浪の澎湃たるが如し。

スヰフトは壯より腦病になやめりしが一千七百四十一年以後持病漸く激しくなりゆきて竟に同四十五年に逝りぬ。死前三年間は絶えて物いひしとなくさながら意識なきものゝ如くなりきといふ。絶望と怨憤との間に其の心狂ひたりしなり。

『英國十八世紀文學史』の著者ゴッス曰はく「十八世紀前半の偉人たるスヰフトは後半の偉人チョンソンよりも偉なり彼れは第一流の創新を有す。彼れ一たび憤怒するや其の殘忍なること悪魔王の如く其の和らぎて媚嫵するや恰も猫兒の可憐なるが如くまた其の戯誌するやさながら虎兒の戯るゝが如し」中畧彼れは悉く怪

評すべく殆ど端倪すべからず彼れは矛盾の一束なり全般の好奇心の目的なり多数人の畏避する所、少数人の熱崇する所と。評し得て餘蘊なし但し本文に叙する所は彼れの生涯を悉さざれば讀者恐らくは其の和らぎて嫵媚する由縁を解せざるべし此の怖ろしき悪魔王が前後二佳人に戀愛せられ如何に珍らしき家庭の悲劇を経験せしかは宜しくポイル、スコット、クレイク等の編める詳傳に就いて之れを知るべし。

アチソン、スフフトは十八世紀前半に於ける時文壇の驍將、殊に所謂小冊子の論文家として下に語るべきダニエル、デフォーとならべ稱せられ或は羅馬の三議政官に對比せらる、すなはちアチソンはレビダスに比すべくスフフトはアントニーに比すべくデフォーはオクタヴィアスに比すべし。此の三名家の外にソル、フリナム、テムプル、僧正アッテルベリ、シヤフツベリ、卿、ポリングアローク卿、ベルナードマン、デ井ル、僧正ベルクレ、メレ、モンタク女史などいづれも同じ方面に名聲あり。されは此等諸家の評は到底此の零史中叙説し得べくもあらずよしまた叙説するも總て他の論文家に關することは之れを後半の偉人たる博士デジョンソンを叙する折に譲り以下當代の詩況を講じ専らアレキサンドル、ホープの上をいけん、ホープは十八世紀の前半に於ける韵語界の明星なり。

第三章 擬古時代の詩王ポープ

十八世紀の前半は擬古詩全盛の時代なり。當代の詩人は主として重きを形式に置き豫め法格を設定し専ら古詩に擬して作せしかば其の作の相似たることさながら同模型より成れるが如きもの少なからず尠くとも詞花言葉の巧を競ひ只管修辭法の正しからんを欲し古格に背くまじと励めたりし點は此れ彼れ殆ど一轍たり故に擬古時代の詩歌の特質は其の一を精檢して以て他の百千を類推するに足るなり。而して千種万様の剪綵爛熳たりし間殊に色彩の陸離として先づ人目を眩するは實にポープが彫琢萬回の詩篇なり。されば彼れが詩の如何なるかを知悉するを得ば所謂擬古時代の詩學と其の諸作との特質形狀を知るに庶幾からんか。

ポープは一千六百八十八年五月二十一日英國首都龍動ロムバールド街に生まれき。父はリチン商にして家計頗るゆたかなりき。ポムープ生れて矮小加ふるに駝背

なりしかば長じて後も身の長四尺に過ぎず剩へ全身いたく瘠せ細り而して其の兩腕のみは不釣合に長かりければ學校朋輩は彼れに綽名を負はせて「蜘蛛風車」(疑問標など呼べりしが其の聲いと美なりしかば或はたへて「小鷗」も呼べりき。齡やうく五歳なりしころより既に能く詩を解せり八歳の時家附の僧某に隨ひて羅典希臘の文法を學びて羅典の名家スタタウスの詩一節を譯しき蓋しスタタウスはザルツルと共に彼れが終生愛好せりし詩人なりき)。十二歳更に一の脚本めく作を物しぬ其の中の人物には「イリアッド」中の英雄アキリーズ、ヘクトル、ユリシーズなどいふ人物あまた見えたり。

ポープが初めて其の作を世に出ださんと思ひ立ちしは外交官井リアム、トラムボイルと地主ナルシエとの徳憑に因るといふ。トラムボイル曾てポープの詩を見て激賞して曰へらく「余は他に君の如くミルトンにも匹敵すべく思はるゝ詩人あるを知らず」と。ナルシエもまた曾て曰へらく「ナルツルといふどもポープほどの年ばえにてはかく巧に詩を作り得ざりしならんこれ思ふに諛言にあらじ」と。ポープ性來讚賞を愛すること飲食の如く譏貶を惡むこと蛇蝎の如くなりき此等

の褒辭を得たりし時の意氣想ひ見るべし。一千七百十年ポープ龍動に出で、當時の改進黨の諸名士と交を結びぬ蓋し商賈も農夫も學者も詩人も相會すれば必ず政治を談ずること當時の一流行たりしなり。翌年有名なる「批評論」といふ詩篇をいだしぬ「ジョセフ、アチソン」先づ其の「觀察者」の紙上に於て之れを賞揚せり。かくて一千七百十二年の春其の友スチールの紹介によりて初めてアチソンと相知る此の年其の傑作の隨一「The Rape of the Lock」といふ諷諧の詩を公にせしが世評頗る高く其の名俄然として大都に喧傳せり。一千七百十三年「ウインドソルの森」といふ詩篇を著して始めて諷刺家の王「ジョナサン、スワフト」に知られしが爾來二十有五年兩個の間信書の往復絶間なかりき。同じ年スワフトの紹介によりてオックスホオドの公爵ロバート、ハリー、男爵ポリンクプロック、ロチエスタルの僧正アツタルベリー等と交り又詩人にして巴里の公使を兼ねたりしマツシウ、プライオル醫師にして著述家を兼ねたりし博士オーバスノット并びに詩人兼脚本家「ジョン、グイ」等と交を結びき。一千七百十五年其の名篇「英譯イリアッド」を世に出だしぬ其の第五卷を譯出せしまでに無慮五千磅の報酬を得きといふ以て其の世

に行はれしことを想見すべし。同じ頃オックスホオドの人にしてアヂソンの友なりしトマス、チツケルといふ者同じく『イリアッド』の第一巻を翻譯して世に出だしぬ而してアヂソンは其の『觀察者』の紙上にいたく之れを賞揚せしかばポーアが猜疑に富みたる心は己が翻譯を貶せられたらん如くに感じていたく怒り大にアヂソンを誹謗せり。但しアヂソンがチツケルの翻譯に對して爲し、批評は妥當公平なりといふべくポーアがアヂソンに對して爲し、攻撃はひとへに私憤を洩らす人身攻撃に過ぎざりき。一千七百十七年ポーアまた『エロイサよりアペラルドへの書翰』『不幸なる淑女を憶へる挽歌』の二篇を出版せり此の年其の父チス井ツクにて死去りければ翌年其の母を伴うてト井ツケンハムといふ處に移りき。こゝにて『イリアット』の翻譯を大成し更に『シェークスピア全集』の出版に従事せしがこの業はむしろ失敗の業なりき。當時の批評家リユニス、シオーポールド詳に此の書の缺點を發きてきびしく編者を非難せしかばポーアは燃ゆるが如く怨み憤り後に彼の嘲罵の詩『愚物語』といふを著し、折猛烈なる復讐を爲しぬ。『愚物語』の中に捕らへられたるはひとりシオポールドのみならず平素ポーアと相反

目せし輩は一人としてポーアが嘲罵の犠牲となりて愚物の仲間入せざるはなかりき。此の書の出でしは一千七百二十九年の事なり。(シヨツは四十二年の出版と爲したれども是れ蓋しポーアが末年に及び僧正ワルバルトンの獎によりて起稿したる第四巻をも含めて言へるなり)。爾後數年の間のは『人間論』『道義論』及び『ホレオスの模倣』等にして皆韻語なり。

一千七百三十三年ポーアが母齡九十二にして世を去りぬ。そもくポーアは終身妻を娶らざりしに十七年前既に其の父を失ひたりしかば爾後眞實の愛情をもて接せしものは天下唯一の老母ありしのみ。彼れが老母に對して有せし此の温き感情は淫雨密雲の濛々たるが如き其の生涯中に於て僅に認め得べき一道の光明なり。

彼れは常に自己の生涯を名づけて「一長病なりといへりきさしも虚弱多病の身をもて外は攻守に遠なく内は心火の熄む時なかりしかば其の齡五十を過ぐるや未だ老いたりといふほどにあらぬに神心いたく衰へ形容枯槁して長く命脈を保つべくも見えずなり一千七百四十四年五月三十日に至りて遂に其の「一長病なりし

生涯を脱して澹然不歸の客とはなりぬ。遺言して其の屍をト井ツケンハムの寺院なる其の父母の墳墓の傍に葬らしめき。享年五十有七。

ポープが主なる煩惱は名譽を得んとするにありき。トマス、アインールド曰へらくス。ポープは其の文學上の成功をもて單に好位地を作らん踏臺とせしに過ぎざれば、ポープはそを手段とはせずしてたゞちに其の目的となしにき即ち前者の欲望は權力を得んとするにありて後者の欲望は名譽を得んとするにありきと。げにポープは名譽を得んが爲には何物をも犠牲に供せんとしたりき若し己が名譽を傷けんとするものあれば武器を選ぶに遑なく奮然之れにあもむき百方防戦の事に従ひき。ティーン曰はく彼れが筆を取る大理由は所詮文學上の名聞にあり彼れは稱賛せられんとを願ふの外他念なし彼れの生涯は猶一娼婦の生涯の如し。彼の娼婦や朝より鏡前に立ちて化粧を凝らし又他人より挨拶の手紙を受けては満面微笑を呈しながら他人に對しては我れは他より挨拶の手紙を受くるばかり五月蠅きはなし紅粉は徒らに我が面を汚すに過ぎずなどいふ、ポープは恰も此の娼婦に似たりと。

欠

MISSING

ナルの筆として、雖つかしからず、其のあはれ深く物せられたる、グランザンよりもハリエツトよりも一層旨味深し。リチャードソンは其の性女性に似たり、彼れが叙寫の長やかにして、綿密なるは其の自然の結果なり。ハズリットは曾て此の篇を讀みて、著者がグランザン夫婦が新婚の曠衣を叙狀するに十二頁を費したりとて咎めたるが、後に或乙女が、此のくだりこそ篇中の最も感動すべき挿話の一つたれとて、現に其の全文を寫せるを見出だして驚きぬ、以て其の如何に女性に愛讀せらるゝの特色を具へたるかを知るべし。はづめりチャードソンが此の作を編まんさせしや、其の中なる上流社會の用語に誤謬あらんことを恐れ、或貴女につきて是正を乞ひしに、誤謬矛盾餘りに甚しかりければ、遂に正誤の望を絶ちけりぞ。思ふに人間、就中女性の性情を根氣よく解剖したる點に於て、又微細なる出來事及び綿密なる叙寫を、いやが上に積聚するの傾ある點に於て、并に其の感情のやゝ不健全なる點に於て、(勿論國民及び時代の異なるありさいへども)マルザックミリチャードソンとの間に著く相似なる所あり云々。

さて此等三小説に通ぜるリチャードソンが作家としての長短を檢せん、まづ彼れが著の感化力を論じて、其の宗教上及び道德上に於ける効績の偉大なるを讚せ

るはエルシユなり、其の説に曰はく

思想に富める人、善真にして其の力を高尚なる目的に用ふる時は、彼れは神明の偉なる考案を實行す、即ち人生を極美極佳のものとし、又人情、正義、慈悲、敬虔の度を増加し、秀拔なる男女たらん願望を増加す。而して彼れが放ちたる至善の光の翕然として人を化する、宇宙の抗すべからざる重力にひきこみ、大無限其の背にあればなり。倫理的小説家は實にかゝる恩恵を垂るゝ者なり、後れば事物の精靈を吾人が眼前に示現し、空理上の用語たる道義といふ語を實行上の用語に翻譯し、高き行卑しき行を對照して其の是非を明にし、以て善を愛するの念を強くし、惡を憎むの念を鋭くす(中略)吾人若し如何に讀者が舊派の無稽なる物語を讀みて、催眠欠伸を禁する能はざりしか、如何に喜びて彼等は此の最初の寫實小説に向ひしか、如何に當時の風流社會が熱中してそをもてはやししかを考ふれば、吾人はリチャードソンが「一たび湧き出づれば永久潤るゝをなき道念の泉を發見せしことを疑ふ能はざるべし云々。

テインは曰はく、

我が親愛なるリチャードソン、足下はいさされたる作家なれども十分の才を有せず。

足下は道義の補助たらんとして却りてそを害したり。足下は其の著の首尾に挿める教訓的廣告の結果を知れるか。吾人は之れを見て懇縮し、今までも俗衣を着たる平人と見たりし男の俄に本相を現し、黒衣を纏へる既教者となりて出で來たるを見て、其の欺かれたりしを憤る。道念はおのづから浸潤せしむべし、強ひて被らすべからず。記し、人は其の心の底に背反の性を具へたるを、餘りに規律をもて取り圍まば、却りてその中を逸出して自由なる空氣を呼吸せんとすべし。足下は『パメラ』の巻尾に、模範となるべき彼の女が美德を列擧したり、讀者は欠伸して其の樂を忘れ、今まで天女の如くに思ひし、パメラも、其の實は教訓の爲に出で來たれる教會の傀儡ならずやと訝かるなり。(中略)吾人は術を愛す、而して足下の有したる技術はいさゞ僅少なり、吾人は樂しまされんとを要す、而して足下は吾人を樂しませんとせざるなり。足下はあらゆる手紙を全寫し、談話を細記し、何事をも記述し、一物をも削り去らず、足下の小説は數卷を充塞す、あはれ吾人を憫みて剪刀を用ひよ、巧妙なる文學上の工人たれ、記録局の書記たるなかれ。足下が一切の證書類を大道に於て傾瀉するなかれ。美術は自然と異なり、後者は延長し、前者は緊縮す。二十頁の手紙二十通も、或は一性格をも表す能はざれど

一。妙句よく之れをあらはす。足下は真心の爲に壓せられたり、故に一步づゝ徐歩せざるを得ざるなり、足下は自己の天性を恐れてそれを抑制す、足下は情慾が最も其の毒を逞うせる瞬間にだに、整高く叫ばしめず、又自由に語ることをもえさせず。足下は強ひて辭をうつくしくし、語を飾る、自然の人性が熱鐵の如き情欲に貫かれて絶叫し、驟起し、足下が扉壁を跳出せんとするや、足下はシェークスピアの如く、それを有りのまゝには示さざるなり。足下は畢竟人の自然の性情を愛すること能はず、足下が恣に懲罰を裁するは即ち其の人情を知る能はざる所以なり云々

第八章 ヘンリー、フィールデン

粗豪磊落個人としても作家としてもリチャードソンと直反對なりしものをヘンリー、フィールデンとす。ヨーロッパに嘗て二家を評して曰はくリチャードソンの作を讀みて後にフィールデンの作を讀めば暖爐をもてあたゝめられたる病室をぬけいで、風薫る夏のはじめに廣々とせる緑野を逍遙するが如しと。リチャードソンは哀傷し、フィールデンは戲謔す、彼れは沈鬱此れは快活、彼れは常に愁へ常に怖れ常に懸念し常に苦慮し嘗て安心する能はざる神經質の如く此れは放言

し笑諷し嘲罵し冷刺し念頭些の苦勞を感じざる者の如し。リチャードソンは女々しき悲劇の且末に比すべく、フィールデンは荒々しき喜劇の淨丑にくらぶべし。リチャードソンは個人として謹慎敬虔の良市人、フィールデンは放逸粗豪の遊蕩子、前者は常に神明を畏敬し、後者は屢、酒色に荒みき。小説の作家としてはリチャードソンは狭けれども深く、フィールデンは廣けれども淺し、前者は専ら女性的人格を畫くに長じ、後者は廣く諸の性癖を寫せり。要するにリチャードソンは個人としても作家としても終始規矩準繩によりて進退し、フィールデンは之に反し一舉一動ひとへに自然の性に從へり、かるが故に一は窮屈に狭く一は自由にしてのびらかなり。フィールデンの作中にあらはるゝ人物は男女老弱を問はず皆活潑なり皆快活なり善く談じ善く歩し善く食ひ善く飲む就中男性に在りては喧嘩口論争鬭刃傷は不斷の事たり、隨うて作中の人物一人として多少の缺點を具せざるはなし痴愚ならざれば頑陋、頑陋ならざれば浮薄、浮薄ならざれば偽矯、偽矯ならざれば貪婪、貪婪ならざれば多情、いづれも道徳上より謂ふ不具の徒なり。約言すれば式亭三馬が戯作中の人物に一層判然たる性格を附與せるが如きものは、是れ彼れ

が最も得意とせし第二流の人物なり。また彼れが小説は概して郊外の事に關すリチャードソンの小説の主に深窓及び室内の事に關せるとは反對なり。フィールヂングの作は一面よりいへば旅行記に類す譬へば我が武者修行の物語を一層世話に崩したるが如し。回毎に局面あらたまり新事件起り新人物出づ殆ど應接に追あらず而も一篇の主人公は猶光る君の源氏物語にオムニプレセントなるがごとく彌次郎兵衛喜多八の膝栗毛に通在せるが如く毎に其の間に出没し對手變はれども主變はらざる脚色なるが故に首尾相つながら脈絡相貫くを得たり。按ふにリチャードソンは強ひて人性の高雅なる側面を寫さんと欲して文に流れフィールヂングは只管當時の實相を摸寫し來たりておのづから野に失したり。リチャードソンは十八世紀の理想的人格を描かんと力めフィールヂングはありのまゝを寫すことを悦べり。小心謹直なるリチャードソンは當時の亂倫に寒心して殆ど笑の能力を遺却し蕩迭弄柯なるフィールヂングは此の大自由の生活に流連して殆ど其の涙を失はんとせり。彼れも多情多感の人時に自他の爲に泣かさりしにはあらず彼れは所謂エウモリストたるの資格を具せり哀傷を寫すの筆はた

頗る見るべきものありされども彼れが同悲は膚淺ならざれば暫且なり暫且ならざれば浮泛なり彼れの落落たる氣質は長く一事に執着して深く沈愁する能はざりしなり。蓋し武人的にして詩人的ならず男性的にして女性的ならず活動的にして瞑想的ならざる所是れフィールヂングの小説作家としての特質なり。されば彼れは十八世紀の大腐敗を觀るも他の情に脆き詩文人の如く徒らに悲愁憂悶し沮喪絶望するの女々しさにはをちいらさりしがさりとて此の墮落に感慨してまづみづから己れを淨うし進んで同胞を淨うせんといふ大なる志を抱きしとも無し。こは其の作の滑稽的なるが故にいふにあらず單に作意の上よりいへば彼れも一種の勸懲家なり人種と時勢と境遇との然らしむる所彼れはた教誨者たらざるを得ざりしなり。彼れの作せしや毎に道義的目的を有せり彼れは其の作ヂョセフアンドリュウスの序中に記して曰はく

悲哀嚴格の調子は却りて世をそこなふの虞あり既而滑稽こそはむしろ人をして善良なる氣質を養成せしむるものなれ

と。こはリチャードソンの作を嘲らんが爲に或は殊更に言を立てたるならめど

其の所謂談話の裏に諷刺教誨の旨毎に籠りて會釋なく不徳弱點を剔扶し暗に當代を矯治せんの意のほの見ゆる以上は彼れはた勸懲家たるの名を辭する能はざるべし。彼れは自然を愛するもシエークスピア、キョオテの如く無私公平に愛せしにはあらず。彼れは純粹の美術家にあらずしてアングロサクソンの美術家なり何となれば彼れは常に是非善惡を批判しつゝあればなり。彼れは自然の勢力として性情を描くといはんよりは褒貶すへき世間的勢力として之れを寫せるものゝ如し。すなはちフィールディングは心理家にして兼ねて裁判官なり諷刺家なり勸懲家なり。但し嚴密にいふ時はフィールディングをして勸懲家たらしめしは時勢風潮の然らしめし所なるべし而して彼れが作の野に失して高雅の側面を脱したるもひとしく時勢の所爲とやいはん。彼れにして十九世紀の文壇に生まれれば豈必ずしもかくの如くならんや技倆の上よりいへば彼れはデッケンズ、サッカレーに比して或は優るとも劣ること無かるべし。

其の畧傳

ヘンリー、フィールディングの父は Danish の伯爵が孫にして陸軍の將官なりき其の

母はた一裁判官の女なりきといふ。一千七百〇七年四月サマルセットシヨアなるシヤーブハム、パークにて生まれたり。其の父家眷をびたしく而して經濟に拙かりしかば家計夙に不如意となりき。ヘンリー其のはじめイトンの學校に入學し後和蘭に往きレイデンの學校に入り法律を修むること二年、二十歳學を廢して本國に歸り作劇家となりぬ。其の初作 "Love in Several Masks" は一千七百二十八年に成れり爾後五年間に彼れが作せし脚本都合十七篇、其中 "Tom Thum" と題せる滑稽劇尤も世にもてはやされたり。されど文學上の價值よりいへば、此等は皆失敗の作と稱すべしフィールディングは小説家の鼻祖としてこそ頗る稱すべきの價あれど作劇家としては重きを置くに足らず。さてフィールディングは其のところ某資産家の女を娶りて家計やゝゆたかなるを得たりしも性來の放蕩と奢侈との爲に幾ばくもなく此の新家産をも蕩盡し進退谷まるに及び(千七百三十七年)處世の方針を一變し法學中院に入て學び同四十年六月狀師たることを公認せられき。されども其の微薄なる所得は家政を維持するに足らざりしかば彼れは尙舊の如く屢々新脚本に筆を染め若しくは政治上の小論文を草し之れを賣りても糊口の

資とせり。彼れが政治上に執れりし主義は民権自由の説なり。一千七百四十二年はじめて小説に筆を著けき。リチャードソンが『パラム』の餘りに訓誡的にして態とらしく沈鬱なるが甚しく世間の好評を博し當代唯一の傑作の如く稱せらるゝをかたはらいたく思ひかゝる重くろしき筆に成れる劣作をも世人は面白しとたふるかは我が腕を見よといふ意氣込にて輕妙自在の筆を揮ひすなはち空前なる社會小説の端を開きぬ『ヂョセフ・アンドリュウスの傳』是れなり。こゝには其の梗概をだに叙する餘地無し今は只其の篇中の人物中Lady Booby及びParson Adamsの尤も見るべき價值あることゝかゝる種類の性格が彼れの得意の人物なることゝのみを言ひて止まん。翌年Miscellaneous(雑集)と題したる書三卷をいだし『A Journey from This World to the Next』(此の世よりあの世への旅)及び『The History of Jonathan Wild』(大盜ヂョナサン・ワイルドの傳)の二著は此うちに含まれたり。千七百四十九年エストミンスタル及びミッドルセックスに對する警視總長となりぬ。此の在職間に彼れが傑作にして明かに英國社會小説の開山とも稱すべき『Tom Jones』(トム・ヂョンスの傳)成れり此の書を一讀したらん者は長老紳士オールナルチャー・郷士

エストルン可憐嬢ソーファイア卑しむべきブライフィルをかしまきバートリツマ及び作者の分身とも見るべき主人公トム・ヂョンスの面影を忘れざるべし。さてまた同五十一年には『Amelia』といふ最後の作いでたり女主人公アマリアは作者が最愛の亡妻を標本として成りたること疑ふ可からず又其の男主人公Mr. Boothはトム・ヂョンスよりも一段著く作者の性癖を映射したり。晩年善く職に努めロンドン府内の鼠賊を蕩攘して名ありき然れども壯時の蕩逸は其の老時に報い身神やうやく衰弱せしかば一時英國を離れてリスボンに遊び治療に手を盡くしも其の効なく、一千七百五十四年バイロンが激賞して『The prose Homer of human nature』人間を描ける散文の大叙事詩家といへるヘンリー・フィルディングは未だ知命ならずしてみまかりけり。

第九章 スモレットとストルン

リチャードソンの如き嚴格なる道念無くフィールディングの如き縦横なる詩才なきも暢達の筆に世相を直寫し以て一代に名を博し面白き物語の作者として今尙普通の讀書社會に歡迎せらるゝはトピアス・スモレットなり。彼れは一千七百二十

一年スコットランドの一名家に生まれ祖父の手に育せられて人と成り十二分の教育を享けたり然るに二十歳の時祖父を失ひ忽ち生計に困窮せしかばすなはちまづ詩文をもて身を立てんと欲しかねて起稿せりし處女作『The Regicide』(弑逆)と題せる一悲劇を懐にしてロンドン市に上りぬ。かくて此の作を名優カーリックに示し直ちに之れによりて梨園文壇に位置を得んの心なりしか採用せられざりしかば失望しはじめ醫學を修めたりしを傳手に一軍艦附きの外科醫の助手となり爾來しばしば海外に航遊し一時は西印度に寄留せしこともあり。チャマイカの島にありしや多少資産ある一女子を娶り更に幾多の變轉を経て一千七百四十四年再びロンドンの都に歸り醫術と文學とによりて身を立てんと力めき。一千七百四十八年はじめて小説の作あり上下二卷是れ其の傑作にして『The Adventures of Roderick Random』(ロドリックランダム一代記)と題せる者なり。スモーレットが特殊なる筆致及び其の長短所は尤もよく此の作にあらはれたり。此の作は當時流行の自叙傳小説にして主人公は蘇國人なり其の一代の閱歷境遇行爲性質までも著く作家自身のに似たり蓋し全傳の結構は佛の名家レサーム(Gil Bias)の著者(を學び

事件及び人物は主に自家の閱歷を基とせしなり。さて此の作はいたく時尙に叶ひて文名たちどころに揚がりしがスモーレットはもと創才にあらずまた眞詩才に富める作家にもあらずむしろ多々ますく辯ずるの才ありしのみ。彼れは韻語をも能くしたり劇詩脚本をもあまた作れり又あまたの政治上の論文及び諷刺文をも物したりされど其尤も長じたりしは小説なりそれすら動もすれば卑野陋俗に失し然らざれば只ありのまゝの散文的報告に似て美術の品位を缺けるもの多く且つ其の人性を観察する力も到底リチャードソンの如く精熟なる能はず將たフールディングの如く微妙なる能はず又其の脚色を設くる法もリチャードソンの如く論理的にもあらねばフールディングの如く巧妙にもあらず只種々の奇しく珍らしき事件を連続して俗を娛しますること長じたりしのみ。其の作意筆致を總評せんに狡猾は之れ有るも巧妙はいまだし、諷刺は之れ有るも諷刺はいまだしと評せざるを得ず。其の作中に見いださるゝ奇事異聞は卑猥ならざれば慘刻々々ならざれば奇異なり讀者にして高からば屢眉を顰めざるを得ざるべし。さはれ彼れもまた一個のユーモリストなり時に人情の琴線に觸れて眞に他を悲喜せし

むるの技倆無きにしもあらず只其の多數の作中にさる妙處の寥々たるを憾むべしとす。思ふに是れもまた時の風尚の然らしめし所なるべければひとり作家のみを咎むるは酷なるべし。

一千七百七十一年病を得て伊太利なるレクホルンに客死す。其の主なる作にして前に擧げざりしものは左の如し

“Peregrine Pickle” (小説)

“The Adventures of Ferdinand, Count Fathom” (同前)

“Don Quixote” (翻譯)

“The Critical Review” (雜誌)

“Sir Lancelot Greaves” (ホーバートを得て入牢中『ドンキ』に倣ひて作せし小説)

“History of England” (歴史)

“Tour in France and Italy” (紀行)

“Expedition of Humphrey Clinker” (蘇汝遊記をもいふべきものにて英)等

要するにスモーレットの小説は名けて武人的ともいふべし、彼れが描ける社會は之

れを十八世紀の社會として見るも尙あまりに亂暴狼藉に過ぎたり。彼れが描く所の社會を實際の社會なりとすればいともく怖るべき社會なり。少女若し誤りて一たび此の社會にさまよひ出づる時は或は忽ちに成女となるべき虞れあり男子一たびこゝに出づれば或は復た歸ることを得ざるべき恐れあり鼻をそがれ指を失ふが如き事は室内街頭に於ける尋常普通の爭論の結果なりしが如し。要するに歐打殺傷は當社會に於ける不斷の出來事にして鮮血淋漓は常に目に觸るゝ現象なりしが如し。女性も怒れば男子の面上に鋭き爪の痕を印しベレクワンピッタルの如き上流紳士も時に嚇怒して會釋なく他の紳士を痛打す。買色は殆ど公然に行はれ更に厭ふべき非倫の姦淫すらも行はれたりしものゝ如し。總じてスモーレットの畫ける人物は主人公の位置に立てる者だに私慾深くして殘忍なり其の酒に耽り情に溺るゝ點はフールディングのに大差なしと雖も後者のゝ如く洒落ならず快活ならず善良ならず。スモーレットの主人公は粗野狂暴なり其の情甚しく熱したる場合には甚しき破廉耻をも敢て行ふ、隨うて今日の讀者をして到底深く同感する能はざらしむ。况や主人公以下の男女に至りては宛然として娼婦

若しくはマドロスに似たるもの多し。

若し實にかゝる亂倫狼藉なる世間事相を英國十八世紀の世相なりとし之れを活寫せるを當代の社會小説なりとし之れを喜び讀めりし者を當時の公衆なりと思惟せば吾人は其の何故に一大革命の機運の急ぎ迫らざりしかを異しまざるを得ざるべし然れども由來寫實的小説は、就中諷刺の旨を含める者は世間相の美なる側面には簡疎にしてをさく醜惡なる側面を誇張する者なり彼のスモーレット等の作に現れたる卑陋と狼藉と殘忍とは明かに英國十八世紀の醜惡なる一面を誇張せるものにしてテロンの所謂其の高雅なる部分^ハは之れが爲に寫し洩らされたる趣あり隨うてスヰフト、スモーレット、フィールディング等の作を若しさながらに實相なりきと信ぜば甚しく觀察を誤ることあるべし。よし假に一步を譲りて英國十八世紀の世態は眞にかくの如くなりきとするも尙おのづから一種の防腐劑ありて一方には能く社會の壞亂を防ぎ他方には能く作家の大墮落を防ぎたり。防腐劑とは他無し英國人の天性と當時漸く弘通せんとせりし人性研究の氣脈なり。彼等のやゝ聰明なる者は單に社會の外面を觀察し實寫するのみをもて満足する

ものにあらず更に進みて其の由りて來たる原因即ち人心内の機微をも探らんとするなり是れ彼等をして墮落の中道にして自省自誠せしむる縁たり。例へばスモーレットの放縱と粗野とを以てして尙彼の『ハムフレ、クリンカル』の著ありこは小説に似て小説にあらず種々の人物の通信に擬して英蘇各地方に於ける人情風俗の精緻なる觀察を録せるものなりすなはち種々の人物をして交、其の特殊なる觀察の結果を語らしめ、よりて以て其の特殊なる性格を表現し來たる名けて一種の氣質物^{カチ}とも稱しつべし。此の人性研究の氣脈は早く已にチヨウサルの作にも見えエリザベス時代の諸劇にも見えベンチヨンソンの作にも見ゆ。之れを名けて内人^{インマン}の研究といふ而して個人の場合に在りては自省と名づく。個人にして自省の念あらで其の特性の墮落を救ふに足るべく社會に心性研究の風盛えて所謂主觀的觀察流行せばまだ以て其の大腐敗を防ぐに足るべし。而して英の十八世紀に最も著く此の氣脈を代表せしものをローレンス、ストルンとす。

Laurence Sterne は一千七百十三年に生まれ同じき六十八年にみまかれり。其の性質は其の作物の奇なるが如くに奇なりき。眞個畸人傳中の人物にして愛蘭土の

産なり。其の家は頗る貧なりしが母かたの親戚に扶持せられてケムブリッジの大
 學に入り後に僧となりて教會に就職し北方某地の牧師となりて但し其の放肆
 なる内行は甚だ其の職に稱はざりしものゝ如く或は同僚の僧と争ひ或は其の妻
 を虐待するなど不羈放埒なる振舞のみ多かりきといふ。其の傑作と稱せらるゝ
 “*Tristram Shandy*” は前二巻を一千七百六十一年(四十八歳の時)に公にし後二巻を
 其の翌年にいだしり。然るに其の文致の奇異嶄新なると其の觀察の精刻なると
 は直に讀書社會の注目を牽きストルンが文名をしてロンドンの詞壇に轟かしめ
 き。ストルンは大陸に遊びしこと二回、まづ佛に赴き後にまた佛伊に遊べり、此の
 漫遊中の觀察と冥想とは後に有名なる “*Sentimental Journey*” といふ一著となりて
 世にいでたり。其の晩年はいどゞ淺ましきものなりき彼れは早くより肺勞に
 患みてありしが其のロンドンにての蕩迷なる生活は悉く其の健康を殘害し友も
 無く縁者も無き零落の中に病あたらまりて竟にロンドンなる假寓(下宿屋)にてみ
 まかりきにいふ。
 ティン評して曰はく

ストルンは眞に奇才といふべし彼れは言明の混合なり(中略)不健全なる畸人、俗に
 して兼れて蕩見提琴彈きにして兼れて哲學者、母の餓死するを忍びながら死にたる
 を見ては酸鼻せし奇癖家。彼れは腫脹莊重なるものをいやしみて偽善婚飾なりとし
 痴呆の情態をもて可憐なりとせり。彼れの作中の僧にして奇人たる *Yorick* は明かに
 作家の半身なり。

ど。ヨリックは『トリストラム、シャンデー』の假説の話説者、又彼の『センチメンタル、ヂ
 ルチー』の話説者なり。すなはち作者ストルンが假に此の名を被りて例の自叙傳
 の筆法にてシャンデー一家を中心として生活の内秘を叙寫せるもの之れを『トリ
 スタム、シャンデー』とす。篇中の主なる人物は終始影の如くに朦朧たる主人公
 のトリストラムにはあらで其の父タルタル、シャンデーといふ商人の隱居、其の妻
 エリザベス及び其の叔父トビー、シャンデー並びに其の僕コオアラトリムなり。
 通篇ことさらに次第を錯亂しげに畸人の物語るはかくもあらんと思はるゝやう
 に奇談百出縱横滅烈、警句湧くが如し。要するに彼れが作の第一の特質は人物の
 性癖を描畫する筆の平叙的にあらずして暗示的なる所、即ち讀者をして言外の隱

微を冥悟せしむるやうに物する點にあり之れを劇詩的筆法といふ。而して第二の特質は觀察の穿細なること、第三のは通篇何等の脚色も無きこと也。さればテイソンも評して曰はく、彼れは事物を顛倒して描き條理を滅烈して叙説す笑ふかと思へば嘲り驚くかと思へば憐む又歎じ又笑ふ。其の自在に讀者を玩弄する趣は僧操り師の偶人を弄するがごとし。彼れが尤も好みて畫く線二條あり一條は女性的愛憐といふ線にして今一條は譏刺諷嘲の線なり。彼れは小き蠅蟲の爲に流涕し死にたる驢の爲に嗚咽し若しくは籠鳥に同感して泣く而も能く讀者をも泣かしむる力ありと。ストルンが譏刺滑稽に巧なると同時に讀者を泣かしむる悲哀の筆力あるとテイソンの言の如し而も其の實は甚しき主我者にして忘我の清徳ありし者にあらじ眞慈仁の人にあらず。所詮ストルンは有數の畸人にしてまた有數の奇才なり。

其の他の小説家

腐敗せる十八世紀の暗黒面はさらぬだに感覺鋭敏なる詩人小説家の目に映じて或はリチャードソンの場合にての如く訓誨の止むべからざるを感せしめ或はフ

ールチング、スモレルトの場合にての如く幾分か諷刺の旨意を寓して之れを評き描くに至らしめ而してローレンス、ストルン出づるに及びては其の敗俗の根底に横はれる心理的疾風の隱微さへも精緻深刻に諷示せられ社會は次第に自家の醜を自識するに至りたり。思ふにかくの如き敗風いつまでか依然として流行するを得んや反動の起りしは自然の數のみ。彼のゴールドスミスとバルチー女史とは明かに此の敗風的小説に反動して起りし高雅なる小説家の先驅なり。

オリヅル、ゴールドスミスの事は別に韻語の詩人として下にトムソン、グレー等と共に語るべければ今は只其の小説の上のみにつきていはんに彼れが小説家としての名譽はひとへに其の唯一の傑作 *"Vicar of Wakefield"* のみによりて繋がれたり此の作は其の脚色の上よりいへば取りわけて其の下半の構結に頗る不自然なる箇處ありて批難をまぬかるゝ能はざれども其の感想の清高、其の田家生活の目に見る如き叙寫の筆、主人公ドクトル、ブリムローズといふ牧師の性質及び其の他數多き人物をして髣髴活現せしめたる靈妙なる想像は蓋し及び易からざるものあり。ゴールドスミスが此の作を公にせしは一千七百六十六年(三十八歳の時)なり

即ち詩人としての名聲の已に世に高かりし時なりしが出版の當時には世間は
 まだ此の作の妙を認めざりしものゝ如し。近年の考査によれば此の小説をして
 大名を博するに至らしめしには獨の大詩人キヨオテの評與りて大に力ありとい
 ふ。キヨオテはいたく此の作を稱美し面白く巧みに物せられたるのみにあらず
 こは實に不滅の物語なりといへり其の不易の價值あるを稱へたるなり。此の作
 風に我が諸學校の教課書に用ひられ其の梗概も善く知られたれば今費せず又其
 の價格のリチャードソン、フルチング等の作と並べ稱せられても遜色無き由も
 大かたの人の知る所なるべし。

ゴールドスミスの外に反動の作家として注意すべきは Miss Frances Burney なり。
 パルチー女史は一千七百五十二年に生まれて一千八百四十年に逝りし半は十九
 世紀にまたがれる女作家なり。後に Madame D'Arblay と呼ばれて文名一世に震ひ
 たり。當時女作家いと多かりきと雖も前に "David Simple" を著し Sara Fielding
 (ハンリー、フルチングの妹) 後に "Sense and Sensibility" 及び "Pride and Prejudice"
 などいふ作を著し Jane Austen との間に立ちて男性作家と相並して作家中にて尊

々たりし者は此の "Evelina" の作者なり。女史は有名なる音樂史家ドクトル、パ
 ルチーの女なりき其の著す所の小説は Evelina の外に "Ceilia, or the Memoirs of an
 Heiress" "A Picture of Youth" 等あり今尙讀まるゝは前にする "Evelina, or a
 Young Lady's Entrance into the World" と題したる小説のみ。此の『エヴライナ』は女
 史が廿六歳の時世にいでしが作せしは十何歳(或はいふ十五歳と)の時なりき。は
 じめて世の中に立ち出で種々の甘酸を閱歷せる年少女子の自叙説に取り做せ
 る此の作をはじめは名を隠して出版し父母にだに知らせざりしかば Little Fanny
 の作たることは暫らくは何人にも知らざりしが後に其の名喧傳せんとするに先
 だち博士サミュエル、ジョンソン之れを聞き知りて大に感じリチャードソンのにも
 はぢざる妙句あまたありと褒めたゝへき。女史の評傳は坊間にありふれたるマ
 コーレーの著にもくはしければ省く。

さてオウスケン女史の作を十九世紀の文壇に屬せしむれば十八世紀の小説作家
 中他に取りいでゝべきは "Chrysal, or the Adventures of a Guinea" と題せるメモ
 ーレット風の卑陋なる戯作に一時の虚名を博したりし "Charles Johnstone" "Castle of

Oranto”といへる傳奇風の小説を作りて傳奇派の中興とも見做さるゝ Horace Walpole ストルンを學びて種々の沈鬱なる小説を作し“The Man of Feeling”に今尙 文名を傳へたる Henry Mackenzie など數名に過ぎず後に語るべき博士サミュエルヂ ヨンソンの如きも専ら訓誡を旨としたる『ラセラス』物語を作りたりしが、要するに 昔第二流以下の作家、十八世紀に於ける小説文學はメモーレット、ストルンに至りて 一頓挫し其の數十年間は著き進歩無かりきと評すべし。彼のチェーン、オウステン とシャルタル、スコットとが如何に此の沈滞を翻轉して一の新しき清流を開きしかは 近世文學史のはじめに説かん。

第十章 サミュエルヂヨニソン及び散文名家

詩歌の最悪時代と貶稱せられたる十八世紀は已に小説壇に夥多の名家をいだし たる如く他の散文學壇に於ても頗る夥しき名家をいだせり。まず神學及び哲學 壇に於ては “The Analogy of Religion, Natural and Revealed, to the Constitution and Course of Nature” を著し、僧正 Joseph Butler (一千六百九十二年—一千七百五十二年死) “Inquiry into Beauty and Virtue” 及び “System of Moral Philosophy” 等を著し、蘇の哲學者

Francis Hutcheson (一千六百九十四年生—一千七百四十六年死) “Tale of Cicero”, “Free Inquiry into Miraculous Powers” 等を著し暗に懷疑家ヒウム、キッポンの觀念を固定する の力ありきと云ふケムブリッヂ大學の博學なる圖書係 Conyers Middleton (一千六百 八十三年生—一千七百五十年死) ともに修辭に哲理に關する著述 (例へば “Art of Thinking”, “Elements of Criticism” など) を著し、蘇の貴族 Kames (一六九六生—一七八二 死) 及び同じく美辭學者として知られたりし Dr. Hugh Blair (一七一八生—一八〇〇死) 純粹の形而上論者として當代に冠たりし Jonathan Edwards 及び George Berkeley 若しくは Shaftesbury の第三伯アントニー、アッシュレー、クーパーなど、又歴史文學の壇上 にては哲學者としても當代并びに後世にも有名なる David Hume, Robertson, Gibbon 等又政治論壇の文士としては Pitt, Fox, Burke, Sheridan, Francis 等若しくは經濟學者 アダム、スミス、法律學者ブラックストーンなど、殆ど枚擧するに遑あらず。而して此 等諸方面に終始幾分かの關係を有して教師となり雜誌氏となり詩人となり小説 家となり劇詩家となり傳紀家となり或はシェークスピアの全集に評註し或は英 學大辭彙を編集し修辭家としても知られ哲學者とも見做され隠然當時の文壇に

君臨し其の博覽と傲岸と謹嚴と多能との故によりて普く雅俗の尊敬を博し英國十八世紀文學の一大代表者と見做さるゝものは有名なる博士サミュエル・ジョンソンなりとす。さもあれ彼れがかくの如く推重せられ今日に至るまでも英文學史上に其の盛名を留め得たる由縁は必ずしも其の文學上に於ける功績の力にはあらず否彼れが著述其の物のみに就きて彼れを評すれば彼れはスフットポープ、パークリー、ペルク、フィールディング等の下に位す。然るに彼のスフットと併べ稱せられて英國十八世紀文壇の最大文豪の如く重んぜらるゝは其の理由二あり、一は其の個人としての行實及び其の僥倖に於ける勢力、二は古今有數の好傳奇家ボスウェルを其の景仰家中に得て其が一生の閱歷及び行爲性癖の未までも之れを後世に傳ふることを得たるが故なり。

一千七百〇九年七月十八日リッチフィールドの書肆マイケル・ジョンソンと其の妻との間に一男兒生まれき之れをサミュエルと名づけたり。生まれ落つると間もなく俗に「王病」と稱せし瘰癧やうの病にかゝれりしかば三歳のころ母に伴はれてロンドンに赴き女皇アーレンに謁し其の「親治」を受けしことありといふ。はじめリッチフ

ールドの高等小學やうの校舎に學び一千七百二十八、二十九年オックスフォード大學に入るされどベムブローク校に在りしこと僅に十四月ばかりにして一旦退校し同三十一年また入學せしものゝ如し。同年父みまかり家計艱難を極めたり。爾後五年間の事蹟詳かならぬどヘイウッドにて暫時學校教師たりしは此の間なり又「アピシニアへの航海」と題せる抄譯物を某書肆の爲に物せしも此の間なり。それより二十年間はジョンソンが生活的鬭争の時代にして衣食の爲に俗書肆に役使せられ鬱憤を忍び不平を呑み病を力めて筆を執り而も屢、衣食に缺乏したりし時代なり。彼れは倨傲にして怒り易く加ふるに怖ろしき顔色して學童等を叱咤する癖ありしかば教師としては悉く失敗し著述家としても兎角に讀者受け妙ならざりき。其のころ自家よりも廿一歳ほど年長なりし寡婦と婚して其の財産もて一時其の私塾を維持せしかどこれすら水泡に歸するに及びて一千七百三十七年僅に「二ペンス半」を懐にして其の弟子ガリソン(後に英の柏莖とも稱すべき名優となりしが「リリック」と共にロンドンに立ちいで種々の困苦の後『紳士雜誌』(The Gentleman's Magazine)の發行者エドワード・ケイヴといふ者の雇となり)一七三八(ヤがて「ロンドン」)

題したる一篇の諷刺詩を公にせり、こは羅馬の名家ジュベナルの作を摸倣せるものにて之れに對する報酬は十ギニーなりきといふ。是れジョンソンの文名の世に知られしはじめにて未だ所謂 *Grub Street* 的生涯を脱却せざりし頃の事なり。かくて同三十九年より同四十四年までは同じく主と嘲世諷俗の筆を揮ひし時代にて彼の *“Debates in Magna Lilliputia”* と題して國會の傍聴筆記を四年間『紳士雜誌』に物せしも此の折なり。其のころ詩人サエーと交はり其の死を悼みて(二七四三) *“The Account of the Life of Mr. Richard Savage”* を世にいだせり時に一千七百四十四年なりき同四十五年にシェークスピアが『マクベス』を評論せる一小冊子をいだし同四十七年には未曾有の英國大辭典編纂の案を起しチェスタルフィールド卿にたよりて此の大業を成さんと欲して其の志を得ず空しく八年を経過しき。之れより先き一千七百四十八年ハムプテッドに暫時の閑日月を樂しみ其の間に其の傑作の韻語 *“The Vanity of Human Wishes”* を作し翌年に至りて出版しき。是れはたジュベナルの諷刺詩第拾を摸したるものなれど其の前作『ロンドン』に比すれば優ること幾等尠くとも著者が博學と卓識とを證し得て餘ある作たり。此の時に當たり

其の舊弟子タボット・ガリーリック名聲已に隆々、今や有名なる *Drury Lane Theatre* (ドリーリー、レオン座)の座主となれり彼れ其の舊師の未だ其の志を成さず不遇の境にあるを痛み懇にジョンソンを勸諭して其の舊作脚本に若干の筆を加へしめ竟に之れを劇壇に上せたり(一七四九二月)『マホメットとアイレンス』と題したるもの是れなり。ジョンソン此の作によりて殆ど三百ポンド潤筆料を得たりきといふ。後に此の劇を修正して世にいだし改めて『アイレン』と名けたるが、こは脚色も單純、人物の性格もちほろげなる劣作なり。

今やジョンソンの名聲漸く世に知らるゝに至り彼れはアチソン、スチール以後暫く中絶の姿となれりし定期刊行の社會的論文を發行せん企圖あり、すなはち一千七百五十年三月はじめて *“Rambler”* 『逍遙者』といふ雜誌やうの定期物を發兌せり此は同五十二年の三月まで續きたり其の間號數五を除くの外は悉くジョンソンの單獨の筆に成れりき。はじめは主筆の名を匿したりしが其の文致の殊別なるが爲に幾ばくもなく世に知られき按ふにジョンソンが文は總じて華に失し巧に流れ誇張に過ぎ莊重に過ぎたり而して其の雜誌氏としての筆は此の『逍遙者』に於て

は尤も拙く重くろしく後にホウクスオスが『冒險者』(雜誌)に寄せたるものに於ては軽く巧に更に "Idler" (雜誌)の主筆たるに及びて漸く洗鍊の域に達せり。さて彼の『英國大辭典』の編纂も此の間に於て徐々其の歩武を進めつゝありしが一千七百五十五年二大巻となりて現はれたり此の辭典の卷頭に添へたる二文章は散文家としてのチンソンが長所美所及び其の此の大業を成就するに至りし迄の苦辛經營の如何に慘憺たりしかを知らんとすれば明かに必讀の價あり就中彼のチェスタルフィールドに與へし書の如きは辭簡に意切に諷刺婉曲にして深刻なり今尙諷刺文の上乗と稱せらる。一千七百五十八年四月 "Idler" と題せる『スペクテートル』に似たる定期刊行の文集を發兌し幾ばくも無くて廢刊せしが尙ほ同種の小品をば "Universal Chronicle" といふ新聞紙に寄せ同六十年の四月まで繼續せり。チンソンが小品は到底アチソン、スチールの輕妙に似るべくもあらねど其の人物評、就中 Dick Minin の性格を剖拆せる一文の如きは其の觀察の銳利にして人性の知識に深遠なりしを證するに足る。但し同じころの作の最なるものは後に "Passelas" 物語と改題して今日尙讀書社會にもてはやさるゝ "The Prince of Abyssinia" といふ

ふ寓意小説なるべし。こは其の亡母の葬式費にとて僅に七夜のうちに急作せしものにて當座に落手せし報酬は一百ポンドに過ぎざりきといふ。此の作一千七百五十九年に公にせられ後僅に三週程を経て結構頗る相似たる『カンヂード』物語(佛蘭士の文豪デルテールの作)世に出でしかばチンソン深く其の暗合を奇とし、かく相接近して世に出でずば二者のいづれかが他を學びたりと見做さるべきにといへりき。されど其の相似たるは皮相のみにて着相も文脈も全く相異なれるものなり。此の作眞の小説としては重んずべき程の價値もなければチンソンが人生觀の結晶として又英國十八世紀社會の反映として一讀する價あり。

さて『英國大辭典』の成りしや英國皇室は此れを賞して年金三百ポンドを其の著者に贈與せり此れよりチンソンが家計やゝゆたかになりぬ。彼れが安樂椅子に倚りて文壇の先輩をもて目せられ其の博覽と其の傲岸と其の謹嚴なる行實とによりて昂然衆詩文人に君臨せしは此の際なり。一千七百六十三年にははじめてチェームス、ボスエルと相知り同六十四年には有名なる文學會を組織せり其の會員の主なりし者はチンソンを首座としてレイノルズ、パルク、ゴールドスミス、ハウキン

ズ及びガリック、フォクス、ボスエール等なり。之れをジョンソンが最得意の時代とす。之れより死に至るまでの間に左の諸著あり。

『シモン・スピア註釋』(一七六五)

“The False Alarm” (論文、一七七〇)

“The Thoughts on the late Transaction respecting to the Falkland Islands” (論文、一七七二)

“The Patriot” (論文、一七七四)

“Taxation on Tyranny” (論文、一七七五)

“Political Tracts” (論文、一七七八)

“Journey to the Western Islands” (紀行、一七七四)

“Lives of the English Poets” (英國詩人傳、一七七七)

“Prayers and Meditation” (祈禱及び禱想) 『ジョンソン死後出版』

“Sermons” (説教文、同前)

“Diary in North Wales” (北ウェールス施行日記、同前)

ジョンソンは一千七百七十五年オックスフォード大學よりH.D.の學位を得、一千七百

八十四年十二月當代の雅俗に畏敬せられて其の生を終へき行年七十五。ジョンソンが詳傳は民友社より『十二文豪』の號外として發兌せし内田貢氏が『ジョンソン傳』あり、就きて見るべし。

第十一章 史傳の著者ヒウム、ロベルトソン

ギッボン、ボスエール

哲學者としてはパークリット以後に世に出でたる英國、否歐洲思索家の最大なる者の隨一に位し、就中功利論テイタリヤニスムの一導師として名高き、また歴史家としては兎も角も英國史學に一紀元を劃すべき第一筆と稱せらるゝは一千七百十一年に生まれて同七十六年に世を去りしタキッド、ヒウムなり。蘇都エヂンバラ府に生まれて幼きより讀書を好み二十三四歳のころ已に一大著に志し、一千七百三十九年に『人性論』(Treatise of Human Nature)前二卷を、翌年に至りて其の第三卷を世にいだせり。又同四十一年と二年との交に『論文集』二卷を公にせり。“Essays, Moral and Political”と題せるものは是れなり。ヒウムは其の思索の方法に於てはあくまでも近世風なりと雖も其の政治を論ずる立脚地は悉く保守的貴族的にして常に民政主義に反對せり。

其の文章は明晰透徹優かに論文家の師表たるに堪へたり。一千七百五十年には『Dialogues on Natural Religion』『自然宗教問答』を脱稿し同五十一年に『Principles of Morals』『道德原理』を同五十二年には『Political Discourses』『政治論集』を著せり。此のころより家計やうやく釋かに其の無神論者たるが爲の故に許多の敵ありしにも拘らず名聲はた頗る揚がりぬ。翌年其の名著『大ブリテイオン史』の稿を起こし一千七百五十四年其の第一巻デュームス一世紀及びチャールス一世紀を世にいだせり。この書のはじめで出でしや讀書社會は甚しき詬罵と非難とを以て之れを迎へたり是れ職として著者が保守主義と無神主義とが讀書社會をして不快を感ぜしめしに因るならん。みづから當時を叙して曰はく予は異口同音に難ぜられ毀られ甚しきに至りては嫌惡せられき中畧英蘇愛三國中苟も位階若しくは文字あるの徒にして予が著を忍容せし者殆ど一人だにあるを聞かざりきと。さて失意消望のあまり一たびは姓名を變じ長く祖國を辭して佛國に歸化せばやとまで思ひたちしが更に勇を鼓して引きつゝき殘卷を公にし竟に一千七百六十三年に及びて完結せり而して世間また漸く其の價值を認め來り史家としての彼れの名聲一時

社會を震動するに至れり。ヒュームの著は之れを今日の史學的標準より評すれば史材の選擇も精ならず考證も粗漏膚淺なる所多く事を叙述する法もまた宜しきを失したれど史學尙甚だ幼稚にして歴史研究法の未だ具はらざりし頃の著書としては確かに特筆する價值あるものなり。按ふに此の著の第一の長所は其の玲瓏透徹なる文致なるべし彼の幽玄の哲理をすら通俗明晰に談論するを得し彼れは此の著に於て其の得意の筆を最も圓滿に利用しはじめて歴史をして一種の玩讀すべきものたらしめき。其の文脈こそ同じからざれヒュームが史に綴る時の目的は彼のマコーレーと共に事實を傳ふるのかたはら讀者を娛樂せしめんとするにありしなり而して此の二目的のうち後者間々前者を壓倒して興味を多からしめんが爲に幾分か事實を曲寫し或は疑はしき野史巷説をも濫引して正史の尊嚴をそこなひし跡多きは憾むべし。就中ヒュームが史の大疵とすべきは其の政治上の偏見なり彼れは王權を偏重して民權自由の説を蛇蝎視し此の見解によりて史的事實を取捨推定せるが故に殆ど正史の半面を埋没するに至りし事是れなり二つには生中に哲理性的口吻をもて是非曲直を辨析せるが爲に定見無き讀者を誤

らしむる虞あり。さもあれ其の雅馴にして明瞭なる史筆は、慥くとも當代以前には見ざる所、英國史壇に一紀元を開きし導火といふの稱は何人も彼れに否拒せざる所ならん。

此の大著の印刷せられつゝありし間にヒウムは更に他の緊要なる一著に筆を染めたり。それは彼れが懷疑哲學の全豹を示せりともいふべき『宗教の自然史』(Natural History of Religion) なり。さて一千七百六十三年以後は佛蘭西に移り住みて三年餘はパリに駐在の英國公使が秘書官たりき。彼れは本國に於てよりも該國人間に聲譽高く且頗る優待せられしなり。後また英國に歸りて一千七百六十九年までは内務副秘書官たりしが退職の後にはエチンバラに住みて身を終ふるまで妻無く相應に裕かなる生活を送りきといふ。懷疑哲學者としては今尙大思索家の一人として推重せらるれど文學の方面よりいへば哲學的文章家としても彼れはパークリーの熱火なく歴史的文章家としてもギッポンの莊嚴と瑰麗とを缺く所詮彼れの純文學上に於ける特長は其の雅馴と平明となり。

ヒウムにつぎて當代の史學壇に名高きはキリアム、ロバートソン、一七二一—一七

九三死)なり。彼れはヒウムを模倣せしにはあらぬと不思議にも其の氣脈を同らし其の短長をも同うせり。蘇のミッドロシアンに生まれて一千七百四十三年蘇國教會に入りはじめはエチンバラの政事界に民間の名士として知られたりしが同五十八年『蘇國史』を世にいだすに及び史家としての名突然として轟きたり。此の著の褒賞として彼れはたいちにエチンバラ大學の總長とせられ兼ねて蘇國ヒストリカ史官に任ぜられき。一千七百六十九年『チャールス五世朝の史』を著しつゝいて種々の史的著述あり其のうち『チャールス五世朝の史』は古來筆力の供し得べき尤もゆたかなる報償を得たりきと稱せらる。

ロバートソンの史も考證穿鑿の精ならざるとヒウムのにひとし故に嚴密に謂ふ正史的敘事は到底彼れが著に望むべからずと雖も其の文致の雅馴にして或は景物を狀寫し或は事件を叙説し過去の事蹟をして髣髴讀者の眸頭に現前せしむる筆力はヒウムに優るとも劣らざる妙あり『チャールス五世朝の史』が幼時のカールイルをして史を愛好する念を喚起せしめきといふも偶然ならんや。只揣摩臆測して妄に過去を論斷し去る弊はロバートソン、ヒウムと其の失を一にす。

ヒウム、ロベルトソンに次ぎて其の名と其の功と二者に超ゆる者のエドワード、ギッポンドス(一七三七生、一七九四死)。苟も文學史を講ずる者は多少の感動無うして此の名を口にする能はざるべし。そはひとり彼れの名の第十八世紀中に歐洲文壇の産出せし最大著の隨一に相伴へる爲のみならず其の著者の性行が幾多過失の之れに附隨せるにも拘らず眞に大文士たるの勇氣と熱誠とを代表して餘りあればなり。學に篤きと彼れの如く誇街の失無きと彼れの如く修辭に忠なること彼れの如く而して終生一日の如く専ら學文の爲に身を獻じたる彼れの如きは今古東西に見ると稀なり。彼れは智識の爲に生活し且つ其の智識を百銀千鍊し以て不磨の鐵壁とし之れを萬古に遺さんとして生活せしなり。彼れの學を修むるや名の爲にせずして學の爲にせり故人知らざるも意とせず名著れざるも憾まざりしなり。後進の類々として彼れを凌駕して讀書社會に虛名を知らるゝ時彼れは孜孜として獨り古記録推裡に埋頭して未來の大著述に専念し時勢の遷移にも驚かず人生の頼むべからざるをも恐れず其の業の過大至難にして成功の期し易からざるをも恐れず泰然として徐ろに大成の機を俟てりき。其の大著に心

を潜めしこと前後十五年彼れ壽ならざりきと雖も幸ひにも其の業を卒ふるを得てギッポンドスが『羅馬衰亡史』は永く史壇の貴寶となりぬ。若しヒウム、ロベルトソンを以て英國史壇に新紀元を劃すべき第一筆を着けしものとせばギッポンドスが此の著は更に一揮筆して全歐洲の史壇に新しき紀元を劃し得たるものとも稱ふべき也。』後に語るべき詩人クレイにひとしくギッポンドスは許多の同胞中唯ひとりのみ幸ひにして生存せし孱弱の見なりき。ロンドンのほとりなるパトニーに生まれき。其の家は舊家にして祖父の代までは豪商として知られたりしが父の代に至りて家産蕩盡し一家俄然として零落せりされど古川に水涸れずして流石に幾分の餘裕ありしかば多病孱弱のエドワードも醫藥の効によりて辛くも生ひたち齡十五歳の時知力も學識も尙いと淺劣なりしが幸ひにオクスフォードなるマクダレン大學に入學するを得たり。大學に於ける經歷は些も彼れを益せざりしものゝ如し。みづから曰へらく「予はマクダレン大學に十有四ヶ月を費やししが是れ實に我が生涯中の最も徒爾にして何の裨益することもなかりし時期なり」と。按ふに當時の大學は一種の精神的懶眠に耽るの處、徒らに死學を講修して靜坐默考

のうち生氣を鎮磨するの場たりしなり。十六歳の時感ずる所ありて從來奉じたりし新教を抛ち俄に舊教の信者となりき。而して此の件に關しては其の自傳(Memoirs)中に詳密なる記叙を遺せり。按ふに宗教に熱心ならざるキッボンにして此の事ありしは彼れ自からも言へる如く全く佛の名家ポツスエー(及びパスカル)が精嚴なる論理に動かされて智の方面より改宗せしなるべし情と信念とは曾て其の宗旨論に伴はざりしものゝ如し。さる程に新教信者たりし父はかくと聞きて大に駭きキッボンに嚴命して之れを瑞西なるロリサーンに逐ひそこの一牧師に託して更に新教に復宗せしめんと欲しき。一千七百五十四年に至りキッボン再び新教に復宗し尙ロリサーンの地に止まると五年其のはじめて文學を研鑽せんの志を起こし、は此の瑞西寄留の間なり。まづ希臘羅甸の名著を博涉し更に佛國近世の諸名著に及び厭讀晝夜を捨てず鑑裁はた宜しきを得たりき。さて一千七百五十八年には英國に歸りやがて募られて國民兵となりぬ。學業は之れが爲に阻礙せられしかど此の兵事的經驗によりて彼れは書籍の供する能はざる若干の新智識を得たり彼れは兵職の身に適せざるを認めながらも尙兵學に心を潜めて

深く講究する所ありし結果は其の兵戰を叙狀する筆の雄勁明透なるに現れたり。彼れ其の自傳中に叙して曰はく「ハムプシヨア民兵の隊長も(讀者或は打笑むならめど)羅馬帝國史の著者にとりて必ずしも無用ならざりき」と。未だ民兵の士官たりし間に其の處女作「Essai sur l'Etude de la Littérature(佛文)を著せり、文學研究論」の義なり。一千七百六十三年に至りて兵役を免ぜらるすなはち直ちに大陸に渡り佛瑞兩國を漫遊して伊太利に入るや彼れが一生の大事業の考案は忽然として其の念頭に閃きいでたり。みづから曰はく「正に是れ羅馬にての事なりき時に一千七百六十四年十月十五日予は彼の大殿堂カピトルの廢跡の間に沈思しつゝ坐せりし時、彼の跣足の貧僧等フライアスがデピトル神の堂内にて夕勤の頌歌をうたひつゝありし時なり、羅馬衰亡の事蹟に關する一大著をなさん念のはじめて我が心頭に躍出せしは」と。さて其の自傳中の語によりて案ずるに彼れは英國に歸ると間もなく史材の蒐集に着手せしものゝ如し然るに此の時に至りては家計いよ／＼不如意となり父子共に貧困に沈淪せり。かくて一千七百七十年までの事蹟は詳かならず此の際彼れは或二三の断片的史的著述を試みしが功を成さずして中絶しき。父の病死せ

しや地方を去りてロンドンの場末に移り獨身にて家を構へ時の文學社會と交遊せん企圖なりしが其の性交際に適せざりしにや居ること年餘尙何等の注目をも世間より牽かさりき。一千七百七十年より同七十三年までキッポンは政として『羅馬衰亡史』前三卷の著述に従へり而して其の信友ヂン、ペーカル、ホルロイドすら此の著の大事業たるを夢にだに想ひ得ざりきと云ふ。みづから曰はく稿を起すのはじめに當たりてや百事悉く茫々たりき此の著書の標題すら帝國衰亡の眞時期すら其の緒言の限界すら、篇章の區劃すら、敘事の順序すらと。かくて七年の後草稿の成りたる分を悉皆焼き棄てんとせしことも屢ありき。蓋し其の修辭に苦心せしこと驚くべきものあり後々の章はさもなかりきといへども其の第一章の如きは三度悉く稿をかへ第二第三の如きも亦の〳〵二回づゝ稿をかへきといふ而も件の劈頭の數章は全篇中の尤も妙ならざる部分なり。文の體制を一定する困難と冒頭落筆の至難なるの證はキッポンの實例に於て之れを見るべし。

一千七百七十四年より同八十三年までは衆議院議員となりて英國々會に在りしが政治家としては特に記すべき程の功過無し。一千七百七十六年『羅馬衰亡史』の

第一卷ロンドンにて出版せられき。世人は大喝采をもて歡迎し男女争うて購ひ讀めりき。同八十一年第二第三卷出づ第一卷に比すれば辭意双つながら優りたれど讀書社會の歡迎は第一卷に劣りたりき曲や、高うして俚耳の悦ばざるがため也。加之第一卷なる最後の二章は頗る僧侶として不快を感じしめ論難斷罵漸く甚しきに至りしかば暫く續稿の筆を止めて之れに答へざるを得ざりしかと彼れもど論辯の術に長せず隨うて敵者と闘ふの不利なるを感じき。さればにや敢て前説を取消ざりしも其の基督教に對する調子は次第に穩和となり中正となり復た彼の有名なる第十五第十六章の過激なる敘説を見ざるに至りき。此の苦心經營の間に家計ますます不如意となりしかばやがてロンドンなる其の家をすて家財を提げて遠く瑞西なるロウサーンに移り舊友アイヴルダンと共に住みて専ら其の業に潜心せり。さて第四卷はロンドン發足の前に成り第五と第六とはロウサーンにて物せられき。彼の人口に膾炙したる卷尾の數行を綴り果てしは實に一千七百八十七年六月二十七日の月夜其の夜將に半ならんとせし程なりきとぞ。同八十八年の夏最終の三卷も悉くロンドンにて發售せられき。それより

後のギッボンが身の上はまた特に記すべき程の事なし。其の身軀の漸衰して宿痼の再發せしと同時に引き續きて其の知友をも失ひ剩へ佛國革命の擾亂の爲に倉皇瑞西を去りて本國に走らざるを得ざるに至り一千七百九十四年一月十五日竟にロンドンにて逝りき時に行年五十七。終生妻を娶らざりしかど其の最初の意中の人スーサン、チツクルに對しては永くプラトニック的戀愛を持續せりきといふ。又交友に篤く親戚に忠なりき。宗教に關しては自由思索家を以て目せられ或は懷疑家と稱せらる。又歴史家としては前にもいへる如くヒウム、ロペルトソンに優ること幾段なり蓋し他の二家の今尙史家として文學史上に推重せらるゝはむしろ文章上の功績に由れるなれどギッボンは然らず彼れが大著は今も尙信憑すべき史として讀まるゝなり。フリーマン曰はく。

近世の考證の爲に(史壇以外に)排除せられざる若しくは排除せられんとせざる十八世紀の史家はひゞり彼れあるのみ(中略)彼れが結構(考案)は百科全書的(周知普遍)にして之れを實施するの難梅はた精確周到成心僻見の弊無く考證悉く據る所あり、彼れが著は永く史家に重んぜらるべし。(以上後略)

と。『羅馬衰亡史』はぶのづから三大部に分かる。卷初よりコンスタンチンまでを第一部としコンスタンチンより羅馬滅亡までを第二部としさてそれより東羅馬の首都コンスタンチノープルの陥落までを第三部となさば更に穩當なりしならん。實に是れ古今有數の大歴史なるを十年一日の如く些も倦める色無く竟に之れを完成せし勇氣と手腕とは眞に推服すべきものなり。さて彼れが文致につきては其の妍媚は殆ど何人にも瞭然たるべき筈なるに不思議にも批判は今尙一定せずされど嚴密に評すれば其の雅健と流麗とは人皆の認めざるを得ざる所也又其の些事を叙狀する筆の動もすれば莊嚴華麗に過ぎて兎もすれば波瀾變化に乏しく洒脱快活の趣致に貪なる是れはた敵味方の認むる所なるべし。さもあれ此等文病は重に第一卷に於て認めらるゝ所、卷の進むに隨うて筆もまた頗る進めるが故に全軀より評すればギッボンが史筆は此の莊嚴なる大歴史に相應したるものといふべく氣力あり威嚴あり精嚴また瑰麗、永く史筆の表極たるに稱へり。さて史家としては十八世紀の文壇また以上の三名家に匹すべき者なしされどこゝに個人の評傳を著してマコーレーには傳紀家の王と稱せられ隠然英國の文壇